
いちごいちえとひめしあい

安西 鶴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いちごいちえとひめしあい

【コード】

N8640V

【作者名】

安西 鶴

【あらすじ】

ピアプロにて、イラストあり

<http://piaapro.jp/saihittei>

1・コップと麦茶

満員電車で揺られて、駅から少し歩いて学校に行つて、授業を受けて、寄り道しつつ家に帰つて。そんな平和で平凡な毎日が続くと思つていた。

「ハイハイハイ！おつかえりなさい！」

玄関のドアを開けた瞬間に安っぽいクラッカーとキャッチセールスの様な甲高い声が飛び込んで来た。私はこの状況を即座に判断するだけの脳は持ち合わせてなかったので、一先ず無言でドアを閉めてみた。

「何で閉めるんですかー？」

頭の中を整理したいからです、と言いたければと言葉が出て来なかった。住人である私を差し置いて見覚えの無い女の人がきよとんとした表情で私の顔を覗き込んでいた。

「緋織ちゃん、お帰りなさい。」

「お母さん、この人誰？」

「心理学部の方ですつて、学生証も本物だったし緋織ちゃんに用があるつて言うから。」

毎度ながら母には警戒心や猜疑心と言つた物は無いのだろうか？相手が女性だったからかも知れないけどもう少し気を付けた方が良くと思うなあ…切実に。

「それで何の用でしょうか？」

制服のまま女性と向かい合う形でテーブルに座った。母は呑気にテーブルにコップに入ったお茶を置くとキッチンへ戻って行った。と、いきなりテーブルにバサバサとカタログの様な物が広げられた。カラフルでポップなデザインのロゴ、そして目がキラッキラしてるキャラクター絵と目が合った。

「実はですねえ！」

「帰って下さい。」

「人の話は最後まで聞きましょうよお！ちゃんとバイト代も貰えますよ？」

「余計嫌な予感しかしません、直感的に嫌です、興味無いです、帰って下さい。」

カタログをぎゅうぎゅうと押し付け合う形になっていると横から間延びした声が聞こえた。

「緋織ちゃん、お話位聞いてあげなさい、わざわざ3時間も待って頂いたんだし。」

初対面の人間を3時間も家に上げないで欲しい。それにこう言う強引なタイプの人がこの母と3時間も居たのならある事無い事吹き込んで洗脳とかされていそう…。またおかしな壺を買う契約書にでもサインさせられたんじゃないだろうか？クーリングオフの手続きで役所の人と顔馴染みなんてシユール過ぎて笑えない。

「ほらほら、お母さんも言ってるんだし、見るだけ見てみましょうよ、ね？」

軽く眩暈を覚えてげんなりと椅子に座り直した。女性はつきつきと

した様子でカタログを目の前に並べて行く。ちらりと見やると『キ
ンキュンの嵐?!』『主人公はアナタ!』なんてロゴやらハート
マークやらが散りばめられている。

「今回ウチの学部の一大研究がゲーム会社に認められたんです!あ、
ゲームとか興味ありますか?」

「無いです。」

「この会社の『キンてる』シリーズの最新作に心理学効果に基い
たシナリオを提供する事になってですね。」

全く私の話を聞いてない女性は、うんざりする私を他所にそれから
30分位切々と語り続けていた。最早目が星屑でも見てそんな勢い。
話を聞いたらさっさと追い返そうと考えていた。

「あ、そうそう、お母さんもう承諾しちゃったから。」

「えっ…?」

私は思わずコップを倒していた。

2・ダメ、轢き逃げ

母の衝撃発言から数分後、私はタクシーの中に居た。詳しい説明を
したい、と言っ言葉に押し負ける形で…いや、むしろ聞かざるを得
ない状況に追い込まれたので渋々居るんだけど。

「そんな怖い顔しなくても大丈夫ですよ？普段通りにしてれば良い
んですから。」

そんな事言われたって訳も解らずゲームだバイトだのと並べられ、
拳句勝手に承諾されていたのだからとても笑顔を見せる気分にはな
れなかった。まるで『ドナドナ』の売られて行く牛みたい、なんて
思いながら何度目かの溜息を吐いた時だった。

「うわあっ?!」

運転手の変な声と共に車にドンツと重い衝撃と振動が走った。咄嗟
に最悪の状況がぐるぐると回った。放心していると、あろう事か運
転手はハンドルを回し今にも発進しようとしていた。

「な、何してるんですか?!」

「う、うわあああっ?!俺じゃない!!」

いや、貴方ですよ…と内心ツツコミを入れつつドアを開けて車外へ
出ると、数人の人が倒れた男の人を囲んでいた。血飛沫が飛び散っ
てる凄惨な光景じゃなくて少しホツとしたけど、男の人は腕を押さ
えたまま蹲って顔を歪めていた。多分骨とか折れてるんだろっな…
私じゃないけどごめんなさい。立ち竦んでいると後ろからグイッと
押しのけられて、蹲る男の人に女の子が駆け寄った。

「志揮兄！大丈夫?!」

「無理…。」

妹さんかな?と思いつながら見ていると、その子は私と目が合うなり苛立った様に言った。

「アンタ等何ポケットと見てんだよ?!誰か救急車!それから警察!オイそのオッサン!

バックレようとか思ってたんなよ?!」

指差した方向には明らかに汗びつしよりな運転手が居た。ありがとう、逃げられると正直私も困る所だった。警察と救急車を呼んでいると、素っ頓狂な声が響いた。

「あああああああ ?!ななな…七海さん?!私の一押し力リスマ美容師キャラがあああ!!!」

女性の叫びで周りの空気がかなり微妙な物になった。一時的とは言えこの人の関係者なのが辛い。動揺しているのかそれとも別の理由なのか、女性は涙目で男の人に駆け寄る。

「あははは…ごめんなさい、腕やっちゃいました。」

「みたいですねえ…どうしましょう?」

「おいオバサン!志揮兄怪我してんのに何訳解んない事言ってるんだよ?!」

可愛いのに言葉乱暴だなあ、勿体無い。それに何だかまた嫌な予感がする…。お願い、当たらないで。

「拓十、オバサンは失礼だよ」

「たくと…あ、もしかしてこの子、この前言ってた甥っ子さんかしら?」

「ええ…兄の末っ子の拓十です。」

「良いわ!じゃあ君代役って事で宜しく!詳しい話はこれからだから一緒に行きましょう!」

「俺に触るな!」

微妙な空気を更に異様な物にする会話内容が繰り広げられる中、私の脳はやっと言葉を理解して密かに驚いていた。

「あの子男の子だったんだ…。」

3・ヘタレトマト

救急車やら警察やらが来た後、私とさっきの男の子、七海さんは広々とした会社の廊下を歩いていて。制服が場違いな気がして凄く居心地悪い。時々チラチラ振り返る人も居るし、ひそひそ声も聞こえる。そんな重い空気の中、前を歩いていた女性がエレベーターホールで立ち止まった。

「二人共暗いですよー？お通夜じゃないんですから！ホラホラ、いっそ手とか繋いじゃっても！」

強引に手を引つ張られて触れた瞬間、弾くみたいに手を払われた。びっくりして横を見ると七海さんはトマトみたいに真っ赤な顔をしていて。

「…ヘッターレ…。」

「…んだと?!」

今時手が触れた位で此処まで動揺する人も珍しいでしょうに、自覚無いのかな？それとも苦手とか？と、ばつ悪そうにこっちを睨んでから、ぷいと目を逸らして呟いた。

「手前エみてえな尻軽と一緒にすんな、大体…ごふっ?!」

言い切る前に手が出ていた。正確には平手じゃなくて拳が。

「何すんだよ?!凶暴な！」

「私尻軽じゃないもの。」

「知るか!…あー…痛ってえ…。」

認定、コイツ敵。顎をさすりながらぶつぶつとこぼす姿を見ながらそんな公式が頭の中に出上がっていた。

私は金髪が目立つ事もあってか小さい頃からおかしな人によく遭って来た。中学に入って胸が大きくなってからはそこに痴漢の類もプラスされた。最初は怖くて仕方なかったけど、周りの勧めで武道を習ってからは反撃する様になっていた。それでも平気な訳じゃなくて、むしろ触られる度、遊んでるとか言われる度に嫌悪感だけ増して行っただ。

「喧嘩は良くないですよ？これから恋をするかも知れない相手なんですから。」

この人の唐突さには慣れた…つもりだったけど。私の脳はまだまだ驚く余白があったらしい。

「無理です。」

「おい、失礼過ぎるだろ。」

「だって初対面で尻軽呼ばわりするヘタレにどうやって恋しろって言うの？」

「真顔で俺を全否定するな！」

「じゃあ、貴方私に恋出来る？」

「ぐっ…?!」

見る間に耳まで赤くなって顔ごと逸らした。何だか私が苛めてるみたい…まあ、苛めてるんだけど。何とも形容し難い空気が漂う中、こちらに近付いてくる数名の足音が聞こえた。

「おい、佐藤女史、何やってんの？こんな所で。」

「甘酸っぱい二人を見学中、あ、そつちも合流出来たの？」

「うん、この子達で最後。大人組はもう説明終わってるしね。」

やり取りからして、私達と同じ状況の人がまだ居るんだろうか？と後ろに隠れてる人達を覗き込んだ。

「ひお…？」

「え？」

「わぁ〜ん！ひおだぁ〜ん！！！！」

「しふおん?!」

涙声で飛び付いて来たのは意外にも、今日も学校で会った筈の友達だった。

4・銀の様な、緑の様な

涙声で飛びついて来た友達、桜華しふおんとは同じ家庭科部の友達だ。おっとりしてて可愛くて…でも大人しいもんだから直ぐナンパとか痴漢とか、一度誘拐されそうになった事もある。

「しふおんにまで何したんですか?!」

「人聞き悪いな、君と同じだよ。佐藤女史から何も聞いてない？新作ゲームのデータモデルだって。」

正直あのキラキラ目のパンフレットを見せられてからこの女性の話は殆ど右から左に流していた。少し迷っただけど、話を聞いてなかったのは私の落ち度よね…。

「…すみません。話あまり聞いてませんでした…。」

そう言っただけで私が頭を下げると、目の前にふつと影が落ちて大きな手がくしゃくしゃ私の頭を撫でた。顔を上げると銀の様な緑の様な、不思議な色の髪が目に見え込んで来た。その色に思わず一歩後ずさると同時にエレベーターの扉が開いた。乗り込んだエレベーターは外が見える形の物で、すっかり暗くなった外には夜景が光っていた。

「綺麗、ね、ひお、見て見て。」

「本当だ…綺麗…。」

横を見るとその人はもう手にしたファイルか何かをパラパラと眺めていた。私は何が書いてるのか解らず頭の中に『?』が一杯浮かんでいた。さっきはびっくりしたけど改めて見直すと凄じい髪の色。緑っぽい銀色と言うか宝石みたいな色。…ウィツグかな?

「痛っ…?!えっ…?!」
「あ…す、すいません!」

ついつい好奇心で引っ張ってみたけどツラじゃなかったみたい…染めてるのかあ…。と、エレベータが音と共に止まってゆっくり扉が開いた。皆に続いて出ようとする髪にツンと引っ張られる感覚があった。何かに引っかかったのかな?

「え…?」

振り向いた時

「無防備だね。」

今にも触れそうな距離で

「それと無自覚。」

獲物を見つけた獣みたいな目で

「…楽しみ…。」

彼は絡み取った私の髪に口付けた。

「ひーおー？」

「い…今行く！」

大声で返事をして、大袈裟に振り払って、混乱した頭をリセットするみたいに走った。

5・遠慮なく？

会議室と思われる広い部屋で私達は書類の束を配られた。あのキラキラ目の絵やロゴは見当たらず、空と街の写真の上に『』のマークが描かれていた。と、ホワイトボードに女性：佐藤さんがキュッとペンを走らせた。

「キュンてみよう！」

眩暈と頭痛が脱力感が倍になった。七海さんも溜息を吐いてがつくりと…むしろげんなりとしている。そんな中目を輝かせながらしふおんは言った。

「へえ〜何か面白そうだね、ひお。」

そんな純粹な笑顔で聞かれても正直困る。私は何とも言えず苦笑いで首を傾げるのが精一杯だった。すると後ろからぬつと手が伸びて、私としふおんの書類をペラリと捲った。

「佐藤女史の説明だと解らないだろうから、ここ、ちゃんと読んで。」

「はあい。」

「は…はあ…。」

しふおんが居るから、かろうじて手は止まったけど、実は引っ叩きたい衝動に駆られていた。この人いちいち近い！そして何で私達の後ろに居るの?! 恐る々々振り返る。壁にもたれたまま立ってこっちを見ている。目が合うと少し笑う…さっきからその繰り返し。私は聞こえない様にひそめた声でしふおんに話し掛ける。

「ね、しふおん、あの人何？一緒に来たよね？知り合い？」

「うっん、今日が初対面。心理学部の学生証とか名刺とかちゃんと見せてくれたし。説明も凄く丁寧だったよ。」

「うっん…。」

「でもちよつと楽しみじゃない？だって、お姫様扱いして貰えるんですよ？」

「えっ？何それ？」

聞き慣れない単語に思わず声が大きくなってしまい、周りの眉目が集中する。ホワイトボードに何やら色々書き殴っていた佐藤さんは、私を見て実に嬉しそうな笑顔を見せてこう言った。

「そうですね？お姫様ですから。大変だったんですよ？女の子9人と条件に合う男性9人も集めるの。」

ですから、と言われても解らないと思う。私は慌ててさっき言われた書類に目を落とした。

『つり橋効果で恋愛感情は本当に生まれるのか？』

『公衆の面前で告白したら上手く行くのか？』

『萌えキャラは本当に萌えるのか？』

『Twitterでイベント・台詞を一般募集予定。』

言葉が出なくて口をぱくぱくさせていた私に、畳み掛ける一言が投げられた。

「その輝詞君もメンバーだから。遠慮なくキョンキョンってね？」

…お母さんのバカ…私は初めて本気でそう思った。

6・長期でした

たっぷりと説明を聞かされ、色々未知の知識を植え付けられて、私は半分ヤケになって居た。何度目になるのか書類の中にある『ルールブック』を見直す。

・『データテスト参加者はその証明として、各自に指定されたコードネームの入った鍵を持つ事

・テスト参加者は社から提供された `twitter` アカウントを使用する事（既に個人アカウントを持っている場合はどちらでも使用可能）

・テスト内に置いて『CP』と呼ばれるポイントを設定、出題される『イベント』を成立させる事でUP

・定期的に出題される『イベント』は、`twitter` 上に『成立確認』と打ち込める証人が居なければ
イベント成立と見做されない

・『イベント』を放棄する場合定められたCPを没収、CPが足りない場合の放棄は原則として不可

「ちよつと、質問なんだけど。」

眉間に皺を寄せた七海さんが口を開いた。

「この『イベント』って、相手決まってるの？」

「決まっている場合もありますが、参加者の誰かであれば問題無いですよ？ほら、同性に告つたりとかも最近は需要ありますし。」

七海さんは何か言いたげな顔でふるふると拳を握り締めていた。敵認定したけど今だけ握手しに行きたい気分、そりゃもうガツチリと。

「期限はリコリス祭までですのでじっくり楽しんで下さい。」

佐藤さんの口から『リコリス祭』と言う言葉が出て、楽しそうにしていたしふおんも流石にギョツとして顔を上げた。それもそうだろう『リコリス祭』は私達が通う聖リコリス学園の一大イベント。大学部も合わせたかなり大規模な学園祭みたいな物だ。お祭り自体は凄く楽しみなんだけど、問題はその開催時期だった。

「ふざけんなよ！リコリス祭って4月じゃねえかよ！半年もバカやれってのかよ?!」

「恋は一両日中には芽生えませんか?」

「あの…これテストですよね?」

「……………」

「ちょ…目を逸らさないで下さい!」

明らかに明後日の方向を見る佐藤さんをゆさゆさしてみた。焦る私達を見ながらしふおんはけろっとして言い放った。

「つまり…半年間ラブラブごっこ?」

「冗談じゃないっ!!!」

「あははは、君等仲良いね。」

敵認定解除しようかなあ…むしろ今は佐藤さん達が敵な気分だから。

7・フラッシュバック

送ってくれる車に乗ってる間、私はずっと上の空だった。七海さんみたいに怒る事も、しふおんみたいに純粹に楽しみにも出来なくて、漠然と不安を感じていた。

「それじゃ、ひおまた明日ね。」

「あ、うん！明日ね！おやすみ。」

しふおんが家に入るのを見届けると、自然に溜息が零れた。

「…そんなに嫌？」

余程ぼんやりしていたのだろう、運転していたのが輝詞さんだった事に私はその時始めて気が付いた。後部座席を振り返る体勢でこちらを見る目が思いの外真剣で、思わず言葉を詰まらせた。と同時に背筋がぞくりと冷えた。車の中、似ても似つかないのに、私の頭の中にねじ込まれるみたいにある光景が巻き戻って…。

「おいっ?!」

次の瞬間には頭が真っ白になって車から逃げ出していた。後ろから何度か声が聞こえたけど、振り返りもせずただ走っていた。何処へ行きたいとか、輝詞さんは悪くないとか、そんな事を思いやれる余裕はその時の私には無かった。

「おい！待ってって！急にどうした?!」

あっさり腕を捕まえられて、その手に更に私の頭はパニックになっ

た。

「や…！嫌！嫌っ…！侑俐さん！」

「侑俐…？」

手が解かれた意味も考えず、ガタガタと震える手で電話を掛けていた。

「侑俐さん…侑俐さん…！」

呼び出し音を待つすらもどかしくて名前を呼び続けた。ほんの数秒が永遠にも感じる位長くて長くて悲鳴を上げそうなのをひたすら堪えていた。

『もしもし？緋織？』

声を聞いた瞬間、張り詰めた糸が切れたみたいに涙が溢れた。

「侑俐さん…ゆつり…さ…！うつ…ふえっ…！侑俐さん…！」

『緋織？！おいどうした？！緋織？！』

心配そうな声が何度も聞こえて来て、私は電話口でただ泣きじゃくるしか出来なくなっていた。と、不意に携帯を手から奪われた。

『緋織今何処に居る？！緋織！』

「響侑俐さん…ですね？」 『企画でお伺いした輝詞です。』

「え…？」

私から取り上げた携帯で輝詞さんは何かを話していて、私はそれをただぼんやり眺めていた。

8・屈折

オナミタクト
＜七海拓十＞

散々な一日だった。叔父である志揮兄が事故に遭うし、初対面の女には殴られるし、おまけに訳の解らないゲームのテストに半年間も巻き込まれるし、厄日としか思えなかった。まあ報酬くれるって言うてたし、せいぜい志揮兄のお見舞いにでも使わせて貰えば良いか。

「帰るか…。」

立ち寄ったコンビニでもいまいちスキリせず、適当な飲み物だけ買って家路に付いていた。少し暗い路地に差し掛かった時だった。

「…い！おいっ…？！待て！」

二人分の足音と、少し怒鳴る様な男の声。痴話喧嘩って解釈するには少々穏やかじゃない。見失わない様に、見付からない様に後を追うと、公園の手前でその影が止まった。

「おい！待てって！急にどうした?!」

「や…！嫌！嫌っ…！…侑利さん！」

「侑利…？」

俺は声の主達に少し驚いていた。さっきまで見ていた金色の髪とシルバークリーンの髪。あんな目立つ奴等早々忘れないし見間違えもしない。けど、明らかに女の様子がおかしかった。俺を殴ったり説

明るく女に突っ掛かった時の気の強さなんて微塵も感じなくて、子犬みたいにブルブル震えて泣きながら電話をしていた。

「侑俐さん…侑俐さん…！」

怯え切って泣きじゃくる姿を見ていられなくて、もう少しで飛び出して行きそうになった。と、落ち着き払った声が聞こえた。

「響侑俐さん…ですね？」 『企画でお伺いした輝詞です。』

「え…？」

泣き止んだ女は淡々とした会話をポーツとした顔で聞いていた。何を話しているのかはよく聞こえなかったが、少しすると男は電話が返すのが見えた。少し落ち着いたのか、呼び掛けに頷いてる。やがて促される様に公園のベンチに頼りなさ気に座った。出て行く訳にもいかず、かと言って立ち去るには少し気が引けて、物音を立てない様に様子を伺っていた。10分位経っただろうか、公園にそぐわない車が一台止まったかと思うと、長身の男が下りて来た。

「…緋織…？緋織！」

少し控えた声に吸い寄せられるみたいにふらふらと金色の髪が揺れた。

「侑俐さん…。」

街灯に照らされ薄っすら光る髪と、まだ少し涙が滲む顔と、やっとで掴んだであろう手は未だ微かに震えていた。

「しめんなさい…。」

その姿に言い知れない思いが騒いだ。あの女がああ顔で俺を見たら
一体どれだけ良い気分だろう…って。

9・何か間違っていないですか？

チャイムの音と共に今日の授業が終わった。昨日は随分色々あって、侑俐さんにも迷惑掛けてしまった。今度ちゃんと謝ろう、そう考えていた時だった。

「ひおー、呼んでるよー？」

「へっ？！私？！」

急に名前を呼ばれて教室の出入口に顔を向けると、無然とした顔で制服を着た七海さんが居た。私：いや、私達が通う『聖リコリス学園』は中等部、高等部、大学、大学院とあり、専門学科も含めるとかなりの人数の生徒がいる。

「お、同じ学校だったんだ…。」

「学部違えば会わない奴の方が多いだろ。」

「まあ、そうなんだけど…。」

「…何でそんなに距離を取るんだよ?!」

だってアンタ私の中でまだ敵だし？とも言えずほぼ廊下を挟んで真反対に位置取っていた。それにしても一体何の用だろう、とチラリと顔を伺うと、思い出した様に携帯をいじり始めた。と、いきなりずいっと画像を突きつけられた。

「これ、どうな訳？」

「え？」

改めて画像に視線を移して、私は固まった。そこには泣きながら袖を掴む私と、私の頭を撫でる形の侑俐さんが映っていた。どう考え

ても明らかに昨日の私達…！

「この兄さんどう見たって普通のリーマンじゃないだろ。高校生がホスト遊びとかヤバいんじゃない？」

「侑俐さんは…！」

言おうとして言葉に詰まった。侑俐さんの事情は私が勝手に話して良い事じゃないし、何より七海さんに諸事情とか知られたくない。

「えーと、そう！お兄ちゃんみたいな…！」

「兄妹でこんな事してたらそれはそれで問題あると思うけど…。」

我ながら苦しい言い訳にあっさりツッコミが入った。誤魔化すにも写真撮られてるし…はっ！いつそ携帯を取り上げて壊せば解決！

「家のPCにデータ移してあるからな？」

「ハゲろ、チビ。」

「ああ？！」

悪態を付きつつふと思った。そもそも七海さんは何をしに来たんだろう？もしかして写真見せて脅迫？！でも私お金とか持ってないし、単にホスト遊びを止めなさいって忠告…にしては穏やかじゃないよね？って事は例のゲーム関連とか？

「あああ！解ったしふおん狙うつもりね？！」

「何でそうなるんだよ？！」

「最っ低〜！！あの子が純粹なのに付け込んで私を脅迫してあんな事とかこんな事とかするつもりでしょ？！変態！」

この時私は頭に血が上っていた。だから売り言葉に買い言葉と言う

か、勢い余って私は変な事を口走ってしまったんだろう。

「私が王子様になってもしふおんに変な事させないんだから！」

呆れ顔の七海さんと私の耳に電子音が聞こえた。二人して音のした方を向くとデジカメを持った三年生が立っていた。

「グレーテルちゃん百合宣言…良きかな、良きかな。」

10・実に、笑顔で

長い黒髪にデジカメを持った女の子、リボンの色からして三年生。実に、笑顔。

「あの…?」

「初めまして、グレーテルちゃんにウサギ君。」

意味が解らずちよつと怖い、いや、かなり怖い。七海さんも同じ思いなのか微妙に引いているのが感じ取れた。少し間があつてから、その先輩は眉間に皺を寄せて首を傾げてからメモを取り出して私達とメモとを交互に見遣る。

「あれ?違った?名簿の顔と名前は一致してるのになあ…。」

「名簿?」

「うん、『』の参加者とコードネーム名簿。説明の時20枚位あったから全部貰つて来ちゃった。」

記憶が確かなら確か参加者は男女9名ずつで18名、そしてメモを全部持つて行ったと言う事は…。

「それ私達の分じゃないですか?」

「ん?んん〜?おお!なるほど!言われればこんなに要らないかも。はい、じゃあ一枚どうぞ。」

笑顔でメモを渡されたけど目を逸らして失笑するしか出来なかつた。男だったら殴つてたかも。溜息を吐いてから渡されたメモに目をやると、顔が判る写真と名前、学校、年齢、ゲーム内でのコードネームと言う項目が書かれていた。これってプライバシーの侵害じゃないか

いんだらうか？

「サイトやt w i t t e rはコードネームと顔写真だけだったからまあ大丈夫かな。」

「ちよつと待つて。」

ツッコミがシンクロしてしまった。t w i t t e rの話は聞いていたけど、サイトは初耳だった。

「サイトって何ですか?!」

「サイトとはウェブサイトの略称でインターネット上で、様々な情報を提供する…。」

「単語の意味じゃねえよ!」

「貰った名簿に書いてあるじゃない、ほらほら、ここ。」

名簿貰ったのさつきですから。と言うツッコミは最早彗星の如く流し書いてあるアドレスに飛んでみた。と、そこには説明の時と同じ空の絵とシンプルなロゴのホームページが出て来た。何だかもう見るのが怖くなって来たが、意を決して中を見てみる事にした。

『ハイ!ボクきゅんえもん!』 『へようこそ!このゲームは現在厳正なるアマダくじに寄って選ばれた9対9の男女によってリアルシュミレーション中のゲームだよ!t w i t t e rの投票で言つて欲しいキュン ワードや、やって貰いたいキュン シチュを随時募集中!みなぎって参加してね!』

「可愛いよね〜きゅんえもん!…あれ?二人共どうしたの?まるで漫画みたいにがっかりして。」

「頭痛い…てか厳正なるアマダくじって何だよ…。」

「…私も頭痛い…。」

画面に現れた地球外生命体と書かれている単語に色々気力が奪われた。

「医務室行く？カウンセラーの館林先生も参加者だし丁度良いかも。」

「教員まで毒されてんのかよ?!」

名簿を見直すと確かにスクールカウンセラーの先生の名前があった。そして目の前にいるこの妙な先輩の名前と写真も。

「あれ？え?!先輩も参加者…と言うか殆どウチの学校の生徒じゃないですか!」

「うん、だから探しに着たんだ〜よろしく。」

そう言って…名簿に寄る所の赤ずきんこと鶴村先輩は手を差し出した。実に、笑顔で。

11・医務室と珈琲

私達は取り敢えず『』のテスト参加者を話をしてみようと言う事になり、合流したしふおんを加えて4人で医務室へ行く事になった。この学校は生徒数が多い事もあってか校舎が広く、中等部、高等部、大学とそれぞれに医務室が設置されている。

「失礼しまー…す?!」

ドアを開けた瞬間鶴村先輩を除く私達3人は固まった。どう見てもカウンセラーの館林先生がベッドに押し倒してる…どう見ても男の人を。

「失礼しましたあ つ!!!」

叫んで思い切りドアを閉めると、影と共にドアが開いた。

「おい、ベタな誤解すんな。で?何の用だ?普通科1年七海拓十、桜華しふおん、倉式緋織、3年鶴村睦希。」

「あれ?先生どうして私達の名前知ってるんですか?私医務室来た事無いのに。」

「職業上覚えるのも仕事でね。ま、入った入った。」

先生は医務室の奥へ入ると、棚からコップを出していた。さっき押し倒されていた人はベッドで眠っている様子だった。あ、眼鏡掛けたまま寝てる、ドジな人だなあ。

「あの人恋人ですか?」

「そこ引き摺るな、そしてカメラを構えるな、期待に応えるつもり

もそんな趣味も無い、ただの病人だ。」
「いつぺん実物見たかったんですけどねえ…。」

鶴村先輩は何やら残念そうに、且つ不満気にデジカメを仕舞っていた。実物って何の事だろうか気になったけど怖くって聞けない、直感で踏み入れちゃいけない世界な気がする。ふわりとした香りと共にテーブルに珈琲の入ったカップが並べられた。お礼を言ってから湯気の立つ珈琲を口にする。

「美味しい…。」

思わず呟いた言葉と共にふと顔を上げると頬杖をつく先生と目が合った。一瞬間があつてからクスリと笑って言った。

「そりやどうも。それで？揃ってデータテストの話でも聞きに来た？それとも青い病？」

「あ！そうそう！先生も参加者なんですよね？ほらここ、コードネーム『BraveTailor』って…。」

「ま、可愛い子とイチャ付くだけで給料貰えるならアリじゃない？別に結婚しろって訳じゃないし。」

「そんな呑気な…。」

それから私達は先生としばらく話をしていた。データテストの話やテストの話や、正直後半は世間話になってたけど。そして話をしている内に私はある事を思い出した。頭を過ぎった不安は染みみたいにふわあつと広がって行って、急いで例のサイトを確認しようと携帯を取り出した時だった。

「そろそろ暗くなるから帰った方が良い、女の子は危ないから送ってく。」

先生は私の携帯をパタンと閉じて優しい声で言った。

「はい、お世話になります。」

「七海拓十、お前は徒歩、俺の車は男乗せる場所無いから。じゃ、解散。」

「はあ?! ちよ…?!」

文句を言い掛けた七海さんを医務室に残し私達は帰路に着いた。

12・冷や汗

いきなり理不尽に解散宣言をされて医務室にポツンと残されてしまった。実際学校からは近いので困る訳では無かったがあからさまに杜撰な扱いされるのもいい気分はしなかった。

「大丈夫なのか？お前みたいながキで。ま、代役なんてそんなもんか。」

ベッドの軋む音と共に聞き覚えの無い声がした。入った時に寝ていた奴だった。俺より随分背が高くて悔しいが見上げる形になった。

「急に何だよ？てか、アンタ誰？」

「調理師学科の真壁鈴夢、コードネーム『Sweet's House』宜しくね〜ボクちゃん。」

薄ら笑い且つ思いつ切り馬鹿にした口調でわしゃわしゃと頭を掻き撫でられ無性に苛立った。首を振って手を振り払うと踵を返し医務室のドアを開けた。と、背中に声が投げられた。

「あの金髪の子は気付いてたみたいだぞ？」

「はあ…？」

金髪の子…多分に乳女…じゃない、倉式の事だろう。気付いてた？一体何の事だ？帰ろうとした足が止まっていた。慥然とした顔で向き直ると、指でちよいちよいと合図をした。ドアを閉めると言いたいらしい。いや、普通に言えよ！

「ライオン…。」

「は？」

「ライオンが一番苦労する事って何だと思う？」

いきなりクイズ？何なんだ？馬鹿にしてるのかいちいち言い方が気に喰わない。目を逸らしたままで居ると又ツと目の前に携帯が突き出された。画面にはあのゲーム用のサイトが映し出されている。

「んなもん見せんなよ！」

「馬鹿か、よく見る、ほら。」

指差した場所にはサイトのアクセスカウンターがあった。と、そのスピードがまるでストツプウォッチの様になっているのが見えた。ギョツとして数字を見ると4万を超えている。サイトが公開されたのがいつかは知らないがこんなに早く上がるのはおかしいと俺でも解った。

「ライオンが一番苦労するのは獲物を探す時だ。」

「え…？」

「10代の、しかも皆それなりに可愛い女の子が9人も写真付き公開。言わば狼の群れの中に子羊投げ込んだも同然だな。」

「ちょ…これヤバイんじゃない？」

「だからそう言っただろ。ま、カウンター上がってるのは今頃サイトハッキングでも試みてる輩が居るんじゃない？」

背筋がゾワリとした。中身はどうあれ確かに9人も見た目は悪くない。それがこんな風にネットに出ていたら確かに善悪問わず人が寄って来る事は容易に想像出来る。

「敵さん結構狡猾だよな。これであの子等も俺等も逃げられない。何せ周りの連中皆が敵になっちゃったみたいなものだから。」

「マジかよ…。」

暑くないのに汗が一筋落ちた。

13 落ち着きの無いテーブル

事務的な文章のメールと画像を見つつサラダを口にする。疲れているのか味がいまいち判らなくて、途中から事務的に口に詰め込んでいた。料理は美味しい筈なのに…。

「大分お疲れの様ですね、響さん。」

余程仏頂面だったのか、馴染みの店員がグラスを磨きながら静かな声で言った。

「ははは…。」

曖昧な笑いで返すと今度はプライベート用の携帯が鳴った。メールの内容にホッと息を吐く。

「お客様ですか？」

「いえ、居候先の先輩です。少し人を送って貰う様に頼んでいたのです。」

「ああ、例のお姫様ですか？」

「お姫様ねえ…。」

珈琲を飲み掛けた時、入り口の鈴の音と共にドアが開き大きな声が響いた。

「この人痴漢です！」

激しく珈琲を吹いてむせた。電車やバスの中ならいざ知らず、何故喫茶店のドアを開けてそんな台詞になるんだ？！

「私の胸鷲掴みにしたんです！誰かー！おーまわーりさーん！」
「だから違う！大体そんな曖昧なサイズの乳に用は無い！」
「品定めしてんじゃないわよ！」

余計な事を言った男の子の方が学生鞆でぶん殴られていた。いつそ清々しい光景だったが、軽く営業妨害になっていたので席を立てて二人を宥める事にした。

「あの、静かに…ここ喫茶店だから。」

「オジサン誰？うっわ、怪しい！この痴漢の味方する気？！」

オジサン：俺まだ23なんだけど…。ちよつと傷付きながら男の子の首を絞めている女の子を何とか落ち着かせ、二人を席に座らせた。

「で…えーと…彼が君の胸触ったと？」

「君じゃなくて若葉です！日向若葉！」

「天城海琴と申します。」

自己紹介されたよ…意外と礼儀正しいな。男の子学生証出してるし。

「で、どうなの？」

「この人がバスの中で私の胸掴んだんです！何か前の席座ってて、きよるきよるしてるな…って思ったらいきなり胸をガシツって！」

「俺は蚊を目で追っててたまたまそこに止まったから叩いただけです。」

「そんな言い訳が通用する訳無いでしょ！大体私の胸で蚊を潰すとは何事よ?!」

実に馬鹿馬鹿しい事になって来たな…見た所高校生だしたただの青い

痴話喧嘩か。適当に聞き流して宥めて帰すか……。ぎゃんぎゃんと騒ぎ始めた二人に深く溜息を吐いた時だった。

「そもそも俺は倉式以外興味は無い！」

「倉式……？」

聞き捨てならない名前に思わず水の入ったコップを倒していた。

14・手紙

家に入ろうとした時ポストに私宛の手紙を見付けた。一通目の封筒に会社の名前と『』のロゴが見えてハーツと溜息を吐いた。そして二通目…。

「え…?」

差出人の名前を見て私の心臓はドキンと跳ねた。

「あら、おかえり緋お…。」

「ただいま!」

家に入るなりお母さんの声を背中に私は階段を駆け上がり自分の部屋に飛び込んだ。まだドキドキしながら手紙をそつと見直した。

「…鷹臣さん…!」

声が震えて涙が出そうになった…嬉しくて嬉しくてきゅつと手紙を抱き締めた。旋堂鷹臣…私がちつちやな頃からいつもお兄ちゃんみたいに守ってくれた人…優しく、頭が良くて、何でも出来て…好きになるのに時間なんて掛からなかった。勿論私なんて全然相手にして貰えなかったけど。

「鷹臣さん…。」

ベッドに座って手紙の封を開けると、いつもみたいは何枚もの写真が見えた。真っ青な海や綺麗な街並みや、時には犬や猫の写真に思わず顔が緩む。でも鷹臣さんが写っている物はやっぱり入ってなく

て、少し寂しくもあった。

「もう3年かあ…。」

そう、鷹臣さんは3年前、突然引越してしまった。それもフランスに。留学だつて聞いたけどその時私は納得出来なくて、置いてきぼりにされた気がして、何日も泣き通して皆を困らせていた。メールじゃなくて、時折届く手紙と写真が何より楽しみだった。丁寧に折り置まれた便箋をゆっくり開く。綺麗な字で、書き出しはいつも決まってる…。

「『元気ですか？』…なんだよね。」

ベッドにごろんと横になってウキウキした気持ちで手紙を読み進める。他愛ない出来事から色んな所に行った話、時々愚痴ったりしてて、私はその一つ一つに想いを馳せた。そして最後の一枚を見た時だった。

「…嘘…。」

何度も瞬きを繰り返す。

「ええっ?!」

私はガバツと起き上がっていた。

「…8/27…。」

便箋の真ん中に一行だけの文だった。

『 8 / 27、日本に戻ります 鷹臣 』

15・油断大敵

長い間飛行機に乗っていたせいもか足元が頼りない。飛行機に何度も乗っているがこの感じは未だに慣れない。ロビーのソファに座っていると影が落ちた。座ったまま上を見ると一緒に帰国した後輩の弭ユキの顔があった。

「時差ボケ大丈夫？先輩。はい、お茶。」

「悪い…。」

額に冷たい缶が当てられ少し気分が落ち着く。息を吐きつつ目を閉じていると、かなり近くで声がした。

「隙だらけな人だなあ…。」

目を開けて片手で弭の口を押さえる。忘れてた。こいつは色々とお断出来ない奴だった。心成しか周りの、特に女性からの妙な視線を感じて居心地が悪い。

「先輩目立つから。」

「お前が妙な事するからだ。」

留学中に知り合った弭は『色々とお断』な上に悪ノリしがちな性格も手伝って、一緒に居る俺はすっかり周りにゲイだと思われた。学校で酔っ払った屈強な男の先輩に迫られたトラウマが未だに残っている。

「そう言えば、例のお姫様は？連絡したんでしょ？」

「手紙送ったけど、まあ子供一人じゃ空港までは来れないだろ、家

に着いたら連絡するつもりだ。」

頭の中に小さな緋織の姿が過ぎった。小さい頃金色の髪をからかわれてよく泣いていた。同じ金色の髪が嬉しかったのか、初めて会った時から凄く懐いていた。泣き虫で小さくて『お兄ちゃん』と呼んでは、いつも俺の後をひよこみたいに着いて来ていた。最後に見たのは緋織が中学に上がる頃だったか。

「でもその子今16歳でしょ？女の子って変わるから。綺麗になつててびつくりするんじゃない？」

「何言つてんだ。」

笑いながらスーツケースを引いて人がざわめく中を歩いていた時だった。人が一方向をちらちらと振り返っては何かを話している。空港だし芸能人でも居たんだろうか？

「…さん…！鷹……ん…！」

「先輩、何か呼ばれてませんか？」

「え？」

「鷹臣さんっ！」

響いた声に振り返ると、下を向いたままゼイゼイと息を切らせた様子の金色の髪の女の子が居た。

「…緋織…？」

「鷹臣さん…！」

嬉しそうな声と共に緋織が腕の中に飛び込んで来た。

「…おかえりなさい…！」

頭の中が真っ白になっていた。記憶の中の小さな緋織と、ほんの瞬間見えた笑顔が焼き付いて離れなくて。放心したまま腕の中の緋織を抱き返して何とか言葉を発した。

「ただいま…。」

16・頼りない

人の足音だけが聞こえるフロアを黙々と掃除していた。まだ人気の無いライブハウスって、何だか味気無い。テーブルを拭いていると双子の弟、カオスが私に声を掛けた。

「カシス、何か呼んでるよ。」

「私？」

「うん。余所のバンドのメンバー？」

覚えが無いので首を傾げつつ裏口に行ってみると、緑掛かった銀髪が見えた。確かゲームのデータテストの話をしに来た心理学部の人確かにこんな髪と格好じゃバンドのメンバーに間違えられるのも納得。えーっと…何だっけ？名前…。

「ヒヨン君？」

「飛猿ヒエンです。」

「あ、うん、それ、飛猿君。」

「…例のテストの名簿を一人が持ち帰ってしまっていたと報告があったので渡しに来ました。」

そう言うと飛猿君は封筒を一部手渡して来た。一応確認を促されたので中を確認すると、参加者の顔写真と簡単なプロフィールが載った名簿が入っていた。本当プライバシーの侵害よね、うん。名簿に目を通してある途中で私はふと気付いた。

「ねえ、この子…えっと、倉式…緋織。」

「彼女が何か？」

このライブハウスには高校生も時々紛れ込んでいる。聞き耳こそ立ててはいないがさり気にも耳に入る会話はある。確か4月頃だったか、ライブハウスの入り口で彼女が絡まれていたのを思い出した。金髪だった事もあって目立っていたので当然と言えば当然なんだけど…。

「男4人をトンファーでボッコボコに倒して拍手喝采浴びてたわね。」

ちょっとした映画のワンシーンの如く大の男4人が見る間に泡を吹いて倒れて行ったので忘れるにも忘れられない。と、飛猿君は頭を掻きながら少し間を置いて言った。

「選考理由は俺の管轄外なので。佐藤女史曰く『メインヒロインは濃い』だとか、『男の影が多い方が良い』とか言っていましたね。」

確かにこれだけ目立ってキャラの濃い子ならゲームとしても面白いかも知れないけど、危なくないのかしら？最近じゃネットストーリーカ…なんてのも居るし。何か私も怖くなつて来ちゃったな…。

「ねえ、これ大丈夫…。」

「大丈夫ですよ。」

遮ってキツパリと言われた。何？この自信満々っぷり、腕っ節に自信があるのか、それとも私には変なのが寄つて来ないとも言いたいのかしら？怒って良いのかときめて良いのかつくづく読めない…むしろ苛々するかも。

「…多分。」

「頼りない！」

ヤダ、私芸人でもないのにツッコミ入れちゃった。

17・両手にバッグ

数日前、家に何だかとってもテンションの高い女の人が出て来た。何でも心理学部の研究とゲームがどうかで、最後の方は『萌え』とか『キュン』とか言ってたからあんまり聞いてなかったけど、どうやら私はその新しいゲームのテストプレイヤーみたいな物に選ばれたと言うらしい。今日はテストの参加者の顔合わせをする、と通知を貰って再び会社に足を運んだ訳だけど…。

「…ねえ、若葉さん。」

「何でしょう？ 彩花さん。」

「ここ、絶対違うよね？」

「うん…。」

私達は広い社内でも思いつ切り迷っていた。会社の所々にある避難経路図は部屋の名前が無くて正直役に立たない。クラスメイトである若葉と一緒に来たまでは順調だったんだけどなあ。携帯を弄りながら溜息を吐いた。

「流石に携帯地図でも会社の部屋名までは載ってないしね。」

「よし彩花！ 一旦下の受付まで戻って案内して貰おう！」

「そうだね、時間遅れちゃうし。」

若葉の提案に従ってエレベーターを探して歩いていたら時だった。知らぬ女の子が私達を見付けて慌てた様子で走って来た。中学生位だろうか？ 何故か両手にハンドバッグを持っている。

「あ、すみません！ この会社の医務室って何処ですか？！ 向こうで貧血起こした人が居て…！」

女の子が指差している方向を見ると、青い顔で辛そうに俯いて座り込んでいる女の人が居た。私と若葉は顔を見合わせて具合の悪そうな人へ駆け寄った。意識ははっきりしているみたいだけど立ち上がるのは厳しそうに見える。どうして良いのか判らずおろおろしながら背中をさすった。

「すみません、私達もこの会社の人間じゃなくて…。」

「ねえ、救急車とか呼んだ方が良いのかな？それか大声で誰か呼んでみる？」

私達が3人で相談していると少しくぐもった音が鳴った。女の子は焦りながらバッグから携帯を取り出して、勢いついでに中身を床にぶちまけた。

「あわわわわ?!いいや、後で!もしもしもし?!」

「お、落ち着いて。」

女の子の電話の相手は誰か判らなかつたけど、周りにある物なんかを話しているのが聞こえた。早く誰か来てくれないかな…この人持病とかあって発作だったりしたら心配だし…。数分が凄く長く感じて緊張した空気が張り詰めていた。

「ワン!」

「…へっ?!」

思い掛けない声と足元に当たった感触に恐る恐る下を見ると、白い毛玉が目に入った。

「ひゃあああっ?!何?!何?!何?!」

「わたあめーわたあめ…あ、そっちに居たか。」

何だかとっても怪しいお兄さん来たし…いや、それ以前に何で犬がここに…。開いた口が暫く塞がらなかった。

18・慣れる

最近私疫病神か何かに取り憑かれているんじゃないかな？変なデー
タテストに巻き込まれるし、痴漢には遭うし、知らない場所で急病
人に会うし…。

「若葉ー。」

「ワンワン！」

何故か生きてる犬を抱いて彩花が戻って来た。えっ？！犬？！何処
から犬なんて連れて来たの？！流石彩花！やる事が違うわ！…って、
いけないいけない、これはツッコむべき所よね…。

「彩花！借りるなら猫の手よ！」

「ち、違うよお！えっと、この人が…！」

え？誤解？ヤダ彩花ったら紛らわしくも高度な技を…。ん？あの怪
しいポニーテールは…。

「スペシャルワツフルプレートキャラメルてんこ盛り奢ってくれた
ホストの兄さん！」

「…響です。」

そうそう、響さん、うん、覚えた。…あれ？何か忘れてる様な気が
？はっ！そうよ病人！

「響さん！ワツフルの話なんかしてる場合じゃないわよ！病人が！」

振り返ると、もう響さんは具合悪そうな人を看ていた。私も取り敢

えず様子を見た方が良いよね…。響さんは手首を押さえたり額に手を当てたりしていた。

「大丈夫そうですか？」

「ん〜多分貧血…んーと…ちょっと、ごめんね。」

一瞬この人にキスするのかと思ってしまった。彩花の肩からそっと奪うみたいに抱き寄せて、左手を背中に回した。

「ちよっ?!何して…?!」

「膝貸してあげて、頭低くしないといけないから。良い？」

「は、はい!」

膝枕する体勢の彩花に確認すると、中学生の子と一緒にハンカチを濡らしに洗面所へ行ってしまった。何故か犬も一緒に。それにしてもテキパキしてたなあ…あ、そっか!ホストだし酔っ払いの介抱とか慣れてるのかも?と、彩花がほっとした様に口を開いた。

「良かったね、私達じゃ対応出来なかったし…。」

「本当にすみません…迷惑掛けて。」

膝枕体勢の女の人は青い顔で私達に軽く会釈をした。私はふとさっきの事が気になってしまった。

「あのー…さっき響さん何してたんですか?こう、背中に手をやって…。」

そこまで聞くと女の人が急に困った顔で目を泳がせて、躊躇いがちに小さい声で言った。

「えっと…その…あの人服の上から私のブラのホック外したみたいで…。」

「ええ?!何それ最低!!痴漢行為じゃないの!!」

「若葉、応急手当としては正しいから。」

理由はどうあれ変態行為!やっぱり男は狼なのね!気を付けなきゃ!

19・理想の大人

時計の音が静かに響く中、机に突っ伏したまま隣のひおが転寝を始めてしまった。揺らして起こしてみただけど全然起きる気配が無い。聞いた話では幼馴染のお兄ちゃんが3年振りに帰って来て、昨日は嬉しくて殆ど眠れなかったんだとか。

「大丈夫？具合でも悪いの？」

ひおが起きないので心配したのか、斜め前に座っていた人が心配そうにこちらにやって来た。リボンがいつぱいの桜色のジャケット、何だかお花がそのまま人になったらこんな感じかも？

「平気ですよ、ひお…えーと、緋織は寝不足なだけなんですよ。困った子ですよね？」

「緋織ちゃんって言うの？代わった名前なのね。」

「何か漢字の名前って和風！って気がしますよね？私の名前なんか平仮名で『しふおん』なんですよ？」

「素敵じゃない、美味しそうで。ピッタリだと思うわ。」

砂糖菓子みたいな笑顔で誉められて何だか私が照れてしまった。珍しい名前って言われた事はあるけどそんな風に言って貰えて素直に嬉しくなった。そう言えばこの人、この部屋に居るって事は同じテストの参加者って事だよな？

「あ…！さ、参加者なんでしゅか？！」

緊張してつい声が上がってしまった…自分の耳に届いた言葉で恥ずかしくて居た堪れない。赤ちゃん言葉になっちゃったよお！走っ

て逃げたい15歳、しふおんは今日も元気です…。

「瀬乃原彩矢と申します。宜しく、しふおんちゃん。」

私は真つ赤になつて俯いてしまった。もう色々顔から湯気が上がりそう。彩矢さんかあ…良いなあ、落ち着いてて大人くっ感じてくれる。

「しーふおんちゃん！」

「あ！鶴村先輩！」

知っている先輩の顔を見て少しだけホツとする。一応名簿に目は通したけど、性格までは載ってないし、先生とか以外は知らない人ばかりだったもんなあ…。憂鬱な溜息を吐く私を余所に鶴村先輩は彩矢さんともすぐに仲良くなっていた。と言うより、彩矢さんが鶴村先輩のペースに巻き込まれてるっぽいかも。ひおと言ひ先輩と言ひ、誰とでもすぐ話せるのは正直羨ましい。知らない人だとしても上手く言葉が出て来ない。男の人なんて尚更だった。こんなんで大丈夫かな？私…。二度目の溜息を吐いた時だった。

「…緋織、寝てるのか？風邪引くぞ？」

後ろから伸びた手がひおの肩を揺らした。何の気無しに振り返った私は、意外過ぎる光景に思わず椅子から転げ落ちそうになっていた。声に顔を向けた2人もそれは同じだったみたいで3人がガタツと椅子を鳴らしていた。ひおを起こそうとした人は私達が一斉に飛び退いたので何やらやり場の無い手を彷徨させた後、再びひおを起こそうとその肩に落ち着いた。

「あ、あーゆるすびーくじゃばにーず？！」

「心配しなくてもれっきとした日本人だから…。」
「お、おーらい…じゃなかった、理解しました！」

ごめんなさい、そんな背が高くそんな金髪ロングじゃ私も外国人かと思っていました。

20・トマトに進化

ゆさゆさと肩を揺らされてぼんやりと目を開ける、けどまだまぶたは仲良くしたがっていてとろとろと目を瞑る。おやすみなさい、世界。…ん？何だろう？何か凄く良い匂いがする。爽やかなミントの香りの中にビターチョコの香ばしさが…。

「はい、あーん。」

「あむっ。」

口の中に爽やかな甘さがほわりと広がった。はあ〜至福の時〜…っで、あれ？私何でチョコ食べてるの？

「美味しかった？ひおちゃん。」

「ひゃわっ?!とっ…?!きゃあっ?!」

一気に目が覚めて、反射的に思い切り飛び退いた。と、その拍子に私は椅子から落ちていた。隣に座っていた箸のしふおんの足が目の前にある。何人かの焦った様子の声が上がから聞こえた。すぐに起き上がるうとしたけど、驚いたのと椅子から落ちたのとついでに寝ぼけていたせい、体が言う事を聞かなくて転んだまま呆然としていた。

「大丈夫か？緋織。」

覚えのある声に顔を上げると、金色の髪が見えた。

「た…鷹臣さ…?!わっ?!」

何で此処に？と聞く前に私の体は軽々と抱き上げられ宙に浮いていた。息が掛かりそうな距離に鷹臣さんの顔がある。

「何処かぶつけた？眩暈や吐き気は？」

顔がかあつと熱くなって、言葉が出なくて口をぱくぱくさせて、多分今の私金魚みたいになってるんだろう。心臓が飛び出しそうな位バクバク打ってて、聞こえそうで怖い。

「リアル姫抱っこ良きかな、良きかな。そろそろ緋織ちゃん完熟トマトに進化中、っと。」

「トマト？」

「あああああ、あのっ！だ、い…じょうぶ…なので…下ろ…して…！」

やっとの思いで言葉を口にすると、鷹臣さんは私をそっと椅子に降ろして、何時の間にもやら写真を撮っていた鶴村先輩からデジカメを取り上げてデータを削除していた。顔から熱が引かなくて、心臓が倍位の速さで、手で頬を隠した。

「チヨコに酒は入ってない筈だけど？」

聞き慣れない声に落ち着かないまま振り返ると、私にチヨコを食べさせたであろう人が頬杖を付いてクスクス笑いながら見ていた。チヨコ細工みたいな髪と瞳、それに眼鏡。…あれ？この人…何処かで…。記憶を辿って、確証の無いまま聞いていた。

「医務室で寝てた…人？」

「お、正解。ご褒美にチヨコもう1個あげよう。」

眼鏡の人はポケットから小さな包みに入ったチョコトリュフを私の前に差し出した。

「『Delicious Forest』新作、ミントとチョコのクラボな美味しさ『キュートなハリネズミ』さっきの1個とそれ合わせて150円ね。」

「お金取る気ですか？」

満面の笑みで当然と言わんばかりに手を出していた。よく知らないけど取り敢えずこの人最低だと確信していた。

21・それはあまりに唐突に

打ち解けているんだかいらないんだか微妙なやり取りで予定されていた時間を15分程過ぎた所へ数人の女の子が姿を見せた。どうやら1人が体調を崩して休んでいたとの事。室内を見回すと女の子9人に対して男の人は3人しか居ない。あの銀緑頭の人も今日は顔を見ていなかった。

「ねえ、他の人は……。」

そう言い掛けた時、後ろにある扉から侑俐さんが入って来た。顔でも洗って来たのか髪が少し濡れている。

「侑俐さん……。」

「ん？」

侑俐さんは自分の事をあまり話さない。弱音も愚痴も私の前では言った事が無い。だけど仕事でいつも忙しい事は知っていたから少し心配だった。でも、何て言えば良いんだろう？ 高校生の私が体調に気を付けてとか言ったら失礼かな？ どうしよう……。

「適当に休んでるからぶっ倒れたりしないよ。ありがとう。」

「……ですよね……。」

顔色読まれてしまった……侑俐さんが鋭いのか、私が判り易いのか、はたまた両方なのかな？ そんな事を考えているとさつき入って来た内の1人が真顔で私の両手を握って言った。

「気を付けて！ 君可愛いから、きつとあつという間に狼変態のター

ゲットにされちゃうよ?!何かされそうになったら遠慮なく大声出したりするのよ?」

「はい?あ…あのー?」

誰だろう?そしてこの場合何て返せば良いんだろう?隣に居るしふおんに縋る様に目を向けるけどしふおんも苦笑いで首を傾げていた。よく解らないけど気を付けろって言うてくれてるんだよね?

「おつ待たせしましたあー!」

甲高い声と共にかなり勢い良くドアが開いて佐藤さんが現れた。この人のテンションっていつ下がるんだろう?興味無いけど下がった所は見てみたい気がする。と言うかむしろ、下げて欲しい。後に続く形で数人の男の人が入って来た。…ん?何か、皆さん…疲れてる?

「七海君大丈夫?!どうしたの?!その傷!」

しふおんが心配そうに七海さんに駆け寄った。見ると確かに傷だらけだった。

「実は今まで男性陣にはテストを受けて貰っていました。お姫様を護る為には強くないといけないって事ですネ。」

「喧嘩でもしたんですか?」

「んゝまあ、そこは企業秘密。で、本題はここから。七海君、説明した通りに出来るわね?」

皆の視線が一斉に七海さんに向けられた。一部では楽しげにクスクスと笑っているみたい。七海さんは悔しそうに頭を掻くと、意を決した様に傍に立っていたしふおんの手を取り、その唇に寄せた。

「なあっ?! なななななな…七海君?!」

「…コードネーム『Crazy Rabbit』七海拓十…今この時より俺がしふおんを守る。」

「ふえっ?!」

その言葉に一瞬部屋がシンと静まり返った。

「七海君上出来でえっす。では『データテスト、只今よりスタートです。』」

「えっ…ええっ?!」

それはあまりに唐突に始まった。

22・一直線なボケ

王子様ちつくな爆弾発言と、花一匁みたいなパートナー選び、そして人間関係のゴタゴタ…実に実にペンが進む状況に思わず顔がにやけてしまいそうだった。新しいメモ帳とスケッチブックが必要かも、なんて通路を歩きつつ頭の中で計算していると、傷だらけの拓十君が横切った。

「不本意且つ屈辱…って所かな？ウサギさんは。」

「またアンタかよ…つか、皆どうな訳？こんなふざけた遊び正気じやねえだろ、倉式は相変わらず俺の事目の敵だし。」

ぶつぶつと文句を言いながら苛立たしげに自販機のスイッチ連打。なかなか理想的な天然っぷりはキャラとしては美味しいのかも知れないけど…。

「君確かに不快だね、緋織ちゃんが目の敵にするのも解る気がする。」

「なっ…？！俺が何したって言うんだよ?!」

手帳に一挙一動をメモしつつ話し掛ける。くるくると判り易く変わる態度は私のペンを飽きさせない。手にした缶珈琲を開けもせず、矛先が変わったと言わんばかりに不機嫌そうな顔と声を向けた。

「緋織ちゃん可愛いでしょう？スタイルも良いし、それに成績も良くて、でも悪びれてなくて。」

「何が言いたい訳？見習えとでも？」

当然の様に怒る、そして考えようとはしていない。無神経且つ単純、

怒るのも無理は無い。緋織ちゃんも、そして私も。だからかな？私のペンも言葉も止まらない。

「女の子がふわふわのんびりしてる生き物だとも思ってる？何でも揃ってる子が平穩無事に暮らせると？現実なんて残酷でしか無いの、ちょっと可愛ければ僻まれて、何をやっても出る釘さながら叩かれて、否応無しに宝物を粉々に砕かれて孤独の真ん中に放り投げられて、でも誰も助けしてくれず、強くなるしか生きていく方法は無いの。」

苛立っていたであろう拓十君はどんどん視線を泳がせた。何か言おうとしてるけど言葉が出て来ない感じが見て取れる。16歳に解れつつ言うのは酷かしら？でも子供だからって何かあってからじゃ遅い。

「そんな地獄みたいな中で友達が居るのは奇跡みたいな物よ、あの子の場合はそれがしふおんちゃん。解る？うさぎさん。君がふがないとしふおんちゃんが危険な目に遭うかも知れないって事。悪いけど私だって大事な大事な宝物を今の君に預けたくはないかなあ？君弱いもん、心身共にね。」

飲む気配が無い缶珈琲を取り上げて、俯いて唇を噛み締める拓十君を背にラウンジに向かって歩いた。不意を突く様に斜め後ろから声がした。

「坊や相手に容赦無いな、鶴村。」

「変態さんに言われたくないかも。正直君のやり方も微妙に萌えないのよね…天城会長。」

「面倒な相手に声高に好かれてる女はいじめる気にならないだろうと言ったのはお前だぞ？鶴村。」

面倒な相手って言うのは敵に回したくない有能なタイプ、ってつもりで言ったんだけど、こんな一直線なボケだって知ってたら考えたかも。盛大に人選ミスツた感。

「君違う意味でも面倒だからねえ…出来れば眼鏡クイツな生徒会長タイプが個人的には…。」

「眼鏡？よし、帰りに眼鏡を見立ててくれ、鶴村。」

「だが、断るー。」

だってこの人勉強以外バカなんだもん。

23・雉って雑食？

佐藤さんと言い、輝詞さんと言い、他のスタッフさん達も含めてこの企画の人達は説明する前からホイホイと話を進めないで欲しい。と、私は苛立っている若葉や動揺している他の参加者の様子を見ながら思った。私もいきなりアミダくじで自分を護ってくれる人を決められては溜まった物じゃない。佐藤さんいわく今のパートナーは最初だけの物で、後から変更しても一向に構わないらしいんだけど…。

「ん？どうかした？」

「いつ…いえっ！何でも…！」

私は思いつ切り顔を逸らしてしまった。私のパートナーはこの弭さんと言う人らしい。アミダで決まったとは言え、一時的な彼氏みたいな物だし、挨拶位しないと感じ悪いのは解ってるんだけど…。

「弭、支給の鍵と携帯、お前の分。同性の番号は最初から登録してあって、異性は自分で聞けたとさ。」

「手込んでるなあ…あ、先輩の番号あった。掛けて良い？」

「はいはい、髪を編むな。」

さつきからずーっと旋堂さんばかり弄ってるんだよね…。鶴村先輩じゃないけどこの二人を変な目で見てしまっしょうがない。別に仲が良いだけの人達って結構居るし、髪弄ったりなんて女の子同士ならよくある事だし、あんなに綺麗で長い髪私だって編みたいし、それにしても綺麗な人達だよね、絵になる二人と言うか、顔が近くないかなとか、いや、別に顔が近いからってスキンシップの一環でよくある事だし、取り敢えずどっちが攻めでどっちが受けですかと

か考えてないです、ごめんなさい、そう言う趣味はあんまり無いけどぶっちゃけそうとしか見えませんよね、解ってやってませんか？鶴村先輩、後でその写真一枚下さい、深い意味なんて無いですよ？

「彩花ー？どうしたの？息荒いよ？」

「何でもありません…。」

落ち着け私…。

「彩花ちゃん。」

「はいっ！ごめんなさいっ！」

目の前に弭さんが身を乗り出して来て思わず裏声で謝ってしまった。吹き出して笑う弭さんに行き場の無い手と言葉が宙を彷徨った。一頻り笑った後、弭さんは支給された携帯の番号を書いてから自分の名刺を渡してくれた。

「番号間違っていないか確認して貰って良いかな？」

「あっ！は、はい！」

私は慌てて支給された携帯を操作した。自分の使っているのと機種が違って少し手間取りながら電話を掛けると、目の前で携帯が光った。

「ん、ありがと。あ、メールも番号で送れるみたいだから、何かあったら連絡して、じゃあ、宜しく。」

「よ、宜しく願います。」

緊張しながら頭をぺこりと下げると、持っていた携帯にメールが届いた。あれ？弭さんからだ…テストメールかな？えーっと…土曜日

…。

『土曜日暇ならデートしない？返事は今下さい 弾』

顔を上げた瞬間、人差し指が僅かに唇に触れて、金色掛かった目が薄く笑って言った。

「お返事は？」

「は、はい！」

「じゃ、土曜日宜しく。」

笑顔で頭をくしゃっと撫でると、弾さんはまた旋堂さんを弄り始めた。私はしばらくの間瞬きすら忘れる勢いで固まっていた。

24・何て言えば？

顔合わせの後会社を出ようとした所で私は日向先輩に捕まった。友達の澤田先輩が狼の毒牙に掛かりそうだとか何とか言っていたけど、要約すると隠れて澤田先輩のデートに着いて行く、と言う事だった。

「先輩：その変な眼鏡と帽子は何なんです？」

「む？ひおちゃん！尾行の基本は変装だよ？」

「余計に目立つと思うんですけど…。」

何だろう…一直線と言つか危なっかしいと言つか…大丈夫かな？この先輩。不安交じりで溜息を吐くと携帯が鳴った。私のじゃない、支給された方の携帯だ。

「ん？誰から？」

「輝詞さんですね。」

「かがし…ああ！あの玉葱みたいな色の頭の人ね！」

思わず吹き出した。た、確かに色味は似てる！あ、だめ、もう玉葱にしか見えなさそう。顔合わせの時のアミダで私の仮パートナーは輝詞さんになった。正直顔を知っている侑俐さんや先生や鷹臣さんが良かったなあ…他の人何だか怖いし…。と、いけない、電話なんだから出ないとだよね。

「も…もしもし…？」

『今何処に？』

私は咄嗟に耳から携帯を離した。えっ？何か口調が怒ってる？何で

?!

『1人にならない方が良かったと思っただけですけど?』

あ…そつか、ネットに顔が出てて危ないからって言ってたっけ。心配してくれたのかな?でも1人じゃないし平気だよね。

「大丈夫です、日向先輩と一緒にですから。」

『だから、1人って言うのはそう言う事じゃ…!』

お説教されそうだったので私は電話を切ってバッグの中に仕舞った。いざと言う時は反撃だって出来るしちょっと心配し過ぎだよね。

「およ!雉鳴さん来た来た!車じゃないのね。」

「フランスから帰国したばかりで車は無いかと…。」

眼鏡と帽子を外した日向先輩が私の方を見ながらふむふむと頷いた。それから見失わない様に2人の後を尾行した。どうやら2人の行き先は数駅先の近くにある水族館らしい。と、唐突に日向先輩が口を開いた。

「そう言えばひおちゃん、あの背高い金髪の人誰?」

「ふえっ?!」

「ほらほら、あのお姫様抱っこした人。私あんなの初めて見たもん、吃驚だったよお。」

思い出してまた頬がかあつと熱くなった。鷹臣さんの事だよな?でも何て言えば良いんだろう?幼馴染?お兄ちゃんみたいなの?それとも…。

「そんなに赤くならないの。ひおちゃんがあの人だーいい好きなのは解ったからさ。」

「好き…?」

ドクンと…一際大きく心臓が跳ねた気がした。

25・アウト?セーフ?

水族館を一通り見て回り、私達は館内にあるファーストフード店に入った。そこで私は思い切って聞いてみる事にした。ずっと穏やかな笑みを絶やさないこの人に。

「どうしていきなりデートしようなんて言っただんですか?雉鳴さん。」

「んー、まあ、単に面白そうだったのと…色々試してみたくてね。」

そう言うと雉鳴さんはチラリと視線を横に送った。視線の先を向くとわたわたと隠れる若葉の姿が見えた。駅からずっと付いて来てるけど、本人はバレてないつもりなんだろうなあ…。

「良い友達だね。ちょっと危なっかしいけど。」

「若葉はいつも一生懸命で、明るくて…落ち込んだ時も励ましてくれたり…私の自慢の友達です。」

目を細めて笑った雉鳴さんにつられて私も少し笑みがこぼれた。そんな雰囲気なぶち壊す様に携帯がヴーヴーと震えた。届いたメールにはURLがあり、その下に一言だけ書かれていた。

『サイトを見る』

サイトって、あのゲームのサイトだろうか?首を傾げつつURLをクリックした。能気なキャラがびよこびよこするのを微笑ましく思いながらページを送って行って、ある文章に仰天した。

『現在Mas sic MirrorとMoon Princessの突発

デートイベント発生中！アンケートから選ばれたお題はコレ！」

「えーっと…」姫のドジで騎士役がびしょ濡れ！それで怒った騎士役がお仕置き…！な〜んてシチュに萌えます〜！」

少し唾然としてから何となく周りを見回していて気付いた。客の数名が携帯を操作しながらこつちを見ているのだ。ピンと来た私は同じサイトの掲示板に飛んでみる。チャットの様に次から次へと書き込みが流れて行くのが見えた。結構な勢いで広まってる？！と言うかこの具体的なシチュエーションは何事？！

「お待ちせ致しました、あちらのお客様からです。」

「えっ？！あの…何ですか？これ…。」

「XLの水です。あ、何なら密佳特製の氷水ピッチャーなんてのも此処にありますか…。」

店員もグルですか。縋る様な思いで雉鳴さんを見ると既に呆れてげんなりしていた。と、店員のトレイから水の入ったコップを取って私に差し出した。

「はい、じゃあ頑張ってドジッ娘キャラ宜しく。」

「へっ？…や、やる気ですか？！」

「うん。」

開いた口が塞がらない…この人正気なの？大体ドジッ娘とか私のキヤラじゃないと言うか、そもそも人に水掛けるドジってどう言う状況？故意にぶっ掛けるにしたって私にはそんな乱暴な事…。

「早くしろ、寸胴。」

「何ですってえ?!」

混乱した所に罵声を浴びたもんだから、つい、うっかり、勢い余ってやってしまった。

「ピッチャーの方だし…。」

「いじいじ、ごめんなさい！ごめんなさい！と、取り敢えずこれで…！」

慌ててハンカチを差し出した。と、私の唇に水に濡れた指が触れた。

「指越してセーフかな？」

聞き返す前に唇が塞がれた。その指と、その唇で。

26・女子会

日向先輩に連れられて澤田先輩のデートを尾行して…そこで私達は何だか凄い光景を見てしまった。日向先輩の叫び声の後は正直何が何だか覚えていなくて、そして現在駅から近かったと言う理由で2人共私の家に呼ぶ事にした。

「あの、お茶です…。」

「う、うん！あの…ごめんね、急に押し掛けちゃって。」

「もぉー！何呑気な事言ってるのよ！解ったでしょ？！あの人のゲームに託けて彩花に手出す気満々なんだってば！」

私の部屋で先輩達が喧嘩されても困るんだけどなあ…。でも、今日の事で色々解った。先ずあのサイトは私達が思っているより広まってて認知度もあるって事だ。イベントや指令みたいなのを決めてるのは多分佐藤さん達なんだろうけど、悪ノリして変な命令が出ないとも限らない。でも逆に安心した点もあった。それは『ゲームのデータテスト』と言うのを前面に出しているお陰で目立ちに目立っている。もしイベント中に妨害目的で殴ったりしようものなら証人は幾らでもいる。それ故においそれと私達に手は出せない状況が出来上がっているという点だった。

「ひおちゃん！何か言っちゃってよぉ！彩花つてばあのセクハラ野郎庇おうとしてるんだよ？！騙されてるってばー！」

「だ、だって、顔が好みで…ぐ、ぐるじい…！」

ふと見ると中々にバイオレンスな状況になっていた。後始末が面倒そうだし首を絞めるのは止めさせた。日向先輩には悪いけど私は全く別の事が気になってしょうがなかったのだ。

「あの、澤田先輩、聞いても良いですか？」

「はいはい？」

「キスって気持ち良かったですか？」

2人してお茶を盛大に吹き出してむせている。真面目に聞いたんだけどまずかったのかな…？2人の背中を両手でさすっていると、涙目の日向先輩が自分の胸をトントンと叩きつつ言った。

「ひおちゃんって、天然…？」

「いえ、そのつもりは無いですけど…私彼氏居た事もキスした事も無いからどうなのかなって思ってる…。」

私の言葉に2人は目を真ん丸にした。

「ええ?!じゃあ旋堂さんは?!姫抱つことかしてたじゃない!」

「幼馴染と言うか…: 勿論好きですけど、子供の頃なので…。」

「そのおっぱいで色んな人を翻弄しまくってるんじゃないの?!」

「若葉、それじゃ緋織ちゃん只の尻軽悪女だよ…。」

若干引つ掛かったけど、大体合ってるので私はコクリと頷いた。確かに色々言ってくる人やナンパは何度も遭ったけど誰かに告白されたりラブレター貰ったりは一度も…。

「ああ、生徒会長の天城先輩なら入学式の際に『その身体は危険だから俺を虫除けにしろ』って言われてぶん殴りました。」

「それは正しいわ、私あのエロキングのパートナーだけど触ったらボールペンで刺してやるつもり。」

「若葉、生徒会長に『エロキング』って…。」

漫才っぽい2人の会話を宥めつつ聞いていると放置してあった携帯が鳴った。

「あれ？睦希先輩だ。はい、倉式で…。」

『ごめんなさあーい!!』

むしろその大声に謝って欲しいです。耳を突き破るかと思う程の大声は余裕で先輩達にも聞こえていた。2人はアイコンタクトの後携帯に耳を傾けた。睦希先輩は受話器の向こうで深呼吸を繰り返していた。

「一体どうしたんですか？」

『せ…せ…せ…!!』

「せせせ？」

『旋堂さん取っちゃった…!!』

「はい？」

私達は3人で顔を見合わせた。

27・修羅場を期待した

電話から30分程経って、私の部屋は実にわいわいと賑やかになっ
ていた。

「緋織ちゃんの家って豪邸ね〜良いなあ。」

「うっうっうっ…ごめんなさ〜い。」

「鶴村さん、もう泣かないで。」

どうやら睦希先輩は軽くパニックで参加者の女の子全員に電話やメ
ールを送ってしまったらしい。自分の携帯に自分でメール送ってる
辺り、動揺し過ぎな気もするけど、流石に放置も出来ないし、電話
では埒も明かず、ついでに他の人達も話を聞きたがって、結局私の
家に集合と言う事になったのだ。

「よーしよーし、萌香お姉さんが聞いてあげるから。」

「そもそも何で泣いてるの?」

涙で真っ赤になってる睦希先輩は、最早びしょびしょになった夕オ
ルで顔を拭いて、口を開いた。

「あのね…今日土曜日だったから…私本屋に行ったのね。そしたら
…さ、参加者の眼鏡男子の人が金髪の女の子と一緒に居たの…。」

「眼鏡男子って誰?居たっけ?」

「あ、真壁さんでしょうか?私の仮パートナーの。」

彩矢さんの言葉にこくこくと頷くと、鞆からデジカメを出して写真
を表示し始めた。皆で画面を覗き込むと、確かに金髪の女の子と私
からチヨコ代巻き上げた真壁さんの姿が写っている。これって盗撮

じゃないでしょうか？と言っツッコミはこの際スルー。

「それでね、私、この女の子緋織ちゃんかと思ったの。髪形似てたし…。」

自分では解らないけど、数名はなる程、と言った様子で頷いていた。

「そしたら、いきなり肩叩かれてね、ビックリして振り向いたらエロ本大量に持った旋堂さんが居たの。」

「それはどうなの?!」

「大量つて…中々勇氣ある行動ね…。」

休日にエロ本大量買いつて…鷹臣さん、何してるんだろう。

「またデジカメ取り上げられるかと思つてね…私つい『漫画の資料集めです!』言っちゃつて…まあ正直間違つてないんだけど……そしたら旋堂さんやけに喰い付いて来て、私の趣味とか色々聞いて来て…。」

「腐女子に喰い付くのもどうかとは思うんだけど…それで?」

「話してる内に『試しに彼女になってみない?』つて、すつごく自然な流れで言われて、つい『はい。』つて返事しちゃつた…。」

絶句、と言っか何も言えない…。鷹臣さんも鷹臣さんだけど、つい、でOKしちゃう先輩もどうなんだろう?

「これは祝福した方が良いのかしら?」

「でも私リア充なんてなつた事無いし、緋織ちゃん交えて泥沼修羅場とか怖いし、見る分には良かったんだけど…。」

修羅場を期待されていたらしい。微妙な空気の中、ノックの音と能

天気なお母さんの声が聞こえた。

「緋織ちゃん、お夕飯出来たわよ？皆さんの分もあるからどうぞ。」

「取り敢えずご飯にしませんか？それと睦希先輩、私鷹臣さんの彼女とかではないですから、修羅場を期待されても添えません。」

「え？そうなの？ひお。」

しふおんまで期待してたのね…。溜息と共に私は皆をリビングに誘導したのだった。

28・流暢な悪口

携帯の振動音に起こされた。まだ朝の6時過ぎで、皆まだすやすやと寝息を立てている。起こさない様にそおつと携帯ごと廊下に出てドアを閉める。

「もしもし…?」

『お早う、我が愛しの彼女。中々名演技だったみたいだね?』

クスクスと笑う声だった。少し呆れつつ溜息交じりに返す。

「ふざけないで。話してくれる約束でしょう?それとも反故にする?桃栗みかん先生。」

少し間が空いて、それから少し下がったトーンの声で応えた。

『…降りて来て、門の前に居るから。』

電話を切って静かに階段を降りた。昨日賑やかだったせいかりビングは静まり返って無機質に見えた。玄関の扉を開けた所で人影がもう2つ…いや、性格には人影2つと毛玉2個が見えた。

「貴方は確か董さんのブラ片手で外したホストな響さん。」

「誰に聞いたの?!」

「器用だな、お前…。」

「そう言う話しに来たんじゃないでしょう?旋堂さん。」

門の前で騒ぐといけないう事毛玉…もとい犬の散歩を兼ねて

近くの公園に移動する事になった。まだ人もまばらで歩きながら欠伸が何度も出る。公園に着くと響さんは犬のリードを外してドッグランに二匹を放した。

「皆何て言ってた？」

「…反応様々。日向ちゃんはセクハラだー！って騒いでたり、先輩達は良かったねーだったり、しふおんちゃんはキョートンとしてたりね。」

この笑い方クセなんだろうか？顔こそ笑ってるけど、張り付いたみたいで読めない。何より解らないのは昨日日本屋で会って、突然持ち掛けられた話。

「どうしていきなり彼女になれなんて言ったの？しかもあんなテンパった芝居までさせて…それともこれも小説の取材の一環なの？」

「まさか。」

「…じゃあ、やっぱり緋織ちゃん絡み？あの子目立つし…。」

不意に伸びて来た左手にぐいっと髪を掴んで引き寄せられた。宝石みたいな緑の瞳がごく近くにある。咄嗟に飛び退こうとしたけど、いつの間にか私の後頭部をしっかりと捕らえていた右手がそれを阻んだ。近くで見てもこの人は綺麗だ。金の髪と緑の瞳は、まるで人形か彫刻のそれに似てる。

「俺は今度こそ緋織を守ってやりたい…その為には手段だって選ばない。」

一瞬背筋がぞくつと冷えた気がした。冗談やハツタリじゃない。多分この人は本当に手段を選ばない。

「それと私を彼女にするのと何の関係があるのかさっぱり解らないんだけど？」

「黒髪ストリートで露出の少ない女がツボなだけだ。」

あ、この人馬鹿だ。気付いて緋織ちゃん！しかしこの近さは反則よね、幾ら中身が馬鹿だろうとこんなキラキラ星人みたいな人にホルドされたら直視出来ない。私純情ですから。キヨロキヨロと視線を泳がせていると、横からスツと写真を突き出され響さんの声が聞こえた。

「…日高鴛彦…2年前緋織が現行犯逮捕したストーカーの常習犯だ。」

「えっ…?!す、ストーカー?!」

都市伝説かと思っていたのにまさか実在するなんて…そして緋織ちゃんも被害者！何てお姫様な逸材！

「そ、それは大変…！じゅる…。」

「取り敢えず涎を拭け、至近距離で妄想全開されたら深刻なムードぶち壊しのドン引きだからな。大体その容姿で頭も悪くないのに盗撮と妄想が趣味と言うのは個人的にいただけじゃないんだ。」

流暢に悪口言い過ぎ！

29・第一印象

朝の6時過ぎに手を踏まれて目が覚めた。まどろみながら目を開けると、明らかにこそこそと出て行く姿。あの子は確か昨日泣いていた睦希ちゃんよね？トイレかしら？

「ふざけないで。話してくれる約束でしょう？それとも反故にする？桃栗みかん先生。」

ドアの隙間から聞こえた声に思わず体が固まった。声自体に驚いたのも勿論だけど、問題は出て来た名前の方だった。桃栗みかん先生とは、私がまだ高校生の時夢中になった携帯小説の作者に他ならなかった。ほのぼののだったりミステリーだったりジャンルも豊富で、駅で読みながら泣いてしまった事もある。そのみかん先生が睦希ちゃんの知り合いだったなんて…。

「うーん…董先輩…？」

「あ、ご、ごめんね緋織ちゃん、起こしちゃった？」

「あう…そのチョコは私のです…むにゃむにゃ…」

幸いにも寝惚けていたらしい緋織ちゃんはそのまま二度寝してしまつた。静かに階段を降りる音が聞こえる。え？外に行くのかしら？焦りつつこつそり後を尾ける。と、門の前に人影と子犬が見えた。…って、旋堂さんと響さんじゃないの…早朝逢引にしては響さんと子犬ちゃんがお邪魔虫よね？これからみかん先生に会いに行くとか？あ、いけない見失っちゃう！角を曲がった3人を追い駆けようとした時、後ろから腕を掴まれ引っぱられた。

「尾行下手過ぎだ、家政科1年蔭澤董。」

本気で心臓が止まるかと思った。恐る恐る振り返るとアッシュグレイの髪とサングラスが目飛び込んで来た。

「す、すいません！今お財布持つてなくて！」

「カツアゲじゃないから。」

あれ？パツと見怖いけど普通に善い人っぽい？

「えーっと…失礼ですがどちら様で？」

「一応データテストの参加者んですけど覚えてない？館林です。」

渡された鍵を見て記憶を辿ってみるけど、正直貧血で倒れた私は半分位しか覚えていなかった。考え込んでいると、私は3人の事を思い出して声を上げた。

「あつ！睦希ちゃん見失った！」

「この先の公園入ったよ。何かあったの？」

「えーっと、睦希ちゃんがみかん先生と話してて付いて来たら子犬が…。」

「解らないにも程がある。」

取り敢えず順を追って説明する事数分、何とか言いたい事は伝わったと思う。館林さんは呆れた様な困った様な顔で頭を掻くと携帯を取り出してメールを打ち始めた。

「込み入った話だといけないから侑俐に確認してみるよ。」

「ゆーりって誰ですか？」

「アンタの騎士役、響侑俐。流石にこっちは覚えてるだろ？」

「あ、響さんは解ります。そっか、侑俐って名前だったんですね。」

「そそ、あいつ高校時代の後輩で今ウチに犬と一緒に居候してて…。」

「同棲ですか？」

あれ、気のせいかな？館林さんが凄く残念な物を見る目でこっち見てる気がする。

「…ルームシェア。」

「そ、そうですね！ルームシェア！」

私の第一印象つてもしかしてドジ…？

30・憧れの先生が…

休日だと言うのに何故こんな朝っぱらから出掛けなきゃならないのか…侑俐に頼まれていた物を持つてのんびりと歩いていると急に侑俐から電話が掛かって来た。何で支給携帯に掛けて来るんだ？アイツは…。

「もしもし？」

「ああ、先輩。今董さん見掛けたんですよ。尾行してるっぽいので一緒に来て貰って良いですか？公園に居ますから。」

「え？ああ、別に良いけど…。」

「どうも、それじゃ。」

礼を言うと素っ気無く電話は切れた。董…侑俐のパートナーか、あの結構とろくさそうな…あ、居た。声を掛けようとするとうとうから話し掛けて来た。

「お帰りなさい、電話済みました？」

「えっ？」

お早う御座いますならまだしもお帰りなさいと言われる覚えは無かった。言い間違えたのか？いや、どんな間違いだ、メイド喫茶じゃあるまいし…。

「館林さん？」

「あ、いや、えーっと、侑俐から荷物持って来いって頼まれててさ。」

「何ですか？それ…糸…？」

「いや、ウィッグ。」

蔭澤はキョトンとした様子で袋の中を見ていた。此処で突っ立っているのも変なので蔭澤を促し公園へ入って行った。と、やたら目立つ金髪と黒髪が目に見え込んで来た。

「のきやつ?!」

「どんな悲鳴だよ...。」

「わわわ...見ちゃダメですっ!サイに蹴られます!」

「それを言うなら馬だ、それとサイなら蹴るより踏むだろ。」

馬の代わりにサイが出て来る脳も興味深い、純粹に馬鹿の可能性もある訳だが。焦る蔭澤は何故か俺の後ろに隠れて2人を見ていた。騒ぎつつ見たいらしい。

「侑俐。」

「ああ、先輩...と、董さん?」

「あ、お、お早う御座います!」

顔を赤らめてぺこりとお辞儀をする。何だ、満更でも無さそうだな。持って来た荷物を確認すると侑俐はそれを金髪男、もとい旋堂に渡した。

「何?ツラ?」

「旋堂さんは目立ち過ぎますから。」

「これだけ長いと黒でも目立つんじゃない?切って染めれば良いのに。」

「そんな事したら緋織が寂しがる。」

「呆れた、その為にわざわざ?馬鹿じゃないの?みかん先生。」

何やら惚気なのか馬鹿話なのか解らない言い合いをしている。何だ、女の方鶴村だったのか。ふと横を見ると蔭澤が有り得ないほど真っ

青な顔になって居た。

「だ、大丈夫か?!」

「みかん先生が男…私の憧れのみかん先生が男…ふうっ…。」
「わぁ?!倒れるな!!」

何なんだコイツは?!

31・キングダム没収

現在時刻朝の9時半、並木道を自転車を下っていた。世間は日曜日だが花屋である家に明確な休みは無かった。さっきの信号待ちの途中、携帯から『』のサイトを見ていた。twitterを含め掲示板には様々な書き込みが頻繁にある。からかう様な物から興味津々な物、苛立ちをぶつけている内容も見られる。限定で公開されていたらしい顔写真は、いつの間にかイラストと差し替えられていたが、学校の連中を含めて既に広く知られている今となっては意味があるんだか無いんだかと言った所だろう。

「痛ったあ！！」

「え？」

直ぐ近くで声かして思わず顔を上げた。と、自転車の脇で蹲る女の子の姿があった。うっかり爪先を自転車で轢き潰してしまっただけらしい。

「大変申し訳ありません、ぼんやりしていて…あれ？日向若葉じゃないか。」

「何すんのよ！このセクハラキングダムバカ会長！」

俺は日向の中で知らない内に随分と出世していたらしい。しかしそんなに長くては呼び辛いのでは？第一キングダムは王国と言う意味で個人に対して使うには少々変だな。色々と考えていると日向は涙目で爪先を押さえていた。

「大丈夫か？見せてみる。何処が痛い？取り敢えずこのサドルで良い、座って靴を脱げ。」

日向はこちらを睨んでからサドルに座り靴を脱いだ。靴下の先が赤く染まっているではないか！

「お、おい！大丈夫か？！血が…！」

「あう…爪割れてるっばい…最低…。」

何て事だ。俺は自転車で、しかも坂を下っている状態でぼんやりして日向に怪我をさせてしまったなんて…。

「日向、直ぐ病院へ！」

「はあ？こんなの消毒して絆創膏でちよちよいつと…。」

「馬鹿！嫁入り前の体に痕でも残ったらどうする気だ?!」

「いや、バカはアンタかと。」

何て呑気な！説教をしようとしたがふとこの前の事を思い出した。日向は気が強い為に痛いのを我慢して気丈に振舞っているのではないだろうか？病院が怖くて大丈夫だと思わせているとか…。そうか、この前鶴村が言っていた『ツンデレ属性』と言う奴か、確か強がっている時は『ツン』で素直な時は『デレ』だったか。しかしこんな時位素直に痛いなり怖いなり言えば良い物を損な奴だ。溜息を吐いて日向の靴を取り上げ、サドルに座らせたまま自転車を動かした。

「ちよつ？！何処行く気よ？！靴返して！」

「病院が嫌だと言うならせめてちゃんと手当てをする。幸い俺の家はこの近くだ。」

「誰が行くか！人攫い！」

「非常時に『ツン』は止めておけ、損をするぞ日向。」

「アンタが病院行きなさいよ！このバ会長！」

怒鳴り声と共に後頭部をまた鞆で殴られた。そう言えばセクハラキ
ングダムは没収されたい。

32・うつかり激痛

ズキズキと痛む爪先をチラ見しつつ、私は殆ど誘拐されるみたいに
バ会長の自転車でトロトロと運ばれていた。最近冴えないなあ…バ
イトだと思つてあんなテストに参加しなきゃ良かった。深々と溜息
を吐いた時、自転車が止まった。

「歩けるか？」

「だから大丈夫だつて言つてるのに。」

「済まなかつたな…ぼんやりしてて。」

バ会長が叱られた犬みたいにしよんぼりと俯いた。わざとじゃない
んだろうしそんなに気にしなくても良いのに…これじゃ私が苛めて
るみたいじゃない。返す言葉に迷つて視線を逸らすと、色取り取り
の綺麗な花がいっぱい並んでいた。

「ここ…花屋さん？」

「ああ、ウチは祖父の代から生花店を営んでる。さつきはお得意様
へ配達した帰りだったんだ。」

「ふうん…。」

話を半分以上右から左へ聞き流しつつ花を見ていた。ウチの家族は
私を含めて花を飾ったりするタイプじゃないので正直名前とかは判
らない。でもキリンの形の鉢植えとか小さい花束はやっぱり可愛い
と思う。

「日向、こっちに座つてくれるか？手当てをしたい。」

「自分で出来るのに…。」

諦め半分に店の奥に入って座ると、バ会長はいつの間にもやら用意した救急箱から消毒液やら絆創膏やらを出していた。少し躊躇いがちに私の足に触れると、傷口を濡れたガーゼで拭き始めた。何と云うか、傳かれているみたいなた体勢よね、跪いてるし女王様気分と言っか…。なんて考えていた次の瞬間、爪先に激痛が走った。

「いつ…?! いったあ　っ!!」

電気ショックでも受けたのかと思う位だった。消毒ってこんなに沁みる物だっけ? ううん、絶対何かおかしい、有り得ない。

「あ、これキンカンだった。」

傷口にキンカンって、もう拷問の域じゃない! ああ、もう最悪! あまりの痛みに堪え切れず涙がぼろぼろ出て来た。バ会長はキンカン持ったままオロオロと口を開く。

「す、すまん日向…その、わざとじゃ…。」

「も…帰るう…痛い…。」

涙で視界が滲んで、よく見えないし、思考が働いてないのか何言ってるかもよく解らない。ひたすら爪先が沁みて痛い。

「ちょっとちょっとお? ミコちゃんってば悪い子ねえ、何日向ちゃん泣かせてるのよ?」

「も、萌香姉?! 違っ! ご、誤解で…!」

聞き覚えのある声に顔を上げようとした矢先、爪先にさっきの上回る痛みが走った。

「ふぎやあああつ?!」

「あ…すまん足踏んだ…。」

それから私は10分間泣き続けた。主に痛みで。

33・素直な子の育成法

泣きつ面に蜂、と言うしか無い程災難続きになってしまった日向ちゃんには10分間泣き続けて漸く落ち着いた。それでも泣き腫らした目は兎みたいに真つ赤っかだった。ミコちゃんは流石に反省してるみたいで、さつきからずつと土下座体勢のまま居る。ちよつと踏みたいわね。

「日向ちゃん、ほらこれで顔冷やして。」

「はい…。」

「ミコちゃんも、ずっとそうしてたって何もならないでしょ？丁度ペアなんだし怪我が治る迄優しくしてあげなさい、本当にもうドジなんだから。」

ミコちゃんは何か言いたげに私を睨んでから立ち上がった。日向ちゃんの方は既に軽くトラウマになっているのかあからさまにビクツと体を強張らせていた。まあ、怪我させられて、キンカン塗られて、靴で踏まれたらそりゃあトラウマにもなるでしょうよ。あー、見るだけで痛いわ。と、ミコちゃんは意を決したかの如く日向ちゃんの両手を掴んで言った。

「今から怪我が治るまで俺を犬と呼べ、日向。」

「絶対に嫌。」

ツッコミ所が多過ぎて清々しい方向に育ってるわ。ちっちゃい頃は転んだり苛められたりする度にびーびー泣いて私に助けを求めて来る可愛い子だったのに。時間って残酷だわ…尤も中学に上がる頃は背とかとつくに抜かれて可愛くなくなっちゃったけどねえ。

「ねえ、ミコちゃん、何の本読んだの？」

「鶴村が参考になると言って大笑いで貸してくれた『僕は執事と禁忌を犯す』と言うタイトルの…。」

「読んじゃダメよ…そんな偏ってそんな本は…。」

睦希ちゃん、何て本を…今度借りよう。

「兎に角、このままでは俺の気が済まないんだ。もう直ぐ中間考査もあるし怪我のせいで成績が落ちたりしてはご両親に申し訳が立たない。」

中間考査かあ、去年の事なのにもう受ける事は無いのよね、何だか寂しい様な新鮮な様な気分だわ。

「中…間…?」

「ああ、明日各教科の範囲発表があるだろう?」

血の気の失せた顔で日向ちゃんがミコちゃんと私をゆっくり見遣っている。え?まさか、そんなベタな展開じゃないわよね?と、明後日の方向を見ながらポツリと溢した。

「学校爆発しないかなあ…。」

「日向ちゃん…。」

「つまりやってないんだな?よし、では明日から送迎とテスト対策もみっちり教え込むとしよう。教師陣も変わっていないし大体誰がどんな問題を出すかも予想が付く、大丈夫だ、まだ時間はある。」

「いやー!鬼ー!」

「今日の所は送って行く、ご両親に怪我させた謝罪もしたいしな。」
「絶対来るなー!」

暴れる日向ちゃんを肩に担ぐとミコちゃんはスタスタと出て行った。
つくづく真面目な所は変わってないのねえ…ファイト！日向ちゃん
！手を振って見送りながら気付いた。

「あ、私ジョウ口買いに来たんだったわ。」

すっかり忘れてた。

34・動揺しています

中間テストの範囲表を見ながら溜息が出た。隣ではひおがメモを取っていた。可愛くて成績良いとか神様どれだけ不公平なんだろう？

「ひおは凄いよねえ、私歴史と物理が本当宇宙語としか思えないもん。」

「でも現国とか家庭科はしふおんの方が全然良いじゃない。実技満点とか神レベルだよ。」

「夢はお嫁さん〜。」

「じゃあ私がしふおんお嫁に貰う〜。」

ふざけ合いながら、私の心はざわついていた。どうしてひおは何でも持つてるんだろう？ふわふわの髪とか、綺麗な顔とか、勉強とか運動とか全部こなせて、助けてくれる人も一杯居て…。

「私ひおの引き立て役なの？」

私に抱き付いていた手が凍る様に固まった。一瞬頭が真っ白になって、それからハツと我に返って口を覆った。手がそっと解かれて、泣き出しそうなひおの顔が見えた。

「あ、あの！ひお、違…！」

「そんな事思つてないよ。」

「ひお…。」

「でも、ヤだつたならごめんね…しふおん。」

涙は見せなかった。凄く無理矢理作った笑顔だった。走ってくひおを夢中で追い駆けた。何度も名前を呼んで、ごめんって叫んで必死

で追い駆けた。

「きゃっ…!!」

出会い頭に人とぶつかりそうになって尻餅を着いた。人が通り過ぎた時には、もうひおの姿は見えなくなっていた。ぼろぼろ涙が溢れて止められなかった。何であんな事言っちゃったんだろう？ひおが私を引き立て役にしていると、本気で考えた訳じゃない。ただちよつと羨ましかっただけ…。

「何やってんの？そんなところで。」

廊下へたり込んだまましていると、頭の上から声がした。七海君だった。

「七海く…うつ…うつ…うつ…ひおが…ひおがあ…。」

「喧嘩でもした？取り敢えず立て、ほら。」

伸ばされた手を取ると、ぐいっと引つ張り上げられた。ふら付きながら立ち上がると、少し心配そうに七海君が顔を覗き込んだ。ふと手や顔に絆創膏や傷が一杯あるのに気付く。七海君こそ喧嘩でもしたんじゃないだろうか？それに、何と言うか前みたいに触るだけでおろおろしてる感じが無い。

「大丈夫か？」

「何か優しい…本当に七海君？」

「往来で座って泣いてる女にキツく当たれる程サド趣味じゃなくてね。それに、ゲームの中だけどしふおんの事は俺が護るって決めたから。」

キザっちい台詞に思わず吹き出しそうになった。と、まだ繋いでいた手がきゅつと握られて、そのまま引き寄せられた。えっ？何これ？私七海君に抱き締められてる？！そんな！まだ早いよ！嫁入り前の15歳！桜華しふおんは動揺してます！

「あ…あの…?!」

「『泣いてる女は抱き締める』って聞いたからやってみたけど…俺が先に死にそう。」

「…何それ…でもありがと…。」

コテンと頭を胸に預けると、七海君が緊張してるのが嘘じゃないって解った。だって心音バツバクだったから。

35・好奇心の代償

何度も名前を呼ぶ声が聞こえた。何度もごめんって叫ぶ声が聞こえた。だけど止まって振り返る事が出来なかった。泣かない自信がこれっぽっちも無かったから。ひたすら走って、気付けば中庭まで来てしまっていた。狙った様なタイミングで始業のチャイムが鳴った。

「戻らなきゃ…。」

言い聞かせるみたいに呟いて重い足を引き摺る様に歩いた。いつそ医務室にでも行こうかな？頭が痛くて休んでいましたって事にして…でも先生にも迷惑掛けちゃうし、叱られるだけだよ。何やってるんだろう、私…後でしふおんに謝ろう、冗談で言っただけかも知れないのに、私を取り乱したらしふおんだって気にしちゃうだろうし。

「え…？」

空耳だと思った。あるいは風の音か何かかと思った。

「唄…？」

誰かの唄声だった音楽科のそれとは違う、不思議なメロディで、聞いた事も無い歌詞で、でも確かに唄だった。吸い寄せられる様にその唄声が聞こえる方へ歩いていった。どうしよう、もう教室に戻らないといけないのに、気になって仕方が無かった。辿った先にあったのは園芸科の温室だった。僅かに開いた扉をそっと開けて中を見回すと、花かと思う程真っ赤な髪が目に入った。唄を聴きたくて声を掛けられないまま立ち尽くしているとピタリと唄が止んだ。伏せて

いた緑の瞳がしっかりと私を捕らえている。怒られるかと思っ
て後ずさりした時だった。

「あれ、唄終わり？」

「ひいつ?!」

思いも寄らぬ方から声がして本気で飛び上がりそうになった。振り
返ると温室のベンチに寝転んでいたらしいその身を起こした。

「真…壁さん…?」

「充分寝ただろ、そろそろ行く。」

赤い髪の人、一之瀬さんが不機嫌そうに立ち上がって出入り口であ
る私の方へ歩いて来る。慌てて道を開ける。謝った方が良いかと思
い口を開こうとした時、一之瀬さんは少し笑って言った。

「怒ってる訳じゃないから、そんなバンビみたいに震えなくて良
いよ、響さんのお姫様。」

「え?」

聞き返す間も無くボタンと扉が閉まった。響さんって、侑俐さんの
事だよな?何か聞いたのかな?それとも知り合いとかで…。

「ねえ。」

声と壁に伸びて来た手に今度こそ背筋が凍り付いた。後ずさるうに
も道を開けた結果私の後は残念ながら壁で、そこに押さえ付けられ
る体勢になっていた。目の前に顔があつて少し怖くて顔を伏せる。

「水飲んで良い?」

「はっ?…ど、どうぞ、好きなだけ飲めば良いじゃないですか。」
何で水飲んで良いか私に聞くのよ、それもこんな体勢で。寝惚けるとか?ビククリして損しちゃった。真壁さんはその体勢のまま私の顎を軽く持ち上げて言った。

「ごめんね。じゃあちょっと、気をしっかり持っていてくれる?多分加減出来ないから。」

「え?あの、何…っ?!」

余りに突然過ぎて私は何をされているのか直ぐには解らなかった。押し退けようとした両手はあっさり捕まえられて、逸らそうとした顔は向き直されて、拒絶の言葉は飲み込まれて、何度も、何度も、何度も、いつの間にか抵抗すら忘れてしまう程彼は私の唇を奪い続けた。

36・化け物

授業が始まってしまったせいか、とても静かだった。漸く離れた唇を拭う様にツツと指が触れた。

「ごめん…。」

謝る位ならどうして？と聞く事は出来なかった。まだ少し熱を帯びた唇に手をやると、途端に唇の感触を思い出して顔がどんどん熱くなるのが自分でも解った。俯いたままズルズルとその場にへたり込む。

「ごめんってば。」

真壁さんは顔を伏せた私の髪を撫でていた。言いたい事も聞きたい事も一杯あるけど顔が上げられない。涙が出そうになるのを意地で堪えるのに精一杯だった。

「…響侑俐が好き？」

「えっ…？」

「自分の事をストーカーから護ってくれるあの人を好きになった。」

思い掛けない言葉に目を見開いていた。頭の中に何で、どうしても、の言葉だけが駆け巡った。驚いたままの私を余所に真壁さんは言葉を止めない。

「だから無茶をして困になった。」

「…めて…。」

「犯人は逮捕出来たけど、その時のショックから触れられるのが怖

「なくなった。」

「止めて…。」

「今は殆ど克服出来るけどそれを報告しなかった…自分の元に繋ぎ止めたかったから。」

「止めてよ！止めて！お願いだから！」

叫んで、両手で耳を塞いだ。どうして…？何で知ってるの…？侑俐さんが話したの？ううん、違う、侑俐さんはこんな事知らない、言っていない、何より知られたくないこんなずるくて汚い私…侑俐さんにだけは絶対見せたくない！

「言わないよ、誰にも。元々そんなつもりも無い。ただ見えたから言っただけ。」

「見え…た？」

「母親曰く俺は化け物だから。」

顔を上げた先に見えたのは闇の中みたいな瞳だった。誰も見てない何も見てない、石みたいなの、氷みたいなの、そんな瞳。それから何も言わず、ただ私の頭を優しく撫でていた。自分を化け物と言つ真壁さんは何でか凄く悲しそうに見えて、目が離せなかった。

「…怒らないのか？」

「怒ってます…。」

「『気持ち悪い』と叫んで物を投げ付けたりは？」

「そうして欲しいですか？」

目を伏せてゆっくり首を振る。私は聞けなかった。どうしてあんな事をしたのか、どうして私の考えてる事や侑俐さんの事が解ったのか、どうして化け物なのか、どうしてこんなにも悲しそうなのか。聞けなくて、でも何か言いたくて、呟く様に私は言った。

「お水：飲みますか？」

この時私はどうかしていたのかも知れない。授業もサボって、こんな所で、会ったばかりの人にいきなりファーストキス奪われて、怒って引つ叩いて逃げれば良いのに、いつもなら絶対そうしてた。

「何で逃げないの？」

「解らないです。」

少し呆れ気味の浅い笑顔で、カチャリと眼鏡を外した。少し躊躇って、何か言おうとしたけど、何も言わないままそつと私の両頬に手を置いた。私が目を伏せるのとほぼ同時に唇が触れた。触れるだけのキスから、次第に深くなって、互いの息遣いだけが静かな温室に響いていた。

37・仔猫

放課後、私は館林先生に呼び出されていた。結局授業をサボってしまったから怒ってるんだろう。しふおんにもまだ謝れてなくて、どんだん気持ち沈んで行つた。医務室の前で扉を開けるのを躊躇っているところらに來る足音があつた。

「ひお…。」

「しふおん…あ、あの…しふおん、私…！」

「ひお…！！」

言うが早くしふおんが私に飛び付いて來た。泣きそうな、ううん、もう泣いてるみたいな声で何度も『ごめんね』と繰り返した。私も何度も謝つた。一頻り泣き合つて、謝り合つて、その内何だか2人して笑つてしまった。

「え？じゃあ、しふおんも呼び出されたの？」

「うん…ちよつと話があるからつて。ひおも？」

「うん…。」

私には怒られる心当たりがあるけど、しふおんがお説教されるなんて思えないし、一体何の話だろう？首を傾げていると、唐突に医務室の扉が開いた。一瞬驚いた私達だったが、先生はキョロキョロと辺りに人が居ないかを確認して私達2人を医務室へ招き入れた。

「どうしたんですか？先生。」

「実はなあ…。」

先生は医務室の奥から段ボール箱を抱えてこつちへ持つて來た。

「みゆ〜みゆ〜みゆ〜。」

「仔猫だあ!」

「かつ、かかかか可愛い〜っ!」

生きたぬいぐるみみたいな仔猫が3匹、何とも愛くるしい仕草をてんこ盛りにしてうごごしていた。しふおんも溶けそうな顔で仔猫を撫でている。ふと見ると段ボールには『ひろってください』と歪な字が書いてあった。多分子供がお母さんにダメって言われて捨てたんだろうな…。

「職員玄関前に捨ててあつて事務員に泣き付かれたんだよ。ウチは侑俐が犬飼ってるから無理だし、お前等飼えるか宛て無いか?」

「あーウチはお母さんが猫ダメです…。」

「私の家もアレルギーで…。」

手にちよいちよいとじゃれ付く仔猫を見て切なくなつた。小学校の頃動物飼いたいつて言つたらあつさり却下されちゃつたんだよ。あの時は悔しかつたなあ…。

「だよなあ…まあ、何人か当たつてみるか。悪かつたな、わざわざ呼び出して。」

「いえ、猫可愛かつたですし、それじゃあ、失礼しますね。」

「あ、ちよつと、倉式だけ追加で話が。」

仔猫を抱っこしたまま笑顔で言つたので、私は特に考えも無く残つて、しふおんは医務室を後にした。と、急に先生から笑顔が消えた。少し不安に襲われていると、先生が携帯を弄つて私に見せた。

「俺宛にこんなメールが来たんだけど、どう言う事だ?」

添付されていた写真を見て凍り付いた。温室に居た私と真壁さんが写っていたから。

携帯を見詰めたまま私は言葉を失っていた。と言うか自分のキスシーン写真見せられるとか軽い拷問。冷ややかな汗と倍位の速さで耳の奥にドクンドクンと鼓動が響いて煩かった。それを打ち破ったのは先生の方だった。

「俺の与り知らぬ所で何勝手に面白そうな事になってんだよ?!」

「はい?」

「はい?じゃねえよ!ああ?説明しろド阿呆が!侑侑や旋堂さんならまだしも何で真壁?人工呼吸とか抜かしたら脱がすぞ!吐け!このデカ乳!」

「乳関係無いですよね?」

「まあ、座れ。あ、珈琲で良いよな?」

先生が普段口悪いのは知ってるけど、職場である学校でこの口調はどうなんだろう?社会人として。こんな人が有能なカウンセラーとかわわれてるんだもん納得行かない世の中だよね。まあ、重々しい雰囲気で切々と説教されるより全然良いかも知れないけど。

「怒らないんですか?」

「俺が?何で?ああ、授業サボんなよって事?そこは確かに感心しないな。」

珈琲の香りがふわりと部屋に漂う。ホツとした空気の中、足元にさつきの仔猫達がすり寄って来ていた。抱き上げると私の膝の上でころころ遊び始めた。真っ白でふわふわで本当に可愛い仕草に思わず顔が緩む。お母さんがアレルギーじゃなかったらなあ…いつか1人暮らししたら絶対ペット飼いたい。

「お前本当に隙が多いな。」
「きやつ?!」

ごく近い声と、顔の近さに驚いた。先生は笑いながらテーブルに珈琲を1つ置いて向かいに座った。顔見知りじゃなきゃセクハラで訴えられるレベルじゃないだろうか？今更だけどこの先生をあんなテストに参加させて良いのだろうか？女の子といちゃ付いてお金貰えるならOKとか前も言ってたし、むしろ一番危ないんじゃない？あ、でもそれ言い始めたら男は皆獣とか極論になっちゃうし。あ、極論と言えば日向先輩って何であんなに男を目の敵にしてるんだろ？もしかしてツンデレ？

「で、優等生ちゃんが授業サボって温室で真壁とチューかます事になった経緯を話して貰おうか？」

「プライベートなんで。」

「話さないと今直ぐこのメールを侑俐に転送する。」

最低だ。

「…私もよく解らないんです、いきなりだったし…水飲むとか言ってましたけど。」

「水？真壁が？」

私の言葉に先生は少し眉を寄せて何かを考え始めた。そもそも真壁さんとは知り合いなのかな？最初に会った時も医務室で寝てたし、何か持病でもあるとか？それで医務室の常連だったのかな？それにしても仔猫可愛い。考え込む先生に飽きてソファの上の仔猫を弄っている、トントンと肩を叩かれた。

「取り敢えず真壁は止めとけ。これ以上フラグ立てると面倒そうだし。」

「何ですか、急に。」

「それとは別に本題なんだが。」

「前振り長過ぎますよ。」

何故かポケットからメジャーを出して真顔で言った。

「ジャケット脱いで。」

「大声出して良いですか？」

「その大声より先に俺はさっきのメールを侑俐に…。」

日本は終わりがも知れない。

39・乱入

諦めの溜息を吐きつつジャケットのボタンに手を掛けた。クスクス笑いながら先生は片手で窓のカーテンを閉めた。

「また衣装作るんですか？」

「ん、そうそう。イベントはテスト明けの土日。」

うきうきしながら話している。と言うのも先生はかなりのコスプレ好きだからだ。見るより作って着せるのが萌えるらしい…正直よく解らないけど。でもこの外見でミシン使ってるとかギャップがあり過ぎる。

「…自分で測りますからメジャー貸して下さい。」

「駄目、ずれる、じっとして。」

「手！手がエロイです！」

手をわきわきさせて近寄るもんだから思わず後ずさる。採寸だと解つても触られたくない！むしろ体重測られる方がマシ！絶対先生余計な所触るし！と、急に足を取られ視界が回転した。

「痛っ?!」

ゴーンと言う音と共に後頭部に衝撃が走った。後ずさる内にゴミ箱に躓き転んだらしい。しかも運悪くベッドの手摺りに頭をぶつけた。

「何か凄い音したけど大丈夫か？」

「痛たたたた…。」

受身も取れずに打ったもんだからかなり痛い、うう、涙出て来た。ぶつめた所を手で押さえてると先生の手がそつと触れた。私の手を退かして反対の手で頭を診ている。

「あーあー、たんこぶ出来てるぞ、何やってんだ。」

「誰のせいだと…。」

「はいはい、俺のせい俺のせい。痛いの痛いの飛んで行けー。」

笑いながら頭を撫でているとパタパタと走る音と共に医務室のドアが勢い良く開けられた。

「仔猫が居ると聞いて　っ！！」

私も先生もドアを開けた浅木先輩も数秒間固まっていた。

「そう言う事は鍵閉めてやりなさいよ！」

「ちっ！違います！誤解です！」

「そうだぞ、普段はちゃんと鍵閉めてる。」

「ややこしくしないで下さい！」

数分の漫才に似た話し合いの後、浅木先輩は出されたホットチョコを飲んで落ち着いていた。浅木先輩曰く、帰ろうとしている所でしふおんに会って仔猫の話聞き、飛んで来たらしい。

「うちの猫メスだから同じメス猫居たら引き取るうと思って。」

「確かこいつメス、飼えるんなら頼む。」

「やーん！可愛いー！良いよ、飼う飼う。」

仔猫を満面の笑みで抱っこしてる浅木先輩を見て和んでいると、思い出した様に私に向き直って言った。

「で？さっきは何処までイベント進行してたの？チュー未遂？」
「してないですから！」

そう言う一方で私の頭の中には温室での事がぐるぐる回り続けていた。

40・月光ならぬ蛍光灯

平日だからか今日はお客さんが少なかった。と言ってもフロアが散らかるのは毎度の事なんだけど。

「カシスー、俺ちょっと本屋寄るから先帰る。」

「うん、分かった。」

フロアの掃除を終えてロッカールームに行くと、置いてあった携帯に幾つかのメールが来ていた。友達から、お母さんから、ダイレクタメールは消去して…あれ？董さんからだ。

「『例のサイト一体どうやって情報仕入れているんだろう？』…ん？」

今一要領が掴めずURLからサイトにアクセスしてみる。相変わらずのカブのオバケは健在みたい。更新履歴を見ると、イベントの所に『NEW』と言うアイコンが出ていた。嫌な予感はしたけど私は特に何も無いのよね。やれやれ、と言う気持ちでクリックして仰天した。

『初デート&指越しのキスにキyun』

『赤ずきんに告白?!』

『うさぎさん王子様になれるかな?』

何時の間にこんな楽しそうな事に…じゃなかった、何これ?!イラスト付きでゲームっぽくはしてあるけど本人を知ってる私にとっては思いつ切り生々しい。

「うわあ…指越して…殆どキスじゃない…。」

廊下を歩きながらニヤ付きそうになるのを必死に堪えてサイトを见ていると、前方にある裏口のドアがキィと音を立てて開いた。カオスかな?と思ったけど、ドアから入って来た黒くて大きな人影に直ぐ違う人だと判った。

「やっべ…!」

「ひっ…?!」

声が出なかった。喉から変な音が出ただけだった。大きな影は私を見付けると焦った様に声を上げ私の肩を乱暴に壁に押し付けた。背中を打って息が止まり何度か咳き込むと、手袋をしたままの手が私の口を覆った。

「…んでまだ人が居るんだよ…。」

苛立たしげに言った。何この人…まさか強盗?!体温が一気に下降して恐怖がドツと押し寄せた。どうしよう、どうしよう、どうしよう…!怖い…怖いよ!カオス助けて!

「ぐえっ…!」

カエルみたいな声と同時にいきなり身体が自由になった。スローモーションで大きな人影が無重力体験みたいに変な角度で変なポーズしてるのが見えた。と、次の瞬間には床に転がったその人の頭を靴で踏み付ける脚が見えた。

「ベタ過ぎたる、強盗とか…ねえ?」

「は…はひ…。」

返事も満足に出来ずへなへなとその場に座り込んだ。全身に汗が噴出して震えが止まらなかった。

「本屋で弟さんに会って、念の為迎えに来て良かったよ。立てる？」
差し伸べられた手を辿る様に顔を上げた。薄暗い廊下の蛍光灯が真っ赤な髪を照らしていた。

「一之瀬さん…！」

ホツとして、堰を切った様に涙が溢れた。警察が来るまでの間私はずっと泣き続けていた。彼の腕の中で。

41. どつきり？

悪い事をした訳じゃないけど警察署って緊張する。時々聞こえる荒い声や足音に怯えていると少し前を歩いていた一之瀬さんが無言で私に手を差し出した。さっきの事を思い出して少し躊躇っている、少し間を置いてから手を引っ込めて、また歩き出した。忙しい部屋を過ぎて、殺風景な部屋に通される。私はつい思ったままを口にした。

「ここ取調室かしら？」

「容疑者じゃないんだから、ただのミーティングルームだよ、ほら。」

そう言って指差した先には確かに『ミーティングルーム』と書かれたプレートが付いていた。まあ、そうか、私達犯人じゃないしカツ井とか電気スタンド顔に当てられたりとか無いのよね。ちよっと楽しみにしてたけどそんな経験無い方が良いか。

「あー、君達？例の強盗の通報者って。」

「え…あ、あの…。」

「調書取るからさ、ちやつちやつと質問答えて貰える？」

何？このオジサン、感じ悪い！こっち被害者なのに！ニヤ付いた中年刑事を一瞬で嫌いになってしまった。一之瀬さんは淡々と事務的に質問に答えている。これが世に言う大人な対応なのかしら？

「えーっと、そっちのお姉ちゃんがバイト帰りで？君は心配で迎えに行ったら、容疑者が居たんで投げ飛ばした、と言うんだね？」

「ええ、そうです。」

「ふうん…まあお姉ちゃんもね、そんなピラピラ短いスカートなんか履いてるから、犯人刺激

しちゃうんだよ。電車の中でもそんな格好して痴漢に遭ったとか騒ぐ女の子多いんだけどねえ…。」

「はあ…?」

何か置いてあるコーヒーぶちまけてやりたい。何でそんな事言わないといけない訳?!どんな服来てようが私の自由じゃない!大体あの強盗が悪いのにこれじゃ私が誘ったとでも言わんばかりじゃない?!コーヒーカップを持って立ち上がるうとした時、壁をコツコツと叩く音がした。

「調書の論点がずれてますよ、吉永巡査部長。それとお忘れですか?女性に調書を取る時は女性警官を同室させる事。先月も注意した筈ですが?」

「わ、判りました…。」

私の座っている角度から声の主は見えなかったけど、口振りからして上司っぽい。

「此処は私が預かります。容疑者の聴取お願いします。」

「…ふん…所詮色仕掛けの若造が…!」

うつわあ、あからさまな負け惜しみ!みっともない!吹き出しそうになるのを堪えている所にドアが開いて声の主が入って来た。

「よお、災難だったな2人共。」

「響さん?!」

私は素っ頓狂な声を上げていた。だって目の前に居たのが響さんだ

ったから。と言っても今はこの前みたいに派手なホスト風味の格好じゃなくて普通の白シャツとスーツなんだけど。

「…え？どつきり？」

「生活安全課特務部ストーカー対策班、班長の響侑俐と申します。改めまして宜しく。」

重厚感のある警察手帳と響さんを交互に見遣る。

「えーつと…どつきり？」

「君が俺をどう言う目で見てるか大体解った。」

このチャライ外見で警察官とか有り得ない。と言うか、無しで宜しく。

42・色仕掛け

響さんのお陰で事情聴取は直ぐに終わった。私も幾つか質問されたけど形式的な事だけだった。連絡を受けて警察に駆け付けた店長は一之瀬さんにお礼を言っていた。私の事も随分と心配してくれていた。手続きが終わって警察署のロビーに降りた時、着信やメールが一杯になつてるのに気付いた。カオスからの物が殆どと、友達やテストの皆からの物もあった。連絡するのを忘れていた事を思い出して急いで電話を掛けると、カオスの怒鳴り声が耳に刺さった。怒つてて、それから凄く心配してくれたみたい。事情を話した後電話を切つてロビーのソファに座り込むと、響さんがやって来た。

「お疲れ様。一之瀬君ももう直ぐ来るから。」

「…まさか響さんが警察官だなんて思いませんでした。」

「ははは、まあ、あんな格好だしね。あ、こんな時間だけど帰り大丈夫？送ろうか？」

「いえ、弟が迎えに来てくれるので。」

「なら良かった。」

私に缶珈琲を渡すと、少し間を空けて隣に座った。私は珈琲を啜りながらふとさっきの中年刑事が言っていた言葉を思い出した。

「そう言えば色仕掛けってどう言う事ですか？」

「んぶつ?!」

私の言葉に珈琲を吹いた響さんはゲホゲホと涙目でむせていた。直球過ぎたかしら？でも『色仕掛け』なんて聞いたら気になるし、もしかしてこの外見でお偉いさんとかを…あ、でもそれだと響きさん男女OKな物凄い節操無しになっちゃう。

「…すみません、変な事聞いちゃって…。」

「いや、事実だから。」

「えっ?!」

驚いて響さんを見ると、何やら含みのある笑顔で言葉を続けた。

「『本部長の御令嬢をたらしこんで異例待遇で出世した生意気な若造』って事になってるから。」

「それって結構酷いんじゃない?」

「そうだね。」

何か凄過ぎて冗談っぽい、むしろ冗談でからかわれてるんじゃないかしら? 気まずい沈黙の中一之瀬さんがロビーに降りて来た。こちらに来るのに気付いたのか、響さんが立ち上がる。

「お疲れ、一之瀬君。」

「いえ、こちらこそ助かりました。」

「じゃ、まだ仕事なんで失礼。」

響さんは空になったららしい缶を捨てると、軽く手を振ってエレベーターに乗って行ってしまった。何だかスッキリしない。さっきのはどう言う意味ですか? なんて聞くのもどうかと思うし、あ、一之瀬さん何か知ってるのかも、警察官だって事は知ってたみたいだし。

「ねえ、響さんって何者なの?」

「何者って…俺もよく知らないけど、何? 響さんに興味あるの?」

「え? うーん…あるって言うか、謎過ぎてモヤモヤって言う感じ?」

ホストかと思っただけなら警察官だし色仕掛けとか言ってたし、それに…。

「

あ、あれ？何か機嫌悪そう？私一之瀬さんに変な事言っちゃった？
な、何か話題逸らした方が良いかも知れないわね。でも何言おう？
響さんもそうだけど一之瀬さんも良く知らないし、何話せば良いの
か解らないし、ああ〜ん！もうっ！どうしたら良いのよ〜？！

「…ねえ。」

「はい？」

「俺等もデートしない？」

「はい?!」

残っていた珈琲を落として床にぶちまけたのはその2秒後の事だっ
た。

43・交換

その日私は図書館に居た。この前授業をサボってしまったペナルティとして課題を出されていたのだ。課題と言ってもテストに近いから殆ど復習になっていて却って有難い。と、奥から話し声が聞こえて来た。

「だから、その文法だと過去形になるから…。」

「うう〜…、もおヤダ、頭にキノコが生えるう〜…。」

「生きている人間の頭部にキノコが生えたと言う症例は無い。アレルギー性気管支肺炎アスペルギルス症と診断された患者からスエヒロタケやヒトヨタケの菌糸が発見された例はあるが、そもそも…。」

「うるさい！うるさあ〜い！」

いや、貴女の方が煩いですよ、日向先輩。あれじゃあ司書さんに注意され…ああ、言わんこつちゃ無い。席を立とうとした時には2人を司書さんが叱っていた。何だかんだ言っただけの2人は仲良しに見える。私のパートナーは輝詞さんだけど忙しいのかずっと顔を合わせていない。まあ、サイトみたいなイベントが起こっても少々困るから良いけど。息を吐いて埋めた課題のプリントをまとめた時だった。

「緋織ちゃん。」

「蔭澤先輩、こんにちは。」

「こんにちは、あの…今ちよつとだけ良いかしら？」

「あ、はい？」

先輩は少し顔が強張っている気がした。怒っていると言うより、疑念を持った顔。少し人通りが少ない渡り廊下まで来ると、先輩は足

を止めて、こちらへ向き直った。

「私とパートナー交換しない？」

「へっ?!」

予想だになかった質問に私は変な所から声が出ていた。交換つて、侑俐さんと輝詞さんをつて事？飛び上がって万歳三唱したい所だけど、でも何でだろう？侑俐さんが嫌なのかな？あ、それとも輝詞さんが気になるとか？

「えっと…この前ね、ちよっとだけ緋織ちゃんの事とか、響さんの仕事の事とか聞いたの。その…日高さんつて人が出所した事も。」

「あ…はい…。」

「それでね、響さん、緋織ちゃんの事守りたいから私を最優先に出来ないつて、私に頭下げて謝つて来て…。」

「えっ…?」

心臓が大きく跳ねて、思わず俯いた。私は何て勝手なんだろう、こんな状況で嬉しいなんて。蔭澤先輩の気持ちも考えないで二つ返事で了解したかった。でも同時に頭の半分は罪悪感で満ちた。侑俐さんは2年前の事で未だに責任を感じてる。私を襲った犯人が出所したと聞けば否が応にも私を守ろうとするだろう。侑俐さんはそういう人だから。

「緋織ちゃん？あの…どうかな？」

何て言えば良いのか解らなかった。私は余りにも侑俐さんを縛り付けてる。私のワガママで侑俐さんを追い詰めてたら駄目…言わなきゃ…先輩にも、侑俐さんにも、私はもう大丈夫だって言つて、自由にしてあげなきゃ…!

「面白そうなお話ね。」

「…っ?!…彩矢さん…?」

「私も皆さんに相談があるの、先輩と同じ内容で。」

そう言って、彩矢さんは私に携帯を差し出した。温室での私達の画像を表示させて。

44・小さい宇宙人

全身から血の気が引いて震えが止まらなかつた。何か言わなきゃ、何か言わなきゃ、と思う度に涙が零れそうになって耳鳴りがした。頭の中に嫌な思い出が次から次へと流れ込んで来て不安で一杯になった。

「緋織ちゃん。私怒ってるんじゃないんだけど。」

「…え…？」

「私別に真壁さんに興味無いし、両思いさんなら交換した方が良かなーって思ってる。」

力が抜けてその場にへたり込んだ。先輩2人が驚いて心配そうに私を見る。と、目の前に影が落ちた。

「あ、ネギさん。」

「ネギって…あの、輝詞でも飛猿でも良いのでネギはちょっと…。」
「解ってるわよ、飛猿君。」

見上げると銀緑の髪が日に透けてキラキラしていた。余程酷い顔をしていたんだろう、輝詞さんも心配そうな顔をしてる。そうだ、私この人にも謝らなきゃ…。

「ごめんなさい…。」

「えーっと？話がちょっと見えないけど…取り敢えず立てるか？」

私は頷いてゆっくり立ち上がった。それを見届けて彩矢さんがにっこり笑って言った。

「緋織ちゃん、さっきの話だけど、私は全然構わないから考えて置いて、それじゃあね。」

「私も同意見、メールや電話で相談してくれて良いからね。」

2人が手を振ってその場を後にした直後、いきなり輝詞さんがしゃがみ込んだ。えっ?!何?!もしかして持病があつてその発作とか?!少しびくびくする思いで顔を覗き込むと茹蛸みたいに真っ赤になつた顔があつた。

「…あのー…?」

「死ぬかと思つた…。」

「はい?」

「やばかつたー…。」

真っ赤になつた顔を手で覆い隠して溜息を吐いた。私は少し考えてから聞いてみた。

「彩矢さんが好きなんですか?」

「んなっ…?!」

金魚の様に口をぱくぱくさせていた。2択正解。賞品、面白い顔の輝詞さん、受け取りは辞退しよう。と言うか彩矢さんが好きなんだつたら交換した方が良いんだろっか?でも真壁さんとは顔合わせ辛いし、かと言って侑俐さんとも…。取り敢えず相談した方が良いよね?

「あの、輝詞さん、実は…。」

「まーまー。」

「へっ?!」

振り返ると3歳位の子供が立っていた。無邪気な笑顔で後ろから髪をツンツンと引っ張ってる。

「何その小さい生き物、隠し子？」

「ちっ！違いますよ！と言うか何処の子ですか？！迷子ですよ！えーと、ボク、お名前は？」

「あんね、ゆっちゃんね、たーみときたの！いまね！おさばなの！」

何この小さい宇宙人！誰か助けて！

45・翻訳機下さい

私と輝詞さんは小さな宇宙人…じゃなかった、小さな子を連れて取り敢えず保護者を探す事にした。しかし、この子何処の誰なんだろう？聞いてみても如何せん宇宙語にしか聞こえないし…。

「たーみは？ねえ、たーみはあ？」

「なあ、さつきから言ってる『たーみ』って何なんだ？キャラか何かなのか？」

「私に聞かれても…。」

「たーみ…たーみ…うええ…うええ…ん！」

小さな子はとうとう泣き出してしまった。何とかあやそうとしてはみたものの、益々泣き止まなかった。泣き声を聞き付けて何人かの生徒が通ったけど保護者やそれらしい人も居ない。

「よしよし、泣かないで…。」

「まあー！まーまー！たーみー！」

「何やってんの？二人共…あらあら、坊やどうしたのかな？」

「浅木女史…子供得意？」

「保育科なめちゃいけないぜい？」

何だか浅木先輩がとても頼もしく見える。先輩は顔を真っ赤にして泣いている子供にしゃがみ込んで近付くと、手品の様にちっちゃなぬいぐるみを出した。

「あ！うさたん！」

「どうしたの？ママとはぐれちゃったの？」

「ちあうの！ゆっちゃ、たーみときたの！」

2人はぬいぐるみを通して会話してるらしい。うう、相変わらず何言ってるか解んない…。チラリと横を見ると輝詞さんが何とも珍しい物を見る目で2人を見ていた。こう言っちゃなんだけど『未知との遭遇』レベルだね。感心しつつ見ていると先輩がくるりと私達を振り返った。

「ねえ、旋堂さんに電話して貰える？私番号解らないのよ。」
「は？」

「何で鷹臣さん…ま、まさかこの子鷹臣さんの…?!」
「詳しい事は知らないわよ、でもこの子の言ってる『たーみ』って『鷹臣』でしょう？それに 緋織ちゃんをお母さんと間違えたんなら金髪に馴染みがある証拠。」

成る程、と納得した様子で輝詞さんが電話を掛けようとした時、睦希先輩に連れられた鷹臣さんがこちらに走って来るのが見えた。

「たーみ！」

「あ、鷹臣さん。」

「幸臣！」

子供はまっしぐらに鷹臣さんに飛び付いた。さっきまでは気付かなかったが2人の顔はよく似てる。もしかして本当に隠し子とか？

「良かったねー幸臣君、伯父ちゃん見付かって。」

「あ、甥っ子さんだったの？私隠し子か何かだと思ったのに。」

「幸臣は弟の子。忙しいからって幼稚舎の編入手続き頼まれたんだよ。」

鷹臣さんに肩車された幸臣君はキヤッキヤとはしゃいでいた。さっ

きまであんなに泣いてたのに凄く変わり様。そして何だかとても疲れた。と、幸臣君が私を見て笑顔で言った。

「てちよ！」

「え？て、てちよ…？」

「たーみ、てちよ！たかーもの！」

「幸臣っ！」

「へえ〜そうなんだあ。」

混乱している私を余所に何となく浅木先輩がニヤニヤしていた。翻
訳機が欲しいなあ。

46・世界がプリン

チャイムと同時に教室中から声が上がった。長かったテスト週間も今日で終わり、明日からテスト休みも入れての4連休に私はホツとしていた。と、教室にヨレヨレになったしふおんが入って来た。

「しふおん?! どうしたの?!」

「…幕末爆発幕末爆発…うううううう…。」

ああ、最後歴史のテストだったっけ。項垂れるしふおんの頭を撫でていると、気のせいか周りの子がソワソワと落ち着かない。視線を辿ると廊下に七海さんの姿があった。チラチラと見られているのが気になるのか、かなり不機嫌そうだ。

「ねえ、しふおん、七海さんいつもあんな感じ?」

「ん〜? 拓十君最近モテ期みたいですよニヤ〜この前もC組の子を…」

あいたつ?!」

「余計な事喋るな。」

あ、コツンってした、しふおんにコツンってしたよ! この人! いつの間にか呼び方『拓十君』になってるし! 何と無くだけど七海さんは最近変わった様な気がする。この前のサイトに上がってたハグとか、何気に肉食系になってる。でもしふおんは嬉しそうだし、七海さんも満更でも無さそうだし、これはこれで良いのかも? それに引き換え、私は冴えないなあ。交換しようかって話もなあなあにしてしまってるし、輝詞さんは愚か、しふおん以外の参加者ともろくに話をしていない。こんなんじゃないやダメなのは解ってるんだけど、どうしても踏み込めないで居た。

「…ってば…ねえ、聞いてる？ひお。」

「えっ？！あ…ごめん、ちょっとボーツとしてて…。」

「顔色悪いよ？寝不足？勉強で徹夜とかしたんじゃない？」

「そんなのしてないってば。」

心配するしふおんを適当に笑って誤魔化していた。本当はあまり眠れてない。テスト勉強してたのもあるけど、ベッドに入っても色々な事を考えちゃって眠くならなかった。だけど、どうしたら眠れるのかも解らなくて、明るくなるまでひたすら勉強しては気絶する様に眠っていた。

「佐藤さんからのメール見た？」

「あー…何か『浴衣イベント』とか書いてあつてよく読んでないけど。」

「ちゃんと読もうよお！温泉だよ？！温泉！リニューアルオープンですっごく綺麗になった旅館！」

「え…?!」

私は目を丸くした。口も開いてたかも知れない。その位驚いていた。慌てて佐藤さんからのメールを開いてみると、其処には確かに『テストプレイ参加者を温泉旅行へ御招待！』と書かれている。文面から察するにゲームのプロジェクトチームの慰安旅行を兼ねているみたいだ。

「明後日から2泊だし、この後暇なら買い物に行こうかと思って。」

「え？しふおん、行くの？」

「ひお行かないの？タダだよ？」

ケロツとした顔で話すしふおんの両肩を掴んで言った。

「ダメだよ！危ないよ！」

「あうあうあう世界がプリンでございます…。平気だよお、拓十君も行くし。」

「余計危ないじゃない！七海さんなんてきつと浴衣姿のしふおんに理性を失って獣の如くガルルツと牙を剥くんだから！」

「おい、具体的に罵るな。」

ダメだわ、しふおんは私が守らないと！

「しふおん、護身グッズ買いに行こう。催涙スプレーとか弱流スタンガンとかブザーとか良い店あるから！」

「わーい、温泉だあー。」

その後私達は七海さんと3人で買い物に出たのだった。

47・待ち合わせ場所

温泉旅行出発の朝、緊張していたせいか予定の時間より1時間も早く着いてしまった。流石にまだ誰も来ていない。近くにあったベンチに座り、荷物の中からポケットレシピを取り出した。旅館って結構面白い創作料理とか郷土料理があるから勉強にもなるんだよね…。

「今の時期なら栗御飯と南瓜だな。」

「ひゃあっ?!…真壁さん…脅かさないで下さいよ。」

「直ぐ其処のコンビニで時間潰してたら丁度のこのこ来たからさ。」

「のこのこって…。」

笑いながら真壁さんは私の隣に座った。実はあれから顔合わせ辛くて、真壁さんのバイト先でもあるお菓子屋さんには行ってなかった。チヨコはすっごくすっごく食べたかったんだけど背に腹は変えられない。何気なく隣を見るとバチツと目が合った。思わず顔ごと目を逸らしてレシピに目を落とす。

「どんだけ警戒してんの?」

「そ、そんな事は…。」

あります。物凄く警戒してます。日向先輩じゃないけど男は狼ですよ。ね。なんて考えていると、真壁さんは視線を落としてポツリと言った。

「何か喉渴いた。」

「えっ…?」

一瞬固まった。日常会話と言われればそれまでなんだけど、残念な

がら私にはそう取れなかったから。そして真壁さんもやっぱりそう言う意味で言っただけだった事は直ぐに解った。頬に置かれた両手で

「ふざけないで下さい。」

「喉渴いたのは本当だけど？」

「それでも…やっぱりああ言う事は…。」

ごによごによと口籠った私を見て浅く笑うと、その両手はあっさり私を解放した。コンビニの袋からペットボトルを出してごくごく飲んでいる。

「何で、その…えーっと…。」

「何でキスしたかって事？」

直球な返事にぐつと言葉を詰まらせた。また思い出して顔がカアッと熱くなるのが解った。

「したかったから。」

「んなつ?!」

一瞬引つ叩いてやろうかと思った。ふざけんなんて思った。だってファーストキスだったから。でも振り上げた手は頬に触れるより先に掴まれていた。細身な外見とは裏腹に強い力で手首を握られて振り解けない。

「…やめっ…!」

指先に熱を感じた。微かな息と、唇の感触が指先から全身に走った。早鐘を打つ心臓が耳障りで悔しかった。

「光栄だね。」

「な、何がですか？」

「俺の事も考えてくれてるから。」

キラメルみたいな瞳が目の前にあった。また逃げられなかった。強く引き寄せる手とその唇から。

48・動悸と同期

集合場所に着いた時、時間はかなりギリギリだった。もうバスが来ていて荷物を積み込んでいるのが見えた。

「響さん、遅刻寸前ですよ？」

「済まない、急だったんで有休取るのも大変だね。」

荷物を渡して辺りを見回す、会社の人間も半分位混じっている。先にバスに乗り込んだ社員と思われる何人かがソワソワと落ち着かない、ふと見ると視線の先にはデータテストの参加者が居た。成程、確かにあの子達が集まると華やかだ。

「はいはい、皆さん乗った乗ったー。自由席なんで適当に座っちゃって。」

役員腕章を付けた男が仕切っている。見た所俺と同じ位だろうか？年も背も。と言うかあのカフェオレみたいな薄茶頭、派手目な服、思いつ切り何処かで見た様な気がする。

「やっぽーい、久し振りー侑俐ちゃん。」

眉間に皺が寄ったまま言葉を発する事すら面倒になった。何が悲しくて大学の同期にこんな形で再会しなければならないのか、しかも俺はこのふざけた男、幸水絵真とはあまり仲良くなかった訳で。

「乗らないならこの子食べちゃっつよ？」

「びゃあ?!」

幸水は近くに居た緋織を脇に抱える形でひょいと持ち上げると、ジタバタする緋織を抱えたままバスに乗り込んでしまった。舌打ちをしつつ後を追うと数名が乗り込んだ後バスのドアが閉まった。

「何でお前がここに居る？」

「んー？だつて俺の企画したゲームだし？」

げんなりして溜息が出た。昔から下らない悪戯に全力を注ぐ奴だった、なのに成績は常にトップ、飲み会に行けば殆ど奴のペースに巻き込まれ、うっかり呑み過ぎて酔い潰れてフルメイクされた事もあったな、それから…。

「おい、通路で立ち止まるなー。」

「ん？ああ、悪…いつ?!」

空いていた席に座ると荷物のように緋織が此方に放られた。咄嗟に受け止めたつもりだったが右手が中々に弾力のある柔らかい部位を掴んでいた。…これ、手動かしたら泣くかな？

「セクハラ！」

後ろの座席から日向若葉の鉄拳が後頭部に飛んで来た。まだ手動かしてないだろ！…じゃない、これは不可抗力だろ！相変わらず口も手も出る子だな。

「どうだった？」

「真顔で聞かないで下さい。」

「ひおー、元気出して、キャラメルあげるから。」

いきなり何だろう？この仕打ちは…いつそ揉んどけば良かった…いや、

それもダメか、人として。

49・最上級の感謝

疲れていたのかバスが出発して20分程で侑俐さんは寢息を立てていた。何か、可愛い。何となく寒そうに見えたのでかける物を探している、館林先生がジャケットを羽織らせた。

「疲れてるみたいですね。」

「ん〜この馬鹿ここんとこ仕事詰めてたからな。」

と、後ろからシャッター音と共にカメラを持った睦希先輩が顔を出した。実に良い笑顔、後でその写真下さい。

「仲良しですよ〜先生と響さん！」

「ん〜、まあ。けど、お前が期待してる『仲良し』とは別だぞ？」

「えー？それはそれで美味しいんですけど。」

「睦希先輩…。」

「俺がここに居るのも侑俐のお陰だから。」

そう言うと先生は服の袖を捲くつた。大きな傷痕にやっぱり目が行ってしまふ。詳しく聞いた事は無いけど昔の事故の痕らしい。

「高3の時事故だね。手足やられてインターハイどころか日常生活も難しくなるかもって言われた。」

「えっ…?!そ、それって、結構…かなり重傷じゃ…?」

「普通に飛び降りて死のうとしたからな。」

けらけらと笑いながら言ってるけど私も先輩も、そしていつの間にか聞いてたらしい皆も絶句していた。空気に耐えられなくなったらしい睦希先輩が明るい声で言った。

「あ、それで響さんが励ました訳ですね?!」

「いや、コイツ開口一番罵倒したから。」

何で重傷の人にそんな事を、侑俐さん酷い。でも、ただ酷いだけだったら先生はこんなに信用してないよね？話を最後まで聞いた方が良いかも。

「『そんなミジメな姿で満足ですか？』だの『無様過ぎて引く』だのと散々言っ来てなー、もう打っ殺してやるうかと思っただよ。」

「そ、それは、まあ、でも…確かに。」

「それで死ぬ気でリハビリして大分動ける様になって、ムカツクから侑俐探したら病院の図書ルームで寝ててな。殴り飛ばそうと思っつて傍行ったら、本持ってたんだよ。」

「エロ本？」

「日向先輩まで…。」

日向先輩の言葉に吹き出しながら、先生は携帯に一冊の本を表示させた。タイトルからはよく解らないけど、リハビリと言う単語が見えた。

「紙がボロボロになるまでリハビリや症例回復の本読み漁ってやがった。」

「へえ…。」

「今考えてみたら大変だったと思うけどな。言葉を選ぶ侑俐が俺怒らせる為に必死で嫌な事一杯言っつて、俺にわざと恨まれて…。だから感謝してる、最上級にね。」

眠ってる侑俐さんを見る先生の目はとても優しくかった。顔が火照っ

て心臓がトクトクと高鳴った。

「素敵…それHPに更新しましょう！健気な友情！ポイント高いわ
」

「ふうん…そうなんだあ…へえ…。」

「友情萌えキャラ…いや、でも2人のラブも中々…。」

…のは私だけじゃなかったみたい。先生、なんて事を！

50・星舞祭り

バスに揺られる事数時間、旅館に着いた時はすっかりお昼になって居た。玄関は私達の他にも結構お客さんが居て受付付近がざわついている。荷物を運ぼうとした時私のお腹が盛大に鳴った。隣に居た拓十君に聞こえたらしく吹き出しそうになるのを堪えている。

「笑い過ぎっ！」

「良いんじゃない？健康で。」

拓十君はそう言ってひょいっと私の手から荷物を取り上げた。さり気なくこう言う事するとか、何か最近頼もしさがぐんぐん上がってる気がする。と、掲示板に貼ってある『星舞祭り』と書かれたポスターが目に入った。

「佐藤さん、これってお祭りですか？」

「そうよ、ちゃんとそのお祭りに合わせるの大変だったんだから。」

「星って事は夜なんですか？」

「ええ。3日間入れ替わり立ち代りで奉納舞が続けられるお祭りですね、到る所に星のランプが掛かってて綺麗なのよ。」

星のランプなんて童話みたい、ちょっと見てみたいかも。あ、でも夜なんて私とひおだけだとダメって言われちゃうよね？酔っ払いとかに絡まれたらひおにだって迷惑掛けちゃうし。

「しふおん、荷物置いたら昼飯だつてさ。」

「あ、うん。」

呼ばれる声に我に振り返り慌てて小走りに着いて行く。部屋割り表を見ながら皆でエレベーターに乗り込んだ。階は皆同じで人数は結構バラバラ、私はひおとの2人部屋だった。ドアを開けると真新しい綺麗な部屋と窓の向こうに海が広がっていた

「わあ！海！ねえねえ、ひお！凄いよ〜！」

「本当だ〜！」

2人ではしゃいでいると、私の荷物を持ったままの拓十君が零す様に言った。

「昼飯。」

「う〜、拓十君ロマンが無い〜。」

「盛大に腹鳴ってた奴に言われたくない。」

もう、デリカシー無いなあ…折角こんな綺麗な景色なのに。ちょっとふくれっ面になりつつ小さいバッグだけを持って入口に戻った。と、目の前にトン、と視界を遮る腕が置かれた。

「祭り行きたいの？」

「えっ…？」

多分ひおに聞こえないだろう、密やかな声だった。驚いて顔を見ると拓十君は悪戯っぽく笑ってて、思わず顔が熱くなった。

「行きたいの？」

「う…い、行きたい…かも…。」

何となく悔しくて俯きがちにボソボソ答えると、拓十君は耳に息が掛かる位近くで囁いた。

「じゃあ今夜ね。」

「ふえっ!?!」

「顔、赤過ぎ。」

耳を押さえたまま何も言葉が出なくなつた。免疫無いです15歳、桜華しふおんは茹ってます…。

51・ストロベリー

中々に美味しいお昼御飯の後、私達は部屋に戻って来た。3人部屋でメンバーは私、萌香さん、董さん。同じ大学生でまとめた結果らしい。荷物をそれぞれ整理して置いてあったパンフレットなんかを眺めていると、チャイムが鳴った。

「はい？」

「あ、あの…倉式です。ちょっと、相談したい事が…。」

意外な名前に私達はキョトンと顔を見合わせて、それから扉を開けた。するとそこには困った様子の緋織ちゃんと真つ赤な顔のしふおんちゃんが居た。あまりに赤いので驚いて額に手を当てる。

「どうしたの?! 熱あるんじゃないの?! 大丈夫?!」

「カシスさ…あの…あの…。」

真つ赤な顔で今にも泣き出しそうなしふおんちゃんにうるたえつつ、2人を部屋に通した。ソファに座って備え付けのお茶を出す。皆で心配そうにしふおんちゃんを見ていると、緋織ちゃんが何とも微妙な表情をしている。そう言えば相談があるって言ってたけど、もしかして急病とか？

「ねえ、体調悪いんだったら館林先生に言ってみる? お薬とか持ってるかも知れないし。」

「あのっ…! 違うんです! 病気とかじゃなくて! その…。」

しふおんちゃんが発した大きな声に皆が固まった。一斉に向けられた視線に真下を向く位俯いて、今度は蚊の鳴く様な声で言った。

「…メイク教えて下さい…。」
「はい？」

それから私達は真つ赤なしふおんちゃんを何とか問い詰め、緋織ちゃんの力も借りて情報を把握した。

「つまり、七海君とお祭りに行くのにメイクを教えて欲しい、と？
しふおんちゃんは真つ赤な顔をこくこくと上下に振った。と、萌香さんと董さんが目を輝かせた。

「可愛いっ…！何この可愛い生き物！や〜ん！甘酸っぱい〜！」
「七海君も中々積極的ね！よし、お姉さんに任せなさい！バツチり可愛くしてあげるから！」

それから私達は色々と打ち合わせをした。先ず夕食が終わるまでは普通に過ごし、その後で私の部屋で飾り付けよう、と言う話になった。あまり広めない様には思ったけど、つついメンバーには話してしまって、夕食が終わった後の私達の部屋には女の子勢揃いとなった。

「何でこんなに…。」
「あははは…ごめん、つい日向ちゃんにバレちゃって…。」

少しおめかしなしふおんちゃんにメイクして行く。と言っても殆ど淡いピンク中心のナチュラルメイク、下手にゴテゴテ塗るよりその方が引き立つだろうと言う結論に到ったのだ。メイクをしながらふと思った事を聞いてみた。

「ねえ、しふおんちゃん。」

「はい？」

「七海君の事好きなの？」

「…っ！」

真っ赤になって口をパクパクさせて、本当に金魚みたいになってから、ポソリと言った。

「わ、解んないです…でも…。」

「でも？」

「一緒に居ると、何か、この辺がギュウッてなります…。」

そう言っつて両手を胸の前に合わせたしふおんちゃんに、何だか私は赤くなつてしまった。私だけじゃなくて皆も。理由は多分、羨ましかったから。

しふおんを送った後、皆もそれぞれ自分のパートナーを呼んで星舞祭りに行くこう、と言う流れになった。だけど、私は何となく行く気になれなかった。しふおんが七海さんと楽しそうに居るのを見たら凄く羨ましくなるのが、蔭澤先輩が侑俐さんと居るのを見たら嫉妬してしまうのが堪らなく嫌だったから。部屋に戻ってからふとテーブルの上の案内状を見ると、大浴場は24時間開いているとあった。

「折角だしね…。」

着替えと浴衣を持って大浴場に向かった。外はすっかり暗くなって、ポツリポツリと灯る明かりが蛭みたいに綺麗だった。広々とした浴場には殆ど人が居なくて、何種類かのお風呂をはしごしていた。そして数十分後、ソファに座ったまま熱くて頭がぼんやりとしていた。私一体何やってるんだろ？何でもっと皆と打ち解けられないんだろ？七海さんの事を話していたしふおんは本当に可愛かった。真っ赤になって、ドキドキしてるのが解って、女の私から見ても可愛いなら、きつと男の人から見たらもっとずっと可愛いんだろ？七海さんだけじゃなくて、侑俐さんだってしふおんみたいに素直で可愛い子を好きになる。

「帰ろう…。」

色々考えてたら頭の中が嫌な事で一杯になりそうだった。折角の旅行なのに、もつと楽しまないと。そう思っ立ち上がった瞬間、目の前が飴細工みたいにグニヤリと歪んだ。あれ？何これ？目が回って…。

「緋織?!」

真つ暗になる直前、声が聞こえた。居る筈の無い…。だけど私が一番聞きたい声だった。それからどの位経ったんだろう? 目を開けた時私は部屋の中に居た。天井が見えたと思うとそつと額に手が触れた。大きくて、優しい手。

「誰…?」

何も返つて来ない。侑俐さんの筈が無い。ならこれは夢? 私の願望? 私一体どれだけ会いたいの?

「侑俐さん…。」

貴方が好き…初めて会った時からずっと…。だけど好きになっちゃいけないって言われた。解ってる…この想いは捨てなきゃならない、侑俐さんが私の傍に居るのは私がお父さんの娘だから、仕事だから、命令だから、侑俐さんの意思じゃない、解ってる、解ってるの! 頭では解ってるの!

「…好き…。」

夢の中だけで良いから言っってしまったかった。

「侑俐さんが好きなの…。」

でないと止められなくて、押さえられなくて、苦しくて、苦しくて張り裂けそうで、涙を堪えるのに精一杯だった。その時まで。

「え…?」

突然視界に影が差し、強い力が顔を隠していた私の両手を強引に押さえ込んだ。起き上がるうとする私に覆い被さると、噛み付く様なキスが唇を塞いだ。手を振り解こうとしても指先しか動かなくて、足は膝すら曲げられなくて、悲鳴すらその唇に飲み込まれた。手が胸元から肩に滑り込んで、露になった首筋に熱が走った時、不意に携帯の音が部屋に響いた。

「　　っ!？」

その音にビクッと手が止まった。目の前の影はその体で制したままの私を一瞬見下ろして、それから弾かれる様にその身を離れた。動揺が空気を伝う。

「ごめん…俺…。」

肌蹴た襟元を直しながらゆっくり身を起こして、私はその名前を呼んだ。

「どっしてここに居るんですか…？真壁さん。」

53 ジレンマ

言葉も無いまま真壁さんをじつと見詰めていた。暫く視線を泳がせていたが、観念したのか少し距離を取ってベッドに座った。

「その、さっきは本当に悪かった…。」

「教えてくれませんか？」

「え？」

最初は込み入った事情とか、それこそ身の上話なんて聞くつもりは無かった。気まぐれか遊びだと思ってたから。だけど私の好奇心はそれを許さなかった。

「どうしてキスしたんですか？それも、その…何度も…。」

言いながら顔がカアツと熱くなった。だってやっぱりこんな慣れてないし、恋愛経験だって無い。なのに殆ど会う度にキスを奪われて、気にするなって言う方が無理。

「…味覚が鋭過ぎるらしい。」

「味覚って、味の味覚ですか？」

「ん、そう。ちよつとの味で使ってる材料から状態から、果ては体調や感情まで解る。」

「あ、この前『見えた』って言ったのは…。」

真壁さんは目を伏せてコクリと頷いた。何と無くバラバラだったピースがはまって行く。味で感情が解るなら、侑俐さんの事も、それから自分を化け物って言った事も納得が行った。勿論それは本当の事を言っている前提での話だけ。

「何で私なんですか？」

「それは…その…。」

真壁さんが言い淀んでいると、パチンと音がして室内の照明が灯った。

「そいつの話を書く必要は無い。」

「侑俐さん…！」

私の声に侑俐さんはこっちを鋭い目で見遣った。背筋につうつと汗が降りる。と、侑俐さんが私の手を掴んでグイと引っ張った。よろめきながら立ち上がると、そのまま私の手を引いて部屋を出て行ってしまった。足が纏れて転びそうになりながら歩いていると自分の部屋らしいドアの前で立ち止まり、鍵を開けた。

「中入って。」

「え？でも…。」

「入れよ。」

冷たい口調に体が萎縮する。侑俐さん、怒ってるよね…私がまた勝手な事して倒れたりしたから、それとも呆れてるのかな？どうしよう？怖くて侑俐さんの顔が見れない、きつと凄く怒ってる、軽蔑してる、絶対嫌われる！ぎゅっと目を瞑って俯いていると、手が近付いてくる気配がした。殴られる…！

「何された？」

「……え？」

「真壁お前に何をした？！何処に触れた？！何を言われた？！」

侑俐さんは凄く怒った顔だった。だけど何処かいつもと違う、初めて見る顔をしていた。呆けて居ると侑俐さんは私の首筋をなぞった。さつき口付けられた場所？もしかして、痕が残ってるの？やだ…見ないで！

「ふざけんなよあの野郎…！」

「侑俐さつ？！ちょ、ちよつと！侑俐さん？！何…痛つ？！やつ…痛い！」

頭を乱暴に抱かれて、首筋を吸血鬼みたいに噛み付かれた。吃驚したのと痛みで涙が滲んだ。震える肩を今度はそつと抱き寄せられる。

「痛い？」

「はい…。」

「怖かった？」

「はい…。」

「なあ、俺の事好き？」

「はい…。」

「駄目だつて解つてても、緋織は俺の事好き？」

「はい…。」

侑俐さんにしがみ付いた。色んな感情がぐちゃぐちゃに混ざつてどろろとして泣いてるのかも解らなかつた。私の体をもう一度強く抱き締めて、侑俐さんはその手を解いた。今にも泣き出しそうな顔で。

54・条件

侑俐が祭りに来ない、と言う話を聞いて何と無く嫌な予感がしていた。正確にはまずい事になっていそうな予感だ。流石に夜通し祭りに居る訳にも行かなかったので日が変わる前には旅館に戻って来たのだが…。

「なあ、浅木、お前はどう思う？」

「緋織ちゃんがベッドで熟睡してますね。」

「で、侑俐はソファで寝てる…。」

判断に困ったので手っ取り早く2人を起こす事にした。浴衣のままの緋織が目を擦りながら体を起こした。寝ぼけているのか俺達を見て首を傾げて、それからハッと我に返った。

「…はっ！えっ?!あ、あれ?!わ、私…あ、あれ?!」

「で、これは事前?事後?」

俺の言葉に緋織は顔を耳まで真っ赤にした。と、踏んでいた足の下から声がした。

「未遂。」

深く且つ長い溜息が出た。安心なのか呆れなのか自分でも正直解らない。何気なく緋織を見直してその首筋に目が行きギョツとした。この格好で2人つきりで居てよく未遂で済んだ物だ。首をコキコキと回して侑俐が立ち上がると、気付いたのか緋織に自分のジャケツトを羽織らせた。

「はあ…何やってんだ、この据え膳娘が。」

「据え…！ち、違います！」

「緋織ちゃん、流石に私も其処はツツコみ入れるわよ。侑俐さんだつて男なんだしそんなおつきな胸で浴衣肌蹴てたらそれこそ飢えた狼の前に丸々太った子羊がこのこ出て行く様な物だから。」

やけに具体的なツツコミが少々気になったが、侑俐がソファで寝ていた辺り未遂と言うのは多分本当だろうしかしこの歯型は流石に目立つ、と言うかやけにいかがわしい。絆創膏でも厳しいし、メイクで隠すにも難しそうだ。痕は考えて付けてなんぼだろう。と言うか俺なら見える場所に痕は付けない。少し考えて荷物の中から持って来た衣装を漁った。

「取り敢えず目立つから、これ着ろ。」

「あの、コスプレ衣装持つて来たんですか？」

「イベント行けなかったから…いや、それより早く首隠せ。」

「へえ、コスプレって意外と普通なのね。」

「全部着なければインナーは普通の服と変わらないから…って、おい、衣装漁るな。」

浅木は目を輝かせて衣装を漁っていた。多分今は何を行っても聞かえないだろう。と、服を着た緋織が心配そうな顔で俺の袖を引っ張った。

「先生…。」

「そんな顔しなくても大丈夫だ、バラさないから。けど…事情知ってるんだつたらあんまりこう言う事してやるな、野郎に取っっちゃ拷問だからな。」

そう言うと緋織は叱られた子犬の様にしょんぼりとした。と、荷物

を漁っていたらしい浅木が何着かの衣装を手に言った。

「ねえ、結局どう言う関係なの？」

「侑俐の上司が緋織の父親なんだよ。」

「えっ?!何そのベタなドラマみたいな設定は！」

全くその通りだと思う。俺が2年前断って侑俐に回された条件。

「18歳になるまで手を出さずに緋織を守る事。それが倉式本部長が侑俐に出した条件。」

「拷問ね。」

「全くだ。」

55・何気にチェック

響さんは緋織ちゃんと2人で話がしたいと言ったので、私と館林先生は少しの間時間を潰す事にした。と言っても今更外出する訳には行かないし、かと言ってあまり2人をそのままにして置いても良くないので温泉へ入って来よう、となったのだ。

「ぶはー！やっぱイチゴ牛乳だよね！」

「甘そうだな。」

「えー？美味しいよお？ほらほら。」

「解った、解つ…ん？」

先生は何かに気付いた様にテラスを見た。外が見えるソファの1つに誰かが座っているのが見えた。

「董？」

「え？あ、こんばんは。」

「董ちゃんもお風呂入りに？」

「いえ、少し眠れなくて、散歩です。」

私はさっきの星舞祭りを思い出した。董ちゃんのパートナーは響さんだけど、あの人は緋織ちゃんを優先してお祭りには来なかった。代わりに幸水さんって人が来ていたけど、人懐っこくない董ちゃんが楽しめたとは正直思わない。そう考えると無神経な響さんに沸々と怒りが湧いて来た。

「ねえ、董ちゃん、響さんに文句言った方が良いんじゃない？だって勝手過ぎるわよ、放ったらかして緋織ちゃんばかり構って、董ちゃんに何かあったらどうするの？」

「良いんです、別に。響さんは緋織ちゃんの事守りたいって私に言
ってましたし、私なんか一緒に居たってつまらないですから…。」
董ちゃんは笑いながら今にも泣きそうだった。苛々が頂点に達して
部屋に向かおうとした私の顔に水平チョップが飛んで来た。

「いったあい?!」

「お前はもう少し考えて動け!今文句言ったら2人には逃げ場すら
無くなるんだぞ?追い詰めるな!」

「だけど…!」

私達を見て董ちゃんは訳も解らずおろおろしていた。そりゃあいき
なり喧嘩したら吃驚するよね、それに館林先生の言う事も尤もだ。
今響さんと緋織ちゃんを責めたら確かに八方塞がりになっちゃう。
私が落ち着いたのを見計らって館林先生は大きく溜息を吐いた。董
ちゃんを見ながら何やら考えているみたい。と言うか上から下まで
舐める様に見ていたので思わず眉間に皺が寄った時だった。

「エメラルダ…。」

「はい?」

「大丈夫、見た所84・55・88って所だろ、入る入る。じゃあ
行こうか。エメラルダなら別室に預けてる。」

「えっ?えっ?あの…ちよつと?!」

何やら訳の解らない単語を並べると董ちゃんの手を掴んでスタスタ
と歩き出してしまった。慌てて後を追い駆けながら話す。

「何処行くの?ねえ。」

「こつ言つ時はパーッと衣装でも着て気晴らしに限る。」

「い、衣装?!」

「それ単なる趣味じゃ…？」
「無論だ。」

呆れ半分に私は館林さんについて行った。多分元気付けようとはしてるんだろっけどね…。

56・戦利品

窓から差した朝日が眩しくて目が覚めた。まだブーツとしてる頭で起き上がった時、手にサラサラした物が触れた。何これ？取り敢えずなでなでなで…と。

「んー…？もう朝…？」

サラサラした物はだるそうな声と共にむくりと体を起こした。色素の薄い髪が日に透けてキラキラしてる。そこで初めて私の思考は戻った。

「お早う、睦希ちゃん。」

「にゃあああつ？！何故寝起きに雉鳴さん？！これは何事？！若さゆえの過ち？！」

「服着てるでしょ、それにこの状況で手出せたら勇者だから。」

言われて辺りを見回すと、衣装やジュース缶でとっ散らかった大部屋が見えた。他のメンバーも座布団迄使った雑魚寝状態。確かにこの状態では手出すのは至難の技。

「あ、そっか、昨日何故かコスプレ宴会になっただんだけ。」

お祭りから帰って部屋で寝る仕度をしていた時、内線で呼び出されて宴会に使うこの大部屋に来た。衣装の出所はイベントがフィになった館林先生だったみたいだけど、テンション上がってたせいかファッションショーから宴会になっただよね。

「うー…頭痛エ…。」

「お早う、鷹臣さん。」

「わお、新撰組。」

頭を押さえながら旋堂さんが起き上がった。少し崩れた黒髪のウィッグ、寝ぼけてるのか無防備な顔、回してる首より肌蹴た着物から覗く鎖骨と胸元、浅葱色の羽織がこれまた良い具合にずれてる。ほぼ条件反射で高速モード16枚連写のシャッターを切ると、雉鳴さんにカメラを取り上げられた。

「あああああ！私の戦利品！返して！返して！」

「俺に無断で鷹臣さん撮らない。」

「焼き増しするから！」

「それは当然。」

「お前等…そう言う問題じゃないから。」

何とかカメラ没収もデータ消去も免れてホクホクな私に旋堂さんがポツリと言った。

「本当に好きだな、そう言うの。隠したりしないの？」

「開き直ったもん勝ち。それに、隠してて見られたりして、からかわれるのとか、もう嫌だから。」

そう、私は何も隠さないって決めた。勉強だって苦にならない、対人関係だって手の上で転がせば良い、裏切られたり、白い目で見られたり、ヒソヒソ陰口叩かれる位なら痛い子やってた方が全然楽しいもの。

「睦希。」

名前を呼ばれて振り向くより先に目の前に浅葱色が広がった。力強

い、だけど意外な程優しい腕が私を抱き締めていた。

「えっと…日向ちゃん風に言つと…セクハラ？」

「そうだね。」

「旋堂さんのロリコーンとか言われちゃうよ？」

「名前で呼んでって言ったでしょ。」

少し拗ねた言い方に思わず笑ってしまった。でもその腕が優しく、背中越しの鼓動が心地良くて、肩に凭れた頭を撫でられているのがこそばゆくて、そっと目を閉じてそのまま体を預けた。

「鷹臣さんのエッチ…。」

微かに笑いながら、鷹臣さんは少しだけその腕に力を込めた。

57・動けない

何だか色々あった温泉旅行も最終日、正直ちよつと回りがイチャイチャしてて鬱陶しかった。

「若葉、若葉、この近くに隠れ家的和風カフェあるんだって！」

「行かない。」

「えっ…そおなの…？あ、じゃあこっちの和菓子の…。」

「行かないって言ってるでしょ！」

自分の声にハツと我に返った。彩花が呆然とした顔で私を見てる。何やってるの、私、これじゃ完全に八つ当たりじゃない。彩花だって、皆だって楽しんでるのに、水差してどうするのよ。

「カフェなんか言ったら真ん丸になっちゃうもん。」

「え？」

「だから！食べ過ぎて太っちゃうって言ってるの！」

ポカンとしていた彩花が吹き出して笑いむせていた。一頻り笑った後目を擦りながら彩花は言った。

「もー、若葉つてば気にし過ぎだよ、全然太ってないのに。」

「彩花は細いから言えるんだよ、旅館の料理だけでも私体重計に乗るのが怖いのに。」

「あははは、じゃあ雑貨屋通りとかは？ほら、若葉ストラップ切れちゃったって言ってたし。」

「ん、そっちなら行ってやらなくもない。」

嬉しそうに笑いながら彩花がじゃれ付いて来た。ふと横顔を見遣る

と羨ましい位キラキラして見えた。私は気に入らないけど彩花は雉鳴さんと一緒に居る様になってから毎日楽しく楽しそうで、会えない日は不安げに私に電話して来たり、感情が目一杯表に出てる気がする。彩花だけじゃなくて、しふおんちゃんや、他のメンバーにしたってそうだ。皆少しづつ仲良くなってる、いつの間にかペアの人と良い感じになってて、それが何か置いてかれたみたいで寂しかった。

「じゃあ私バッグ持って来るね、それから…。」

「彩花ちゃん。」

「あ、き…雉鳴さん…。」

「そんなにウキウキで何処行くの？若葉ちゃんとデート？」

「は、はい…あの…雑貨通り行こうかな…って…その…。」

もじもじと赤い顔で話す彩花に何だか居たたまれなくなってる、私はこっそりとその場を離れた。あんな顔の彩花見ると、私より雉鳴さんと一緒に居る方が楽しいのようになって思ってしまう。そしてそんな事を考える自分が凄く人間ちっちゃい気がして益々嫌になった。トボトボと自分の部屋に向かっていると、何処からか話し声が聞こえた。辺りを探すと非常階段の方にチラリと影が見えた。緋織ちゃん…真壁さん？

「…だから…もう呼び出したりしないで下さい！」

「じゃあ何で来るの？嫌ならすっぱかせば良いでしょ？違う？」

吐き捨てる様に言うと真壁さんは緋織ちゃんを壁に押し付けた。2人の近さに思わず声を上げそうになって慌てて両手で自分の口を覆った。

「あんな言い方卑怯です！来なきゃ侑俐さんにバラすとか殆ど脅迫じゃないですか！」

「その首、ム力つくんだよね、あの人手出さないとか紳士的な事言っとしてこんな痕付けちゃってさ、マーキングかったの、行動矛盾過ぎ。」

「放して下さい！もう止め…っ！…んっ…！」

体が動かなかった。口を覆ったままの両手が微かに震えていた。何これ…一体どう言う事なの？頭の中で情報が整理出来なくて、真壁さんに何度もキスされる緋織ちゃんを助けもしないで立ち尽くしていた。

58・才能の無駄遣い

最終日なのに私は殆ど上の空だった。テレビや映画みたいな場面を目の当たりにして動揺していたのと、悩むのも性に合わなくて緋織ちゃんに聞こうと思ったんだけど中々チャンスが無かった。なので…。

「何で緋織ちゃんにキスしたの？」

「いや、直球過ぎるでしょ、君。」

暇そうにしていた真壁さんを捕まえて聞いてみる事にした。

「だって昼ドラマみたいだし、もし本当に無理矢理だったらセクハラで訴えた方が良くないじゃない。」

「此処で肯定したら捕まるよね？それ。」

「ごちゃごちゃ言ってるじゃないで！一体どう言ってるつもり？！脅迫してキスとか有り得ないでしょ？！」

真壁さんは眉間に皺を寄せて凄く面倒臭そうに頭をポリポリ掻きながら言った。

「ん〜正直外見は好みなんだけど、何か引つ掛かるんだよね。」

「さっぱり解んない。何か超能力みたいのがあるって聞いたけど、それと関係が？」

「超能力ねえ…ま、似た様なもんだよ。ちょっと気になる画が見えたって言うか…一部がスツパリと抜けてる感じなんだよね。」

「確かに天然ちゃんね。」

「そう言う意味じゃない…。」

どうも食い違ってる様な会話が続く事数十分、大体を纏めてみた。

「つまり緋織ちゃんを彼女にしたいのね？」

「オイ、俺の貴重な時間返してくれ。」

「だってえ、体質的な相性がどうか、記憶がどうかと言われるも私には解らないもん。結論的に言っちゃえば緋織ちゃんが好きなんでしょ？違うの？」

何だか益々考え込んでしまった。小難しく考え過ぎじゃないのかしら？そもそも私だったら嫌いな人や無関心な人にちよっかい出したリキスしたりしないし、やろうとも思わない。と、背後からダークネスな気配と声がした。

「萌えイベント臭〜〜〜！」

「ギャ　　ッ！！妖怪！！！」

「あいたっ！」

吃驚して思わず裏拳を入れたら顔を押さえて蹲る佐藤さんが居た。普通に出て来れば良いのに。傍迷惑な人だなあ。めげない様子の佐藤さんはメモとペンを用意し私達にずっと迫って来た。

「ちよつと、ちよつと、真壁さん、どう言う事です〜？お姉さんに言ってみようか、ホラホラア。」

「近所のオバちゃんじゃないんですから…別に話す事ありませんよ。」

「パートナー交換イベントはちらほら意見も来てるんですよ〜修羅場見たい人も多いしで。」

佐藤さんは恐ろしい速さでペンを走らせている。この人って才能の無駄遣いの典型よね、他にこの能力を生かせば良いのに。心底残念

な物を見る目で佐藤さんを眺めていると、ふとペンを止めて明後日の方向にキラキラ輝く目で私達の手を取るときっぱり言っただけだ。

「ここはやっぱり修羅場っちゃいますよー！」

「え？」

「はい？」

「名付けて横取りイベント！早速リーダーに相談して来ますねー！
！！！」

ドuplicator効果付きで走り去る佐藤さんを見送っていると真壁さんがポツリと呟いた。

「謝れ。」

「うん、ごめんなさい…。」

絶対変な事やる気だ…佐藤さん。

59・ヘタレ一刀両断

意気込んだ佐藤女史が突然に提案した企画のお陰で、最終日と言うのに俺を含めたチームの皆は仕事に追われる羽目になった。確かにここの所目立った動きも無いし何か挟めないかと言う意見は出ていたのだが…。

「ラフ稿上げました、チェックお願いします。」

「お疲れー、暫く掛かるから輝詞君も休憩して来て良いよ。」

「じゃ、お先に。」

痛む肩と腕を押さえつつ自分の部屋へ向かうと、扉の前に倉式の姿があった。声を掛けようとした矢先、顔ギリギリの所に風を切ってトンファーが突き立てられた。

「ちょっと聞きたい事があるんですけど。」

「そこは普通に話せよ！殺す気か?!」

「イラッとしたので…。」

だからってトンファーを突き立てる奴も無いだろうに、凶暴な女だ…。若干間合いを取りつつ冷静を装って話を戻した。

「それで？聞きたい事って？」

「日向先輩が『浮気セクハラ満載の修羅場イベントやるかも』って言うって本当なら責任者ごと沈めようかと思って…。」

女子高生の口から『沈める』と言う単語が出る日常って何なんだ？メンバー選考の時からかなり疑問だったがこんなキャラの濃い子を選んで良かったのか？確かに可愛いしスタイルも良いし、聞いた話

では成績も運動もそこそこ、加えて育ちも悪くない。モテる要素は揃ってるが本人も含め取り巻く環境がヘビーと言っか、此処まで来ると胡散臭いレベルと言っか。

「公式ゲームにそんなイベント盛り込める訳無いだろ、日向は飛躍し過ぎだ。」

そう言えば佐藤女史の報告にも真壁さんと響さんが彼女を取り合ってるとか書いてあったな、まだ16歳なのに未恐ろしい話だ。

「私はどうでも良いけど、しふおんや皆が傷付くのは絶対嫌だったから…でも違うんなら良いです、失礼します。」

ぺこりと頭を下げた立ち去ろうとした倉式の腕を掴んだ。一瞬で体がビクンと強張るのが判った。何も知らないなら過剰とも取れる反応だけど、ずっと怯え続けてる事位は聞いていたから落ち着くまで少し待っていた。

「何ですか？」

「祭り行こうか？星舞祭り。」

「私とですか？彩矢さんじゃなくて？」

「いや、まあ、誘えたら誘ってるけど…。」

「見た目に反してヘタレなんですね。」

ぶん殴りてえ。ああ、ヘタレですよ、緊張して話せませんよ、世の中の男が皆ガツガツ肉食系だと思っなよ？この乳娘…。

「単に気晴らし。で？行くの？行かないの？」

少し考えてから倉式は言った。

「じゃあ行きます、折角のお祭りですから。」

日が落ちて辺りが暗くなり始める頃、私達は人ごみの中を歩いていった。星舞祭りの名前通り、あちこちに星型のランプが灯っていて綺麗だった。と、前から急に人の波が押し寄せて来た。

「わっ?!ちよっ...?!すみません、通して...!」

声も空しく私は輝詞さんとあっさりはぐれてしまった。何とか人ごみを抜け出したけど、何処だかよく解らない場所に出てしまった。多分そんな遠くには行ってないと思うし、メールして待っていた方が良いよね。

「緋織ちゃん?」

「え?あ、彩矢さん。良かったあ、ついさっき輝詞さんとはぐれちゃって、今メールした所で...」

「実は私もはぐれちゃったのよ、人に押されちゃって。」

一瞬ギクツとした。彩矢さんが来てるって事は、ペアである真壁さんも此処に来るのかな?やだな...今真壁さんとはあんまり顔合わせたくないかも...でも彩矢さん1人でこんな場所に放って置けない。お祭りのせいやお酒入ってる人も居るし、絶対危ない。

「あの...?」

「はっ、はい?!」

「もしかして『』のテストプレイヤーの人ですか?ほら、グレーテルちゃん。」

「えっ...?」

私と同じか少し上位の女の人に聞かれた。あのサイトって結構有名なのかな？近所だけかと思ってたのに。

「凄い！本物可愛いー！顔ちっちゃーい！あの、写真撮っても良いですか？」

返事をするより先に携帯のシャッター音が聞こえた。1回だけじゃなくて何度も、あちこちから。

『…めて…！お願い止めてよ！』

『ほらほら、記念撮影だつてば。』

『どうせ良い子ぶって媚びてんだから喜ばせてあげなつて。』

途端に猛烈な吐き気と頭痛が起きた。立っていられず口を押さえたまま壁際にしゃがみ込んだ。

「緋織ちゃん？！どうしたの具合悪いの？！」

背中をさする感触と、心配そうな彩矢さんの声が聞こえたけど、話そうとすると喉に重い物が引っ掛かった様な吐き気が襲う。

『この服どうするー？捨てちゃおうか？』

『雑巾なんだからトイレでしょ？』

『ちよつとお！コイツ吐いたんだけどー？！最悪！マジ死んで！』

助けて…誰か助けて…！怖い…怖いよ！

「えー？何？病人？」

「2人共可愛いね、具合悪いなら車出すよ？俺飲んでっけど？あははははは！」

「ごめんなさい通して下さい！この子本当に具合悪いみたいで…！」

あの…誰か救急車を…！」

「居た！…おい！大丈夫か？！」

「かが…！」

「シツ！名前出すな！向こうに救護テントがあるから連れて行く！」

「は、はい！」

鉛の様に重くなった体が宙に浮いた所で目の前が真っ暗になった。

61・複数の光源氏

救護テントに付いたのは連絡を受けてから15分程経った頃だった。ベッドの上で座っている緋織とその脇に瀬乃原彩矢の姿が見える。こちらの姿を認めて輝詞が口を開いた。

「館林さん、早かったですね。」

「緋織の様子は？」

「貧血みたいです、今は落ち着いていますが彩…瀬乃原さんの話だと急に具合が悪くなつたみたいです。」

緋織を見遣ると、キョトンとした表情でこっちを見て、それから輝詞と瀬乃原をキョロキョロと見た。

「緋織ちゃん、大丈夫？」

「えっと…私、先生に送って貰いますから、お2人共お祭り行つて来て下さい。心配掛けてごめんなさい。」

「えっ？でも…。」

「お願い出来ますか？先生。」

緋織はそう言つて笑顔を見せた。顔色がまだ少し悪いが意識もはっきりしている様だし、この子なりに気を利かせようとしてるらしい。それに乗る形で2人を救護テントから追い出した。

「はい、行つた行つた。」

「わわっ?!」

「ひ、緋織ちゃん、本当大丈夫？」

「ちゃんと送つてくから、心配後無用。」

少々混乱していたが、やがて2人は祭りの人ごみに消えて行った。と、不意に首筋に手が置かれた。驚いて振り返ると、少し緊張した面持ちの緋織が立っていた。

「あの…幸水さん、ですよね？プロジェクトリーダーの。」

「え？何言つて…頭でも打った？」

「傷の位置が違います、それに先生は私が何処に触れても驚いたりしません。貴方は変装が得意だと聞いてますけど所詮10分程度では限界があります。」

16歳とは思えない程強い瞳だった。確信と同時に強い信頼が見える。しかし甘楽先輩も一体どう言う育て方してるんだ？何処に触れてもって、何処まで触らせたんだあの人は…。まあ、そんな事は良いか。

「驚いたね、今まで本人と動物以外で見破った奴居なかったんだけど。それで？何で判つててあんな事言ったの？」

そう言うと少し俯いて迷いながら言った。

「私のせいで2人に迷惑掛けたのは事実ですし、輝詞さんの為に来たのかと思つて。」

「氣い利かせたんだ？」

何故か少し顔を赤く染めてこくこくと頷いた。こんな事で赤くなるのか、さっきまでの大人びた態度とはまるで別人の様に子供丸出しで、年相応に見えた。一体どう育てればこんな娘になるんだろうか、成程確かに興味深い。

「まるで若紫だな。尤も光源氏が多いみたいだけ。」

「え？」

「旋堂さんに、甘楽先輩、それに侑俐…ああ、真壁君もかな？随分豪勢な事で。」

カッと赤くなって振り上げた手を捕まえると自然に笑いがこみ上げた。

「いやゝ実に良いゲームになりそうだ。ごぶっ?!」

取り敢えず躊躇無く股間を蹴るお姫様ってどうなんだろう…と、蹲りながら思った。

62・最弱ナイトの選択

明日の朝には出発と言う事でお土産を含めた荷物をまとめていると、ひおが戻って来た。

「お帰り、大丈夫？ひお。」

「うん、寝不足が原因だったみたい。」

ひおは笑っていたけど、やっぱりちよつと元気無さそうだった。心配になってぎゅーっとひおを抱っこしてみる。

「頼りないかも知れないけど、出来る事あったらちゃんと行ってね？ひお。」

「しふおん…。」

「ひおが私の事ツマンナイ子だって思っても、私はひおの友達だからね？」

ひおは暫く黙っていたけど、堪え切れなくなつたみたいにポロポロ涙を零した。真っ赤になつた顔を何度も擦ってるひおに慌てて近くにあったバスタオルを渡した。オイオイと泣いてるひおの頭を撫でていると、しゃくり上げながらひおがポツポツと話し始めた。

「怖い…。」

「怖い？ひお、誰かに酷い事されたの？意地悪言われたの？やつつけて来るよ？」

「違う…私…1人が怖い…。」

「え？」

「だって…友達も恋人も居なかつたの…皆…私の事玩具みたいに扱って…誰も…誰も信用出来なくて…！またあんな風になつちゃうん

じゃないかって思ったら…！」

ひおは泣きながらぶるぶると震えていた。私がひおに初めて会ったのは入学式だった。綺麗な子が居るってクラスの子が騒いでて、面白そうだから一緒に見に行った。そしたら廊下でガラの悪い先輩に絡まれた私を王子様みたいに颯爽と現れたひおが助けてくれたんだっけ。今にして思えば、ひおが武道強いのも、怖いからなのかも？

「大丈夫、ひお、大丈夫だよ。皆ひおの事苛めたりしないから、私が絶対そんな事させないからね？」

「しふおん…。」

一頻り泣いた後、ひおは床に座り込んだまま眠ってしまった。こんな所で寝たら風邪引いちゃうと思って起こしたけど、ぐったり眠ったまま起きなかった。引つ張っても動かせない。途方に暮れて居ると拓十君からメールが来た。天の助けと言わんばかりのタイミングに感謝しつつ事情を説明した。

「泣き疲れて寝るとか、幼稚園児かよ…ったく。」

「わーい、拓十君力持ち。」

呆れつつも拓十君はひおをお姫様抱っこしてベッドへ寝かせてくれた。何だかんだ言っつて男の子だなあ。最初の頃とか女の子みたいだったのに、最近はサイト見た他のクラスの子や、先輩や、他校生なんかにも声掛けられたりしてるし、お祭り行った時も綺麗なお姉さんに…。

「どうした？眉間に皺寄ってるぞ。」

「拓十君はさ、何で私をペアに選んだの？佐藤さんが言ってた、バトル最下位だったから拓十君だけは姫の選択権与えられたって。」

「あの女余計な事を…。」

「ねえ、どうして?」

「どうしてって…。」

じつと拓十君を見ると、見る見る顔が赤くなって行つた。つられて私もドキドキしてたけど、今日を逸らしたら何か負けな気がして逸らせなかった。不意に頬に手が置かれて、唇に柔らかい物が触れた。頭の中が真っ白になってパチパチ瞬きしか出来なかった。

「…自惚れとけ、馬鹿。」

「は、はい…。」

そのまま拓十君は部屋を出て行ってしまった。桜華しふおん、15歳、生まれて初めて腰が抜けました。

63・マクガフィン

旅行先から戻るバスの中、朝早かったせいかな寝息を立てている物が殆どだ。昨日ギリギリに完成させたイベントの企画をサイトに更新しようとした時だった。

「え…？」

『認証パスワードが違います』と言う赤い文字が表示された。打ち間違えた訳ではおそらく無い。しかもこんなエラーにこんな文字は入れてない。試しにもう一度打ち込むが同じだった。

「幸水さん？どうしたんですか？」

全身から血の気が引いて行く気がした。何故？一体誰が？目的なんて腐る程ある、個人情報目当ての輩からしてみれば垂涎の的になっている…。

「佐藤！輝詞！メンテ班！セキュリティ！起きろ！」

目を覚ましたのはスタッフだけでは無かったが、そんな事は構って居られなかった。声に飛び起きたスタッフが各個でPCを立ち上げてはその表情が次々と凍り付いた。頭をフル稼働させてキーを叩いた。後ろから不安そうに覗き込む気配を感じる。

「…幸水さん…。」

数十分後、悔しさと情けなさに強く拳を握り締めた。

「どうしたんですか？」

ざわつくバスの中、立ち上がった。膝を着く場所が無いのが悔しい。全員に向かって頭を下げるしか無かった。

「申し訳有りません…！」

「え？」

「ちよっと…何…？」

訳が判っていない様子の参加者の中、1人冷静な声がした。スタッフのPCを弄っていた一之瀬凰だった。

「システムとデータごっさり持ってかれてるね、セキュリティ何やってたの？サイトごとやられるなんてザルも良いとこだよ、無能。」

「はあ?!何だよそれ?!」

「データって…じゃあ個人情報とかも?!」

「何やってんだよ?!おい!!」

掴み掛かれても何も言えなかった。まるで鳶に獲物をさらわれる様に目の前で易々とこんな真似を許した自分に心底腹が立った。と、啄木鳥の様に素早くキーを叩く音が聞こえ始めた。

「一之瀬さん?何してるんです?」

「んー?追跡…随分大雑把な泥棒さんで助かるよ…っと、ビンゴ。」

「え?速い!!」

少し強くキーを叩くと、画面に1枚の絵が表示された。チェッカーボードと…チェス駒?

「ああ、解った。目当てって個人情報じゃなくて、これみたい。」

一之瀬はそう言うと首に掛けていた鍵をトントンと指し示した。最新のスistemを組み込んだ未発表技術の結晶の鍵『MacGuffin』を。

64・玉葱とトマト

バスの中で皆がそれぞれの鍵を見詰めていた。胡散臭そうな目で、或いは不思議そうな目で。

「この鍵多分GPSみたいな物が組み込まれてる、それから支給された携帯との相互認証も。」

「嘘?!そんな高度な技術で出来てんの?!」

「鍵を落としたり盗まれたりしたら大変だからね、支給された携帯と一定距離離れた場合は紛失扱いになるみたい。」

流暢に話す一之瀬さんを見てみんなが感心している中、私は必然的にある疑問が浮かんだ。

「どうしてそんな事まで解るんですか?」

「趣味でね。」

趣味で片付けられるレベルじゃないと思うんですが。

「で?解決方法は?」

「それはプロに任せたいなあ、でしょう?幸水さん。」

皆の視線が今度は一斉に幸水さんに向いた。少し驚いた様に顔を上げて、それからまた視線を画面に戻して口を開いた。

「アクセスの瞬間を解析するしか今の所方法は無い。」

「アクセスの瞬間?」

「ゲームのルールにあったでしょう?テスト内に置いて『CP』と呼ばれるポイントを設定、出題される『イベント』を成立させる

事でポイントが鍵に内部加算されるのよ。」

「へえ。」

「システムが乗っ取られた以上『CP』が加算される瞬間にしか相手の位置が補足出来ない。」

数人が眉間に皺を寄せつつ首を傾げた。ポイントが加算される鍵だから、相手を見付けるにはポイントが足される瞬間が必要で、あれ？ポイントは…。

「つまり…相手の言う事聞けって事？」

「そうなるね。」

「却下！とんでもない事言われたらどうするんだよ?!」

「やらなきゃ良いだけだ。流石に違法行為を強制して来たりはしないだろ。」

若干の喧嘩になりつつある所におずおずと蔭澤先輩が手を上げて言った。

「あのお…ゲームリタイアするって言うのは…?」

「個人情報持つて行かれたかも知れないままで?」

「ですよね…。」

「ももおお！何やってんのよ?!この玉葱とトマトのコンビはあゝ
」

日向先輩が盛大に幸水さんの首を絞めていた。玉葱とトマトのコンビって普通に美味しそうだな、なんて思ってしまった私はいよいよ疲れているのかも知れない。と、何と無く視線を感じて振り返ると真壁さんと目が合った。思わず顔ごと目を逸らすと、手に紙切れを渡され、耳元で囁く声がした。

「後で話がある。バス降りたら此処で待ってて。」
「え…?」

意外な程真剣な目に、行けないの言葉が私は言えなかった。

解散場所に着いてから、皆は複雑な表情でバスを降りた。それぞれの顔に不安や焦りが見て取れる。

「警護は警察とも連動するから、そんなに怖がらなくて良い。」

「余計物々しいです。」

忙しい雰囲気の中、真壁さんは荷物を持ち上げると、軽く皆に会釈をしてスタスタと行ってしまった。

「ひお、一応会社で説明あるみたいだけど、どうする？」

渡された紙切れをクシャリと丸めて、ポケットに詰めた。そうだよ、行かなければ良い。元々あの人とはペアでも何でもないし、会う度セクハラだし、訳解んないし。行かない方がきつと面倒な事にならない。

「私も行く。」

「ん、じゃあ一緒に行こう、ひお。」

説明会の間私は上の空だった。色んな事が一遍にあつたから考える時間も無かった。まだ薄っすらと痕の残る首筋に手を置くと、自然顔に熱が灯る。侑俐さん…一体あれはどう言う意味だったの？全く興味が無いのならどうして突き放してくれないの？苦しい…苦しんだよ…。

「ひお、ひーおー？どうしたの？ポーツとして、終わったし帰ろう。」

「

「え？う、うん！」

気が付けばすっかりお昼になっていた。説明、全然聞いてなかったな。折角参加したのにバカみたい。

「ねえ、2人共、折角だしファミレスでお昼御飯にしない？時間も丁度良いしさ。」

「あ、行きます。」

「12時半か？そうだな。」

「じゃあ男性陣のおごりって事で。」

「野郎は自腹。」

皆と一緒に行こう。そう思った時だった。誰かが私の肩をトントンと叩いた。

「来留宮先輩？」

「緋織ちゃん、私とデートしない？」

「えっ？」

私はきつと今鳩豆な顔をしていると思う。何で私？こう言う言い方は何だけどそんなに仲良しって訳でも無いよね？それとも何か話したい事があるのかな？

「あ、じゃあ…はい。」

「緋織ちゃん借りて行きますね。」

先輩は笑顔で私の手を掴むとちよつと強引に歩き出した。あれ？こちよつて、ライブハウスだよね？

「一之瀬さん、真壁さん、緋織ちゃん連れて来ましたよ。」

「えっ？えっ？何で…どうして…？」

「こうでもしないと来ないでしょ、鈴夢の事随分警戒してたみたいだし。現に君来なかったじゃない。」

鈴夢って、真壁さんの事だよ？この2人知り合いなのかな？それに来留宮先輩も何か知ってるのかな？

「面倒だから結論言っと、君の事ちょっと調べてたんだよ。君と、それから旋堂さんの事。」

穏やかで優しいそうだった一之瀬さんの瞳が、一瞬別人の様に冷たく笑って私を見た。

66・双方悪趣味

ドアが閉まる音に飛び上がりそうになった。どうして良いか解らず本能的に来留宮先輩を見遣った。

「じゃあ、私これで。」

「つれないねえ。」

「聞かせたくない話みたいですし。」

「ま、待って下さい先輩！こんな所に置いてかないで下さい！私が頭から食べられちゃったらどうするんです？！化けて出ますよ？！」

「俺は熊かよ。」

実際似た様な物だと思う。得体知れないし、頭赤いし、何か性質悪そうな気配がムンムンするし、そもそもこの人苦手、とか言ったら流石に失礼だよね…。なんて考えていたら無情にも本当に来留宮先輩は帰ってしまった。ドアの前で頂垂れていると、後ろから近付いてくる足音が聞こえた。

「取って喰わないから武器は仕舞いなさい、緋織ちゃん。」

言うが早いか出際に両手首をあつさり捕まえられた。笑ってるけど一之瀬さん凄い力…。それに隙が無い…。武道か何かやってたのかな？でなきゃかわせる筈無い。

「気の強い子は嫌いじゃないけど、高校生は圏外なんだよ…。ねっ！」

「きゃあっ?!」

手首を返されてそのまま視界がぐるんと回ってソファに投げ飛ばされた。突然で受身も取れず背中から落ちた衝撃で一瞬息が詰まる。

「けほっ…けほっけほっ！」

「大丈夫か?!」

真壁さんが庇う様に一之瀬さんとの間に入って、抱き締めるみたい
に咳き込む私の背中を撫でていた。心配そうな顔が涙で滲んでぼや
けて見える。不本意だけど吃驚したのと怖かったのとで涙が落ちた。
真壁さんは何も言わずにそのまま泣き出した私の涙を拭ってくれて
いた。

「おい、凰、手荒な真似するなら俺協力する気は一切無いけど?」

「悪い悪い、そんな怒るなって。それにいきなり武器出すそっちも
悪いでしょ。」

しれっと言うと一之瀬さんは私の前に座って言った。

「知ってるんだよ?君このままだと18歳になったら旋堂家の本家
の人に政略結婚させられちゃうんでしょ?旋堂さんはそれ止めよう
としてくれてるみたいだけ。」

「なっ…?!何でそんな事まで?!」

「旋堂の髪から調べたら一発だった。あの人色々濃かったけど…。」
「何してるんですか?!」

文句を言いつつ私の心はざわついていた。小さい頃から言っ
て聞かされてたんだから覚悟は出来てる。けどやっぱり不安で逃げ出
したい気持ちも、侑俐さんへの気持ちも消せないでいるから。

「ね、緋織ちゃん。君鈴夢の物になってみない?文字通り、身も心
も全部。」

「えっ…?」

「響さんは君の気持ちに応えられないよ、解ってるでしょ？背負う物が大き過ぎるし、何の力も持ってない、でも気持ちは揺らいでる。このままじゃ2人共がんじがらめで苦しいだけだよ？」

一之瀬さんの声が呪文みたいに頭に響いていた。確かに私は侑俐さんを苦しめてる…駄目だつて言われているのに好きになって、欲張りになるのが止められなくて、でもそれは侑俐さんを追い詰める事になって…。

「悪い様にはしないよ？楽になったら？」

「でも…私…。」

落ち着いて…流されちゃ駄目、絶対何か裏がある！でも…！でも私侑俐さんを苦しめたくない…！どうしよう？どうしたら良いの？頭が働かない…待つて惑わせないで…お願い待つて…待つて！

「悪趣味ですね、一之瀬さん。」

「おや…帰ったんじゃないかな？」

「私も悪趣味なので全部聞きました。」

「来留宮先輩…。」

67・瞳の奥で

どう言う訳か嫌な予感程よく当たる。盗み聞きは良くないけど、緋織ちゃんを誰かと2人きりにするのはどうも気が引ける。あの子は何と言うか…危なっかしい気がするのよね…。そして隠れて見ていたら案の定泣かされちゃってるし、強いんだか弱いんだか解んない子だわ。

「はあ…何してるんですか、緋織ちゃん泣いちゃってるじゃないですか。」

「…そうだね…。」
「そうだねって…ちょ、ちょっと？真壁さん？ふざけてないで緋織ちゃん放してあげて下さい。」

真壁さんが手を放すと涙目の緋織ちゃんがよろめきながら歩み寄って来た。

「女の子苛めるなんて最低。」
「苛めてないよ、むしろ助けたいと思ってるんだから。」

泣かせて置いて何言ってるんだか…でも、さっきの政略結婚がどうのって話が本当だとしたら、一体私に何ができるんだろう？せいぜい話を聞いて、何人かの友達にネタ半分に相談して、ちょっとネットでそれらしい単語検索して、それで結局何にも解決しないまま終わってそんな気がする。

「おいで、緋織ちゃん。」
「…や…行かない…嫌…！」

怯え切ってしまった緋織ちゃんは私の後ろに隠れてひたすらに首を横に振っていた。

「良いからおいで、ぶつちゃけ拒否権無いから、早く。」

「一之瀬さん！」

「じゃあ君助けられる？彼女の家や旋堂家に対抗出来る？一時的な感情でどうにかなる問題じゃないんだよ？解ってる？…って言うか、そこまでする義理無いでしょ？ほら、彼女渡して。」

寒気が走った。いつも穏やかで優しい一之瀬さんじゃない、別人みたいに冷たい瞳、冷たい口調、笑ってるのに威圧感で後ずさりしそ
うになる。怖い…一之瀬さんじゃない…！

「はあ…鈴夢。」

「…っ?! やっ…! やだ…! 放して! 降ろして!」

いきなり緋織ちゃんが肩に担ぎ上げられて驚いた。これじゃあ本当に誘拐じゃない! 助けるとか言ってるて犯罪やらかす気なの?! そんなの黙ってる訳には行かない!

「ちよつと…何処連れて行く気ですか?!」

「俺の家。何なら君も来る? カシスちゃん。」

「…はい?」

思いつ切り呆れ顔で首を傾げていた私の肩を、突然大きな手が掴んだ。驚いたのと力の強さで体が硬直した。

「疑いを晴らす為にもそのでっかい瞳で見て貰おうか、それが早そうだしね。」

「私行くななんて言ってるな…! 痛っ…?!」

肩を引き寄せられて、耳の傍で一之瀬さんの声がした。

「何で帰らなかったの…？」

「え？」

一瞬、一之瀬さんは凄く遠い目をしていた。全て諦めた様な、悲しい目を。

68・落ち着かない部屋

よく、漫画や映画なんかにあるベタなシチュエーションに、家に行ったら豪邸で門から玄関まで5分掛かります。なーんてのがあったりするけど…。

「普通！」

「何を期待した？何を？」

「豪邸とか？」

「あー、そう言うのみたいならまた今度ね…取り敢えず入っ…ああ、引くなよ？」

家に入る前に敷居の高い前振りされた。ゴミ溜めになってるとか？色んな想像をしてドキドキしながら入ったが、見た感じ普通だった。何処までも肩透かしな…。

「あーっ！！」

「わっ？！何？！」

「凄い！！プレミアアモンブランの60？うさうさ！あっ！こっちは苺ミルクプレート！ちゃんとスプーンまで揃ってる！可愛いーっ！」

緋織ちゃんは子供の様に目を輝かせながら兎のキャラクターグッズに魅入っていた。よく見ると半分ほど開いた扉の向こうにぎっしりと兎グッズが並んでいる。こ、これは確かに引くわ！

「とりゃー。」

「はっ！す、すいませ…！！…あ…ああっ！それは…！」

「七夕限定生産モデル77体の内の1体、キャラメルハニーうさう

さ77?。厳選された材料で作られたふわふわもっこもこの逸品。」「はわ…はわわわ…!」

一之瀬さんは楽しそうに77?の兔ぬいぐるみで緋織ちゃんを弄っていた。おあずけ喰らった子犬みたいになってるし。

「ほーら、ほーら欲しいか欲しいか?」

「抱っこ!抱っこだけでも!」

「2人共馬鹿な事してないで本題。」

呆れ返った真壁さんの一言に2人はハッと我に返っていた。軽く咳払いをした後一之瀬さんがリビングへ通じるらしいドアを開けて入って行った。何気なく緋織ちゃんを見ると思いつ切り兔グッズの部屋を見ていた。そんなにあの兔好きなのかしら…?

「じゃ、本題…。」

「あの、すみませんリビングに引くんですけど。」

知らない人が見たら絶対女の子の部屋じゃないかと思う位、可愛らしいグッズやぬいぐるみやらが大量にあった。緋織ちゃんはぬいぐるみが気になるのか、そわそわと落ち着かないみたいで、こう言う物とは無縁の私は別の意味で落ち着かなかった。流石にこれは居たまれないわ…。

「…すつごく誤解してるだろうけど、別に少女趣味じゃないからね?」

「周りの理解が得られないんですね…?」

「哀れむな!そうじゃなくて、これは自社製品なんだよ!ここは展示場と保管も兼ねてるだけだ!」

「…自社…?」

髪をかき上げながら一之瀬さんは名刺入れから一枚の名刺を取り出しテーブルに置いた。

「フェニックスグループ商品開発部チーフ…えっと、間鳳…。って、ええっ?!」

「現在後継者修行中の会長の息子だったりする。」

「思いつ切り名前違うじゃないですか。」

「普段は一之瀬って使ってるだけ、そっちが本名、あ、因みに読み方『はざま』ね。」

私は何とも落ち着かない部屋で3人をゆっくり見遣って、それから溜息を吐いて言った。

「有り得ないわ…。」

部屋中に綺麗に並んだぬいぐるみを見て不覚にも少し和んでしまった。ああ…限定版うさぎグッズがあんなに一杯…キャラメルハニーうさぎなんて見るのも初めて…。ふかふかそうだなあ…。私はうずうずする手を抑えつつチラリと一之瀬…じゃない、間さんを見た。来留宮先輩に事情を説明しつつ何かフォローしてるっばい？いずれにしてもこっちは見てない。

「ちょっとだけ、ちょっとだけ。」

廊下に面した扉からうさぎ達が見えた。そつと部屋に入るとずらりと並ぶうさぎグッズがあった。私にとってはちよつとした天国に見える。ドキドキしながらチェアの上に座らせてあったキャラメルハニーうさぎをそつと撫でてみる。わあ！何これ！仔猫の毛皮みたいに柔らかい！それにもこもこなのに毛玉も無くてシルクみたいにつやつやしてる！我慢出来ず両手で抱っこしてみた。

「ふつかふかだあ…ぎゅ〜すりすり〜。」

「何してんの？こんな所で。」

「ぴゃあつ？！まま、真壁さん！あのっ！…ごめんなさい！」

「別にぬいぐるみ弄った位で嵐は怒らないと思うけど。」

「でもキャラメルハニーうさぎですし…コレクターの間じゃ物凄い値が付いててですね…。」

うさぎさを元の場所に戻しぶつぶつ呟く様に言い訳していると、クスクス笑いながら不意に頬と髪を撫でられた。顔を上げるとやつぱり、と言うか案の定直ぐ近くに真壁さんの顔があった。本当にこの人は…。唇に指を当てて制しながらずつと気になってた事を口にし

た。

「もお！どうしてキスするんですか？」

「ん？」

「この前は理由聞けませんでしたから。」

否応も無しに何度も触れられたせい、私の中に真壁さんへの恐怖心は不思議と薄れていた。だけど疑念だけは拭えなくて、何処かで線引きをされてる思いは消えなかった。

「最初は凰に言われたから近付いた。あの温室での写真撮ったのもそうだ。ああやって動揺させて気持ち揺らいでる時が一番読み易いから。」

「それでメールを…。」

「指示通りターゲットに近付いて、迷わせて、情報引き出して、利用したら捨てるつもりだった。いつも通りそうやって…。」

真壁さんはそこで言葉を詰まらせた。そして、少し間を置いてから俯き気味に言った。

「だけど…。」

何かを言おうとして、だけど開いた口が言葉を発する事は無く、何度か合った目は直ぐに泳いで逸らされて、もどかしそうに首を振ると、私を抱き寄せた。驚いて身じろぎしたけど、腕に力を込められてそれすら出来なかった。

「俺は響侑俐に嫉妬した。呆れる程お前から流れて来た感情が羨ましかった。今まで誰にもそんな思いを抱かれた事なんか無かったから…ずっと嘘や拒絶でうんざりしてたから…。」

熱っぽい瞳で見詰められて、今度は私が顔を逸らせた。流されてる場合じゃなくて、理由をちゃんと聞かなきゃ…でも今のって、ある意味理由なのかな？でもそんな事聞けないし、ああ、もう！どうすれば良いの？！

「緋織。」

「は、はい?!…っ!…ん…?!ふ…あ…!」

唇を押し開けるみたいに舌が上顎をなぞって、思わず漏れる自分の声に益々顔が熱くなった。やだ…私自分のこんな声知らない…息が…身体が熱くて…。

「…あれ?お前熱無いか?結構熱いぞ?」

「ふえ?」

手を緩められると同時に、私は全身から力が抜けてかくんとその場へあたり込んだのだった。

70・公衆の面前で

俺は実に納得が行かないで居た。そもそもファミレスとは食事をする場所、即ちある程度落ち着ける場所でなければならぬ。しかし現状は何かの間違っていた。

「うっわ、何あの美形集団、撮影か何か？」

「あ、あの子知ってる！ほら、このサイトの女の子だよ、前写真ダウンロードしたもん。」

「金髪の巨乳ちゃん居なくね？後ほら何かさ…。」

何故ファミレスに来てこんなにも注目されなければならないのか、これじゃ俺達は珍獣扱いだ。芸能人でもパンダでも無いと言うのにジロジロ見られ写真を撮られては落ち着かない、いや、むしろストレスでハゲる。

「分散した方が得策ではないだろうか？」

「賛成。視線が痛過ぎる。茶飲んで即出たい。」

「俺の家近いからコンビニで買ってって食べます？」

「そうだね、じゃあ雉鳴さん家に…。」

その時ポケットで携帯が鳴った。正確には震えたのだが細かい事は気にしない。メールはクラスメイトからで、例のサイトが開けない、と言う内容だった。首を傾げつつ鶴村が小声で話し掛けて来た。

「天城会長？どうしたの？」

「なあ、鶴村、例えば今俺がお前にキスをしたらサイトに載ると思うか？」

「いきなり何を言い出すのかな？君は。」

流石に引かれた。しかし別の方向から少し意外そうな幸水さんの声がした。

「あー…その手はアリかもねえ、こっちからエサをばら撒く感じで。」

俺が気になっていたのはサイトに載るかどうかと言う事、そして載った場合写真なのか絵なのかと言う事、もし写真が目線か何かを入れた状態で載ったとしたら、少なくとも此処に居る誰かはデータを盗んだ犯人に何らかの形で繋がるのではないか、そんな所だった。

「被写体を中心に各自で後ろの客撮れば？写真の角度から撮った奴割り出せるだろ。」

「おお、坊や冴えてる。」

「で？誰が何やるの？」

全員が考え込んでしまった。インパクトのある行動と振られても俺達は芸人ではないから当然詰まる。

「くじ引きとか？」

「命懸けだな…。」

他に案も無いので、と鶴村がメモ帳にアマダを書き始めた。こんな緊迫したアマダくじ嫌だな…。と、携帯の音と共に響さんが視線を自分の手元に移した。

「おい、侑俐。」

「ちよっと待って下さい、今メールが…。」

携帯を弄る響さんを余所に隣から何やらメモが回って来た。皆はお互いの位置を確認しながらちらちらと目で会話をしていた。気のせいだろうか？雉鳴さんとカメラを手にした鶴村がやけに嬉しそうに見える。

「響さん、響さん。」

「ああ、悪…んうっ?!」

写真を撮りながら思った。これからあの2人の前で滅多な事は言わない方が良さな、と。

「んじゃ移動するかー。」

「生チユー写真ゲットしちゃった」

「おい、そのバカ侑俐ー？固まってるんで早く来ーい。」

けらけらと笑う雉鳴さんとは対照的に響きさんが頂垂れていた。流石に公衆の面前でキスをされてはショックが大きかったんだろう、しかも同性。ここは笑わせてフオローをして置くべきだな。

「気持ち良かったですか？」

「頼むから黙れ。」

何か間違っていたらしい。

71・笑顔で爆弾を落とす

玄関のセキュリティを見た時に引き返せば良かったと今更思う。コンビニの袋と普段着が激しく似合わない、と言うか格差を感じる瞬間。躊躇う私に気付いた雉鳴さんが手招きをした。

「彩花ちゃん、どうしたの？ほら、おいで。」

「いや、その、凄いマンションだなあと。」

「まあ、貰い物だから、気にしないで。」

マンションって貰う物じゃないと思うんですが。玄関に居座る訳にも行かず、私は緊張しながら家上がった。そう言えば私、身内以外の男の人の家に来るとか初めてだ、どうしよう？何か益々緊張して来ちゃう！

「百面相してる所済まないが、ドアの前で突っ立ってられると通れない。」

「わああ？！すみません！旋堂さん！」

吃驚したのもあって深々と頭を下げると、旋堂さんは少し眉間に皺を寄せて考え込んだ。

「あの〜？」

「俺が言うべきじゃないんだけど、弭に本気になるのは止めとけ、あいつは君の手に負えない。」

「え？…それ…どう言う…？」

「たーかおーみさん。」

聞き返そうとした私の言葉を遮る様に雉鳴さんが旋堂さんにじゃれ

ついた。今の、聞こえてたのかな？何と無く気まずくなって、私は2人の横をすり抜けてリビングの皆の所へ戻った。暫くは他愛ない世間話や学校の事を話していたのだが、雉鳴さんが爆弾を落とした。

「ねえ、響さんはお姫ちゃん好きなの？」

「うぶっ?!」

「ちょ…ストレート過ぎでしょ、それは…。」

「俺回りくどいの嫌い。と言うかそもそもこの人色々面倒起こしてるしはつきりしてくれないと迷惑じゃない？」

雉鳴さんは笑顔だけどその場は一瞬にしてブリザードが吹き荒れていた。喧嘩売ってるも同然じゃない！殴り合いとかになったらどうしよう?!重い沈黙に怯えていると、誰かの携帯が鳴った。館林先生が少し不機嫌そうに電話に出た。

「…もしもし?お前今何処に…え…?緋織が倒れた?!」

その声に皆の視線が一斉に集まった。幾つか言葉を交わした後、先生は電話を切って響さんに言った。

「…つー事なんで、迎えに行つて送つてく。OK?」

「え?響さん行かないの?」

「酒入ってるから車運転出来ないだろ、じゃ、ちよつと失礼。」

先生が部屋を出て行ってしまつと再び沈黙が訪れた。と思つたんだけど…。

「お前に何が解る…。」

「え?」

「16歳である顔とスタイルでしかも上司の娘で健気で家庭的且つ

尽くすタイプ…それを…！」

「響さん？あれ？ちよつと、ねえ、昼間っから酔ってない？」

「目の前の御馳走を散々おあずけ喰らってる気持ち解るか！」

「あははは、解んなーい。」

うわあ、この人馬鹿だ…見習いたくないなあ。あれ？でもそれって、響さんは緋織ちゃん好きって事？何か解んなくなってきたかも。大人って面倒臭い。

72・泣きじゃくるまま

そう遠くない自分の家に戻ってから車に乗ろうとした時、私用携帯が鳴った。緋織からだった。

「もしもし？熱で倒れたって聞いたけど…。」

「もしもし！あの！来留宮です！」

劈く様な声に何故お前が出る？の疑問と共に若干の怒りを覚えたが、倒れた本人が電話に出られないのだと合点が行った。話をまとめると一之瀬が苛めて、真壁が追い討ちを掛けた。と言う何とも物騒且つ色々と誤解を招く表現だった。真壁と一之瀬？接点があったのか、あの2人は。

「直ぐ迎えに行くから、そこ何処だ？」

溜息混じりに住所を聞き、車を走らせる事十数分、ごく普通のマンションに着いた。赤い髪がキョロキョロしながら入り口付近をうろついているのが見える。俺が言えた義理では無いがああ髪でうろつかれると不審者だな。

「あ、お疲れ様〜。」

「お疲れ様〜じゃないだろ、一体どう言う事だ？何で緋織がお前の家で熱出してぶっ倒れるんだよ？ああ？」

「さあ？…痛っ？！」

拳骨の後部屋に入って物凄く引いた。ファンシー過ぎる、落ち着かない、と言うかイライラする、ああ、今直ぐ火を点けて焼き払ってやりたい。神経を疑ったが事情を聞いて納得した。だがこれは引く

だろ、普通は。と、ドアの向こうから何とも頼りない泣き声が聞こえて来た。例えるなら猫が酔っ払った様な声だ。

「…緋織？」

「せ、せんせえ〜…ふえつ…うええ〜…ふえええん。」

軽く眩暈のしそうな兎山盛りの部屋、その中央のベッドで緋織が真っ赤な顔でめそめそと泣いていた。額に手をやるとかなり熱い。風邪と疲労が重なった所に知恵熱でも手伝ったのか？泣き止まない緋織はしゃくりながら服の袖を引っ張って言った。

「だっこ…。」

「はっ?!」

「おうち帰るう…抱っこお〜…。」

緋織は俺を殺す気じゃないだろうか？侑俐にバレたら笑顔で爪を剥がされそうな気がするし、倉式本部長にバレたら実地訓練に借り出されそうだし、何より真壁の視線が心臓発作起こしそうなレベルで痛い。が、そも言っていられないので送って行く事にした。小さな身体を抱き上げると、怖いのか俺の服を握り締めた。

「私家迄付き添います、心配だし。」

「そうしてくれると助かる。で？お前は？そんな刺す様な目で見る位なら着いて来るか？」

真壁は少し間を置いてから緋織に目をやって頷いた。当の緋織はと言つと、熱で幼児返りしてしまったのか、車に乗せる時も泣きながら俺の服を離さなかった。宥めても埒が明かず上着を脱ぐ羽目になった。

「ヘックシユ！寒っ…エアコン点ける！」

「あ、どうぞ…。緋織ちゃん、大丈夫だからね？ほら、もう泣かないの。」

「随分懐いているんですね…館林さんに。」

何だっつて俺がこんな目に遭わなきゃならないんだ？これで家に本部長が居たら間違いなく今日は厄日だ。

「お家に連絡はした？病院行かないと。」

「お母さん…お仕事…。」

「え？お母さんまだお仕事なの？何時帰って来るか解る？」

「…来月…。」

思わず急ブレーキを踏んだ。後ろでシートにぶつかる音と衝撃があった。俺の耳が確かなら今、来月と聞こえた。恐る恐る振り返ってぐずる緋織に確認した。

「…2人共何処に…？」

「出張…で…フロリダ…。」

緋織を除く3人の深く長い溜息が車内にこだました。

73 残念な美人

少し眠ってしまったらしく、軽く頬を叩かれて目が覚めた。ゆっくり目を開けると旋堂さんの姿があった。金色の髪に一瞬緋織かと思つた訳だが。

「酒抜けたか？」

「多分：すみません。」

辺りを見回すと解散したのか人影は無く、旋堂さん以外は片付けをしている雉鳴弭だけが動いていた。起き上がった俺に気付くとトコトコと寄つて来て言った。

「皆家帰つたよ、荷物もあるしね。」

「え…？ああ…。」

「で、館林先生は熱出したお姫ちゃんの迎え。」

そう言えば先輩がそんな事を言っていた…いや、こうしてる場合じゃない、確か本部長と奥さんは今フロリダ出張の筈だし、緋織1人じゃ心配だな。椅子に掛かっていたジャケットを手に取ると、腕を掴まれると共に旋堂さんの冷たい声がした。

「お前は行くな。」

「何言つて…？だって、緋織が…。」

「お前本当は緋織の事好きじゃないんだろ？」

背筋にツツと汗が降りた。耳鳴りがする程沈黙が重かった。見透かす様な目と、思いの外掴まれた腕の力に微動だに出来ずにいた。不意に上がった口角に反射的に腕を振り払った。凡その察しが付いて

いるのか、鎌をかけたかは解らないが、確信の見える目に多分前者だろうと思った。

「…何時から？」

「最初から。んーっと正確にはテスト参加者の集合掛かった時だな。」

そう言えば小説家だったか、成る程人間観察は得意と言う事か。

「真壁君がお前の髪拾って全部洗い浚い調べてくれてなあ。」

決定、真壁殺す。全く余計な事を…と言うかそもそもあいつは何なんだ？先輩曰く他人の記憶やら思考やらが解るとか言っていたな、超能力みたいなもんか？信じてないけど。と、後ろから首にするりと手が回された。

「その割に独占欲は結構剥き出しだよな、響さんは。」

「そりゃ、まあ、妹みたいに大事には思ってるし、最近やたら綺麗になるから時々血迷いそうに…。」

言い訳がましく呟いていると、シャッター音と共にやや怒り交じりの声が出た。眉間に皺を寄せた鶴村だった。帰ってなかったのか。

「響さん最低…緋織ちゃんが可哀想過ぎる…。」

「睦希ちゃん、ドサクサで誤解を招く写真撮っちゃ駄目。ほらカメラ貸しなさい。」

ぼやきながらカメラを渡す鶴村を見ていて、ふと浮かんだ疑問を口にした。

「そっちはどうなんです？旋堂さん。彼女、お家事情に巻き込む気ですか？」

「んー…どうしようねえ？睦希。」

「えっ？どつって…え？」

「嫁に来る？」

「はひっ?!」

盛大に飛び退いた鶴村はテーブルに躓きコントの様に後方にスツ転んだ。可愛いのに色気の無い…。

74・隠された言葉

鍵を開けて貰い、火の様に熱い緋織を抱えて家に入った。矢鱈片付いた家はどこか生活感が無い。

「緋織ちゃんのお部屋、確か2階だったわよね？」

「暑い…暑い…痛いよお…。」

意識はあるが目が虚ろで息も少し弱くなっていた。来留宮と真壁も状態の悪さに青ざめている。一先ずリビングのソファに寝かせ相談した結果救急車を呼ぶ事にした。緋織の額に手を置くとまた少し熱が上がっていた。

「大丈夫か？俺が解るか？」

「ごめ…なさい…ごめんなさい…もう…もう許して…。」

うわ言みたいに繰り返すと緋織はそのままぐったり意識を失ってしまった。自分の脈が緊張で耳に響いて、目の前の出来事が画面越しかと思う位現実味が無かった。

「緋織?! 緋織しっかりしろ!」

真壁の声で我に返ると、救急車が到着するのはほぼ同時だった。放心気味の俺をよそに真壁が緋織を抱え上げていた。着いて行こうとする来留宮を引き留めて、連絡係として家に残る様に伝えると救急車に乗り込んだ。横になる緋織の傍らに真っ青な顔で手を握る真壁が居た。

「出発しますよ? 大丈夫ですか?」

「はい、お願いします。」

サイレンと共に走る車内には事務的な会話しか無かった。少しの沈黙の後、もどかしさを露にした真壁が口を開いた。

「…何でこんなに緋織を追い詰める…？彼女が何をした？」

「それは…けど、相手は警察の偉いさんだし俺や侑俐が個人で太刀打ち出来る訳無いだろ？」

「だからって旋堂家の犠牲にするのか？誰とも知らない相手に人形みたいに放り出されても何とも思わないのか?!」

憎しみすら混じった声だった。だけど俺はその声も、その視線も全く何も感じなかった。

「…今、何て…？」

「え？」

「旋堂家って…何の話だ？」

頭が回らなかった。紙を破ったみたいに情報がバラバラで纏まらなかった。旋堂家の犠牲？緋織が…人形？肩を掴まれ、思わずビクッと身体が跳ねる。

「聞いてないのか？」

「俺は…俺達はただ緋織を守れと言われただけだ…18歳になる迄手を出さずに緋織を守れと…。」

真壁は緋織に目を遣ると少し躊躇って言った。

「病院に着いたら話がある。」

「解った…。」

真壁は心配そうに、だけど愛おしそうに緋織の手を取った。多分俺はこの手を触れさせてはならないんだろう。仕事上は止めさせなきゃならなくて、近付けてる事すらいけないのかも知れない、でも…。

「大丈夫、緋織大丈夫だから…絶対助けるから。」

俺には真壁を止める事は出来なかった。

75・降り積もる涙

私は一体どの位眠ってたんだろう？目を開けると辺りは青い闇に包まれていた。知らない天井に、知らない壁、少し薬品の臭いがした。ぼんやりする頭で少しずつ思い出す。私熱で倒れちゃったのかな？それで誰か病院に連れて来てくれたんだ…。ゆっくり身体を起こすと右手が温かいのに気付いた。

「…緋織…？」

心配そうな声と共に、右手をキュツと握られた。

「…真壁さん？ここ…病院ですか？」

真壁さんは伏し目がちに頷くと、そっと私に触れた。最初に額、頬、首、熱が少し下がっているのに安心したのか、深く息を吐いた。

「どこか痛かったり気持ち悪かったりしないか？眩暈とか違和感はある？あ…水あるけど飲むか？」

少し青い顔で掛けてくれる優しい言葉に胸が詰まった。目の前が滲んで、涙が頬を伝い落ちた。

「ごめんなさい…迷惑掛けて。」

「緋織…？」

「もう、自分でも情けなくて…ごめんなさい…。」

涙を必死で拭っていると、その両手を掴まれた。隠そうとしてる顔や涙が曝け出されてしまうみたいで、俯いて目を瞑った。手から手

首へ、そして耳から頬へと触れる手に、自分の頭の中が乱される様な気がして、悔しくて抵抗した。胸を押したり叩いたりもした。だけれど大きな腕の中に閉じ込められて、名前を呼ぶ声が優しく、力が抜けた私はそのまま身体を腕の中に預けた。少し早い心臓の音が心地良くてどこか嬉しかった。

「…緋織。」

「…はい。」

「もう苦しんでるの見てられない…。」

「…はい…。」

「勝手だって解ってるけど…俺は緋織を助けたい…守りたいって思ってる。」

「……………」

「緋織が好きだから…。」

しんと静まり返る病室とは裏腹に、私の耳には煩い位に鼓動が響いていた。真壁さんの音だけじゃなくて、私の心臓も早鐘を打っていた。頭の中に侑俐さんの顔が浮かんだ。侑俐さんに言っただけの言葉、私に触れて、抱きしめて、何度も囁いて欲しかった…。だけれど一度も聞けなかった言葉だった。苦しかった。ずっと、ずっと、ずっと飲み込んだ言葉が鉛みたいに重く降り積もっていた。言えないのが辛くて、諦めなきゃいけないのが怖くて、受け止めてくれないと解ってる想いを募らせるしか出来なかった。

「どれだけ我慢して…こんな、倒れる迄…何で…っ！」

「だって駄目だって言われたんです！もっと勉強しなきゃ駄目だって！何でも出来なきゃ駄目だって！好きに…なっっちゃ駄目だ…！全部諦めなきゃ駄目だって言われて来たんです！人形になるしか無かったんです！」

悲鳴を上げそうになった私の唇は、熱を帯びたそれに塞がれていた。息をしようと口を僅かに開ける度に隙間を惜しむ様に舌先が口内をなぞった。強張っていた身体からは力が抜け、私は広い背中に手を回してしがみ付いた。

「信じて良いんですか…？」

「え？」

「私は真壁さんを見ても良いんですか…？諦めたり、飲み込んだりしなくても許してくれるんですか?!」

「緋織…。」

真壁さんは強く頷いて、それからまた私を抱き締めた。互いの鼓動が混ざり合って、少しぼやけた視界に吸い込まれそうな瞳が映った。何度も重なり合う唇を私はいつの間にか自分から求めていた。

76 不運と湯豆腐

家に戻ってから少ししてカシスさんからメールが着ていた。緋織ちゃんも倒れて入院した、と言う物だったけどそれを見た時私は驚かなかった。凄く無理してるのは私から見ても明らかだったから、正直いつかこうなるんじゃないかと思ってた。

「うん、解った。白いタンスの中から着替え持って行けば良いのね？うん…じゃあ、ゆっくり休んでね、緋織ちゃん。」

カシスさんは電話を切ってホッとした様に軽い溜息を吐いた。

「緋織ちゃん意識戻ったの？」

「うん、口調も結構しつかりしてたから大丈夫みたい。私明日は休講だから着替え届けて来るわ。」

「良かった…いきなり『緋織ちゃんが死にそう』なんてメール来るから吃驚しちゃった。」

「う…それはごめんなさい…。でも結構酷かったみたいで私焦っちゃって…。」

「実際見た訳じゃないけど、目の前で人が倒れて意識失ったらそりゃあ焦るわよ。」

「だ、だよな？」

それでも容態が落ち着いたらと聞いて私も安心した。心配しているだろうしふぉんちゃん始めメンバーに連絡を入れた後、私は家に戻る事にした。旅行からいきなり入院騒ぎ…何だか全然休んだ気がしないけど、たまにはこう言うのもアリなんだろうか？うーん、ごくたまに位が私としては良いかも？

「あ、夕飯。」

帰る途中で行き着けのスーパーを見て思い出した。旅行に行くから前日に痛みそうな食材を全部使い切った。つまりこのまま家に帰っても夕飯も朝食も作れない。コンビニで買うのも良いけど自炊の方が断然安上がりなのよね、好きな物だけ作れるし。自分に言い聞かせる様にスーパーに入り手頃な食材を選ぶ。時間が遅いと品数は少ないけどタイムサービスなんかがあって財布には優しくったりする。

「うわ、もう8時過ぎてる…。」

買い物を終えて帰路に着いた。歩き慣れた道だけど、こんな時間だし人通りも少ないしでやっぱり怖い。防犯ブザーを手の中に入れて早歩きで何とか家に辿り着いた。

「え…?!」

少し手前で思わず足が止まった。住み慣れた筈のワンルームマンションの入り口に人影が見える。うわあ…もしかして酔っ払いとか？冗談でしょ…別の所で飲んでよ、怖くて入れないじゃない…!あ、そうだ!こう言う時こそ防犯ブザー鳴らしちゃえば良いかも!

「あれ?あれ?えーっと、スイッチ…んんん?」

暗いせいもあってか何処をどうすれば良いのかよく解らない。暫く弄っていると真後ろでジャリツと足音がして全身が凍り付いた。こ、殺される?!

「…董?」

「へ…?!」

あれ？この声…。

「…って、館林先生じゃないですか！もう、脅かさないで下さいよ、てつきり酔っ払いか何かかと思っただじゃないですか。」

「ごめん…。」

「…先生？」

何か、元気無い？あ、もしかして緋織ちゃんの事まだ心配してるのかも？

「緋織ちゃんなら大丈夫ですよ、さっき目を覚ましたって連絡ありましたから。」

「そう…。」

「え？あの…ちよつと?!」

先生はぼつりと呟くとそのままフラフラと何処かへ行きそうになった。何か解らないけど、このまま放って置いたら車に轢かれそうな気がして、慌てて腕を捕まえた。先生が少し驚いた顔で振り返る。私何やってるんだろう？思わず引き止めちゃったけど言葉が出て来ない…何て言おう？車に気を付けて？転ばないで？駄目だわ、小学生じゃないんだから…。

「…湯豆腐好き？」

「はい？」

「好き？」

「え、ええ…まあ…って、ちよつとちよつと?!それ私の食材！って言うかそこ私の部屋で…!」

「飯作るから今晚泊めて。」

お母さん、
童は悪い子です…ええ、
運が。

77・沈黙と湯豆腐

押し切られる形で家に入れてしまったけど、一人暮らしの部屋に入れちゃうのってまずいよね？しかも冗談なのか本気なのか知らないけど泊めてって…そんなの絶対ダメ！私に色気が無いのは解ってるけど幾ら何でも危機感を覚えるわ！

「やっぱり帰って下さい！」

「こころ意見を变えるなよ。」

「でも、やっぱり危ないと言うか…まずいじゃないですか、付き合いってる訳でもないのに。」

「付き合い合ったら良いの？」

「そりゃあ、やっぱり…好きな人だったらちよつと位は…って、台所勝手に漁らないで下さいよ！」

「食材冷蔵庫に入れてるだけだ。」

ペースに流されてる気がする…いや、でもここで弱気になったらダメ！食材詰めたら帰って下さいって言おう！

「昆布ある？」

「え？昆布ならその引き出しの…。」

「あつたあつた、土鍋借りるよ。」

「だから…！もう！」

家主である私を余所に、先生はテキパキと料理を作っていた。動作が手慣れてると言うか、無駄が無い感じ。もしかして家政科の私より上手いんじゃない？流れる様な手際に見惚れていると、コンロの火を止めてふうつと長い溜息を吐いた。無言のままテーブルに所狭しと並べられた料理からは温かそうな湯気が上がっていた。

「…美味しいし。」
「独り身が長い物で。」
「それであの…何でこんな事に？」
「白菜と豆腐があったから。」
「そうじゃなくて！」
「2年程騙されてたのがショックだったから。」
「へっ?!」

そう言うと先生は少し伏し目がちに御飯を食べ始めた。何と無く次の言葉が出て来なくて沈黙が続いた。料理は美味しかった筈なのに、正直何処に入ったんだか解らない。少し憂鬱な気持ちで後片付けをしていると、先生が口を開いた。

「…悪かった、急に押し掛けたりして。」
「本当ですよ、何事かと思いましたがもん。」
「いや…何して良いか判んなかったんだよね…頭真っ白くなって、気付いたらここ来てた。」

食器を洗い終わった私は手を拭くと先生に向き直った。そしてどこか呆けてる先生の両頬をペチンと叩いた。

「それでも非常識です。」
「はい…。」
「…大丈夫ですか？」
「え？」
「辛そうです。」
「何言つて…ちょ、止め…！」

顔を逸らした先生を無視してトレードマークみたいなサングラスを

奪い取った。真つ赤に泣き腫らした目を見てもちつとも驚かないし、動揺もしない。何と無く予想してたから。

「…人選ミスったな。」

「そうですね。」

先生は私の手からゆっくりサングラスを取り上げると、そのまま力ウンターにカチャリと置いて私を見遣った。

78・青い闇の中に

少しの間気まずそうにしていたけど、先生は少しずつ話し始めた。自分が事故に遭って響さんに助けられた事、恩人であるカウンセラーに会った事、そしてその人が緋織ちゃんのお母さんだった事、2年前言われた事、ずっと信じていた事、そしてそれが嘘だったと言う事…。

「俺は騙されてたつて言うより、都合の良い様に思い込んでただけだな…18歳になったら緋織は自由になるつて…政略結婚だの悪い冗談か何かだつてさ。」

「そりゃあ、私だつて思っちゃいますよ、今時そんな昼ドラマみたいな事有り得ないつて思いますもん…。」

「真壁から話聞いた時、最初頭にきたんだよ、『騙してたのか』つて…けど、その後言われたんだ。」

先生は少し目を伏せて、呼吸を整えてから躊躇いがちに言葉を続けた。

「『緋織は最初から全部知つてた』つて。」

「え…それつて…え?!じゃあ緋織ちゃん、自分がその旋堂家つて所の道具みたいに見えるの知つてたんですか?!」

私の言葉に先生はコクリと頷いた。信じられない気持ちだった。小さい頃から誰とも知らない人と結婚させられるのが決まつてて、勉強も何もかもその為に努力させられて、好きな人すら諦めてなんて…。

「酷い…それじゃ緋織ちゃん本当にお人形じゃないですか…幾ら何

でも、そう言うの法律とかで何とか…！」

「実質取り締まる法律なんて無い。本人も納得してると言われればそれで済んだ。」

胸に鉛が詰まった様に重くなった。正直私は緋織ちゃんに恵まれ過ぎてる子だつて思ってた。可愛くて、頭も良く、何でも出来て、好きな人に守つて貰えて、何て贅沢だつて思ってた。だけど実際は鳥籠に押し込められて何もかも取り上げられる事を知らされてた。どんな気持ちなのかは解らないけど考えただけで息が詰まる気がした。私だつたらきつと耐えられない。

「俺は何も知らないで侑俐に会わせて…侑俐も何も知らないまま緋織を守つてた…辛い時は支えになって、困った時は手を貸して、甘えられればそれに応えて…。」

「先生？」

「そりゃあ好きにもなるだろ…駄目だつて言われたつて、理想を絵に描いた様な奴俺が与えちゃったんだから…。」

「それは…でも、知らなかったからで…。」

「…緋織を診た医者が言つてたよ…大分前から熱があつた筈だ、気を張り詰めて身体が熱を出す事を拒否してたつて…。」

ふと膝の上に置かれた先生の目に入った。震える程握り締めた手から薄っすら赤い筋が滲んでいる。

「先生！手…駄目っ！」

「…俺は…2年間も何も知らずに緋織を…侑俐を追い詰めてたんだよ…熱すら出せない程ギリギリの所まで…！」

「違…！先生！」

硬く握り締めた手を何とか解いた。手の平に爪が食い込んで血が滲

んでいた。真つ赤になった手に不安と動揺が隠せなくて私の手も震えていた。

「怖かったんだ…結果的に誰かを人形にする事に手を貸してたって思ったらどうしたら良いのか解らなかった…1人で居たら気が狂いそうだった…お前には何も関係無いのに話して自分だけ楽になりたかった…！」

震える手で強く手首を掴まれて思わず身が竦んだ。でも泣き出しそうな声と伏せた目に胸が苦しくなった。安易な言葉を掛ける事も、この手を振り解く事も私には出来なかった。空いた手でそつと目の前の髪に触れながら私は思ったままを口にした。

「…先生のせいじゃないです。緋織ちゃんは何利さんや先生に会えて嬉しかった筈です。」

「違う…違う…俺は2人を苦しめて…！」
「助けちゃえば良いじゃないですか。一之瀬さんが助けしてくれるって言うのなら、緋織ちゃん本当に自由になるかも知れないじゃないですか。そして…先生は緋織ちゃんに幸せ運んで来た優しい先生です。だからきつと大丈夫です…ね？」
「…っ！」

堰を切った様に先生の目から涙が落ちて、それと同時に手を引き寄せられて抱きすくめられた。初めて重なった唇は熱っぽくて、少し涙のしょっぱい味がした。何度もキスを落とされて眩暈がして、肩を押された拍子に背中にあるベッドの柔らかい感触と、直ぐ近くに私を見下ろす先生の顔があった。

「もう一回言つて…大丈夫って…董の声で聞かせて。」
「大丈夫。」

「もう一回……。」

「大丈夫ですよ、先生。」

手を伸ばして頬の涙をそっと拭った。まだ残る不安や苦しみを消してあげたいって、私は素直にそう思った。先生は一瞬、少しだけ嬉しそうな笑顔を見せると、手を伸ばして部屋の照明を消した。辺りが月明かりで青い闇に染まって、深く口付けられて、私は先生の腕の中でそっと目を閉じた。

79・バット持って歩こう

何だか色々あった旅行が終わってやっと学校に居る気分だった。考
える事が多過ぎて逆にあまり考えたくない、正直そんな感じだった。
気晴らしに戦利品である写真を眺めていると、目隠しと同時に明る
い声が聞こえた。

「にゃっふおーい、睦希にゃん。」

「んー密佳、お早う。」

振り返るとクラスメイトであり同じ美術部の密佳が私のデジカメを
キラキラ輝く目で見ていた。全く類は友を呼ぶって私と密佳の為
にある言葉だと思うわ。と、入り口辺りがざわざわし出した。

「鶴村睦希は居るか？」

「あ、会長だ。睦希にゃん、天城会長来てるよ。」

「え？はあい。」

ゲームのテストや旅行で一緒だけど会長とはあんまり話さなかつた
し普段から交流ある訳でも無いんだよね。直接来るって結構珍しい
かも？と言つか凄く挙動不審…。

「…話があるんだが…場所を変えないか？」

「え？何？はうっ！もしや睦希にゃんに愛の告白？！」

「いや違うが。」

「密佳、それ絶対無いから。で？何？面倒だし此処じゃ駄目なの？」

「良いのか？」

きよとんとした顔で聞かれても思い当たる限りで変な事を言われる

覚えも無いし、会長もそうそう爆弾落とさないよね？やああって頷くと、少し視線を彷徨わせてから意を決した様に口を開いた。

「今直ぐお前の恋人を呼び出して貰えないだろうか、携帯は充電が切れるし倉式は休んでいるので対応出来る人間が居なくて困ってるんだ。」

密佳がデジカメを落とした、隣に座ってたクラスメイトが盛大にジューズ吹き出した、後ろで黒板消してた日直がチョーク折った、斜め前に居たあんまり交流無い男子が雑誌落とした、私は硬直した。忘れちゃいけなかった、そして見てくびっちゃんいけなかったわ、もう遅いけど。この人勉強以外本当に馬鹿だ、宣言出来る、日向ちゃん、ファイト！

「鶴村？呆けてるがどうした？」

「…殴って良いかしら？」

「何故？因みに仕事に支障が出るので答えはノーだ。」

「そう…あの、因みに携帯を拓十君か誰に借りて連絡取るって言う手は思い付かなかったのかしら？」

「ああ、それでも構わないな。だけど鶴村が呼んだ方が来るだろう？恋人なんだし。」

手近にバットとか木刀があったら無言で連打してたかも知れない。ああ、殴りたい、純粹に悪気が無い分却って性質が悪い気がする。いけない、軽く眩暈がして来た。放心状態で鷹臣さんにメールを打つと会長は納得した様子でスタスタと教室を後にした。辺りは私に視線を集中させて静まり返っていた。私の顔を覗き込んで来る気配をひしひしと感ずる、と言うか目の前に顔がある。

「睦希にや〜ん？」

「…はい…。」

「恋人って何?! 恋人って何?! 恋人って何?! 恋人って何?! 恋人って何?! 説明してよ! この密佳様に恋人の何たるかを包み隠さず説明しなさいほらほらほらほらあつ!」

「密佳…ぐ…ぐるじい…!」

その後私は密佳を始めクラスメイトの、主に女子の質問攻めに遭った。不幸中の幸いなのか鷹臣さんの画像は転送してあったけど、呼び出したから本人が来ちゃう訳でハッキリ言っただけの意味が無い。散々つつかれた後着信があつて、呆けたまま電話に出た。

「睦希、さっきのメール何? どうしたの?」

「えっと…私もよく解らなくて…天城会長に聞いて貰って良いですか?」

「解った…大丈夫か? 何か元気無いな?」

「凄く平気…うん…。」

電話を切ると私は天城会長の所へ向かった。途中で野球部に寄ってバットを借りて行こうと心に決めて。

80・蚊帳の外

彩花と一緒に自販機でジュースを買っていると、何やらキャンキャンと甲高い声が聞こえた。見ると鶴村先輩が友達に纏わり付かれています。溜息を吐きながらこっちを見た先輩と目が合つと、何故か先輩は私にバットを手渡した。

「何でしょうか？このバット。」

「これで天城会長殴つて来てくれない？」

「解りました。」

「ちよつ…！若葉？！鶴村先輩も何物騒な事言ってるんですか？！」

焦った彩花がバットを取り上げると、先輩に纏わり付いていた人がずいっと身を乗り出して言った。

「ねえねえ、君。睦希にやんの恋人ってどんな人？知ってる？」

唐突な質問に目をぱちくりさせた。え？恋人？睦希先輩に恋人…。

「せ、先輩恋人居たんですか？！」

「えっ？」

「若葉…。」

あれ？何この空気、2人は目を逸らしてるし彩花まで何だか半分呆れた目で見てる。私もしかして空気読めて無い？でも本当に知らなかったんだけどなあ。微妙な沈黙をこれまた空気を読めない声が破った。

「鶴村、此処に居たのか、探したぞ。」

「彩花ちゃんバット貸して。」

「駄目ですつてば!」

バットの奪い合いを会長はキョトンとした顔で眺めていた。そうだが、このバカ会長なら知らないかも？

「会長、鶴村先輩の恋人つて誰？」

「は？誰つて、旋堂さんだろう？緊急事態で呼び出して貰ったんだ。」

「にや！天城会長！その旋堂さんとやらはどんなお人?!カツコイイ?!」

「ちよつと密佳!」

盛り上がる先輩達を余所に私は1人シヨックを受けていた。バカ会長まで知ってるなんて…何か私めちやめちや蚊帳の外つばくない？そもそも恋人とか何？皆ちよつと簡単に恋愛ごっこし過ぎじゃない？それとも私硬いのかな？そうなのかな？しふおんちゃんや彩花だつて…。

「若葉?!」

居たたまれなくなつてその場を走り去つていた。皆が急に汚く思えて逃げ出したかった。

「おい日向!」

声と同時に会長に腕を掴まれた。頭が訳解んなくなつてたのと驚いたので自分でも意味不明な涙がポロポロ零れた。学食が近いせいか周りにわんさか居る人から容赦なく浴びせられる視線が痛い、痛い、痛過ぎる。

「放して！痴漢！変態！バカ！」

「落ち着け！急にどうした?!」

「煩い！もう知らない！皆汚い！」

掴まれた手をぶんぶん振って抵抗していると、いきなり目の前が真っ白になった。それがテーブルクロスだと気付いた時には私は荷物みたいに担ぎ上げられていた。

「何すんのよ?!下ろせ!!」

本気で意味が解らずただただ暴れていると、ドアの音と共に何処かへ下ろされた。テーブルクロスを剥がして辺りを見ると、どうやら医務室らしい場所に座らされていた。

81・心底舌打ち

状況が飲み込めず呆けていると、咳払いが聞こえて我に返った。

「大丈夫か？」

「う…別にどうもしてないし…。」

気まずくて思わず口箆っていると、グシャグシャに握り締めていたテーブルクロスを優しく取り上げられた。テキパキと畳まれたクロスを見て今度はどーんと気持ちが悪んで来た。ベッドの上で膝を抱えて深い溜息を吐くと、何処からか甘い匂いが漂って来た。

「何してんの？」

「カップに湯を注いでる。」

振り向かずにそう言うと、会長は何かをくるくるかき混ぜていた。程無く私の前に湯気の上があったカップが差し出された。何で医務室にココアがあるんだろう？館林先生の私物かな？そう言えばあの先生は割とまともな方だよね、コスプレ趣味なのが痛いけど…。

「要らないのか？」

「い、要る！要ります！」

受け取ったココアを啜るとじんわりとした甘味と温かさが体に広がった。

「悪かったな、手荒な真似して。」

「え…あー…テンパったの私だし…何か訳解なくなっちゃって。」

乾いた笑いに我ながら空しくなっていると、会長が私の隣に少し間を開けて座った。微妙な距離が却って緊張を呼んでいた。暫くの沈黙の後、空になったカップに手が伸びて来た。

「解らない。」

「はい？」

「鶴村が怒った理由も、日向がどうして泣いたのかも、俺には解らない。」

会長は観察するみたいにじっと私を見詰めて言った。鶴村先輩の事はよく解らないけど、多分空気読めない事でもしたんだろうな、この人天然だし、勉強以外でんで小学生並みだし、言っちゃ悪いけどネジ飛んでる感じするのよね。密かに吹き出すと、予想外な言葉と光景が目の前に降って来た。

「今笑った？」

「ふえっ?!」

鼻先数センチの所に顔があった。歯医者みたいに両手でガツチリと顔を固定されていて動かせない。言葉が出て来なくて口をパクパクさせるしか出来ないでいると、不意に会長が不安そうな顔をした。

「やっぱり日向は俺じゃ笑わないのか？」

「は…はい？」

「だって日向はいつも俺に怒ってるだろう？えーっと、そう、ツン状態と言う奴だったか？」

まだその知識引き摺ってたんだ、この人ホントにバカと言うか純粹と言うか…どうでも良いけど顔近い。心臓痛い、顔熱い、息するの辛い、バカバカバカバカ…!

「どうしたら笑うんだ？」

そんな事言われなくても！

「日向はどうすれば嬉しい？」

だから顔が近いって！そんなに顔近付けたら唇当たっ…?!

「ニヤー。」

「ひゃああっ?!…ね、猫…?何で猫が…。」

「…チツ！」

「何か言った？」

「別に？」

謎の猫、今はグッジョブにしているとあげよう、うん、そうしよう…。

82・実はそこに居ました

授業も無いのに朝っぱらからメールで呼び出されていた。

「『話があるので高等部の医務室へ』って…何なの？あの先生は…」

話ってそもそも何だろう？思い当たる事は幾つかあるけど断定出来ないし、私の預かり知らぬ事かも知れないし、面倒だけど足を運ぶ事にした。何の気無しに医務室のドアを開けるとガンツと言っ音と共に低い呻き声が聞こえた。

「痛つてえ…。」

「おわっ？！ごめんなさい！！…って、あれ？えーっと…会社の人で…何だっけ？おみくじみたいないな…。」

「絵眞…それと、そっちの絵馬とは字違う。」

「そうそう、絵眞さん絵眞さんね、昨日ぶりですー…ところで何してるんです？こんな所で。」

「そいつ引き取りに。」

絵眞さんは肩をさすりながらちよいちよいと部屋の隅を指差した。

目を遣るとドアの脇にちよこんと座る真っ白な仔猫が見えた。可愛
い過ぎる！

「仔猫おおおおー！」

「ああ、確かもう一匹はアンタが連れて帰っ…。」

「にゃんにゃんにゃんにゃん、肉球プニプニしちゃごうりごうり
うりうり…！」

仔猫を余す所無く撫で可愛がつっていると、溜息と共に目の前にキヤラメルスティックが突き出された。しかも『Delicious Forest』の限定品！ホクホク気分でキヤラメルスティックを食べていると、思い出した様に絵真さんが私に言った。

「そもそも何で此処に居る？館林先輩は？」

「私も呼び出されたんですよ、館林先生に。」

「遅刻かな？珍しい…。」

珍しいんだ…あの先生の事殆ど知らないからそれも解らないけど。

「ニヤンツ！」

膝の上に居た仔猫が突然私のヘアピンにじゃれ付いた。目の前に仔猫が張り付いてて真っ白になり、何が何だか解らなくなった。玩具だと思っただのか仔猫は強引にヘアピンを耑り取ると衝立の隙間に飛び込んでしまった。

「ああ〜コラコラ、駄目だよ、返して。」

「衝立どかそうか？」

「お願いします〜。」

「はいはい、ちょっとどいてて…あれ？何か引っ掛かって…危ねっ！」

コントみたいに別の衝立が思いつ切り私に向かって倒れて来た。うーん、今日って厄日よね、此処まで来ると諦めが付くって言うか、ヘーカモーン不運って気分になるわよね、うん。そして次の瞬間音と共に脳天直撃な痛みが…。

「あれ？痛くない。」

「…痛〜っ！背中直撃…。」

「ナイス王子様っぽい救助。」

「俺は参加者じゃ無えよ…いいから猫。」

仔猫から無事へアピンを取り返すと、廊下から何やら女の子の騒ぐ声が聞こえて来た。あれ？この声もしかして日向ちゃん？

「おい！」

「え？むがつ？！」

口を塞がれ引つ張られたと思うと今度は真っ暗になった。しかもちよっと埃臭い多分だけどロッカーの中だよね？

「ちよ…何…?!」

「しっ！静かに…。」

どう言う訳か私は絵真さんにロッカーの中で口を塞がれたまま後ろから抱き締められていた。動くに動けないでいると、予想通り日向ちゃんと…それを抱えたミコちゃんが入って来たのだった。

83・三度目のアップパーは…

19年生きて来たけどまさかロッカーの中から幼馴染が日向ちゃんに手を出しそうな瞬間を見るなんて…。

「行つたか？」

耳元で囁かれ全身にぞわつと鳥肌が立った。そうだ、幾ら私が幼児体系で色気が無いとは言えロッカーの中に成人男性と2人で居たら身の危険が！

「ふえつくしよい！はくしゅ！げっほげほ！あー！痒っ！鼻痒っ！」

無いわね。

「もう、大体何でロッカーに…。」

出ようと手を掛けた時、医務室の扉が開く音に思わず固まっていた。それは絵真さんも同感だったらしく自分の口を覆っていた。隙間からそつと部屋の様子を伺うと、館林先生が入って来るのが見えた。と、その後ろから見覚えのある、で意外な人が入って来た。

「あれ…来てないな。」

「幸水さんも呼んだんですか？」

「ん、そう仔猫引き取れるって言うからさ。」

え?!…あれ…董ちゃん?!状況が解らず目を瞬かせていると、後ろからスツと手が伸びて、再び私の口を軽く塞いだ。静かに、と言

わんばかりに目の前に指を立てる。表情は残念ながら見えない。口ツカー越しに2人の声が聞こえて来る。

「先生、そう言えば萌香さんにお話って言うのは？」

「ん？」

「幸水さんは仔猫でしょう？だったら…。」

「察して。」

「え？」

「俺に2人同時に守るのは無理…だから察して？董。」

「…はい…。」

塞いでいた手ごと、両手で口を覆った。一瞬、絵真さんの手がピクリと強張って、反対の手で私に目隠しをした。館林先生よりも、耳まで真っ赤になった董ちゃんよりも、多分私の心臓が一番バクバクしていた。と、不意に大きな音がして、それから軽く2人の驚く声が聞こえた。絵真さんがロツカーを蹴り開けたんだと解るのに少し時間が掛かった。

「状況は大体解りました。ああ、猫は大事にしますから。」

素っ気無く言うのと絵真さんは猫を片手に私の手を引いて医務室を出てしまった。

「ちょ…ねえ！待って！絵真さん?!」

早足で歩くもんだから足がもつれて今にも転びそうになっていた、中庭迄来て漸く止まったと思うと、此方向き直り真顔で言った。

「お前彼氏とか居ないのか？」

「いきなり何て事聞くのよ?!」

つい顎にアッパーを入れてしまった。

「真面目に聞いているんだ。天城海琴も館林先輩も駄目なら他に自分を狙ってそうな奴に心当たりとか…。」

「生まれてこの方ナツシング。」

「ドンマイ。」

「失礼ね！」

2度目のアッパーをガードされ眉間に皺を寄せたまま見上げて睨む。と、溜息を吐いて口を開いた。

「解った、何とかする。」

「何を？」

「内緒。」

3度目は鳩尾にヒットさせた。

84 古本屋の常連客

鷹臣さんと呼んだ時間が近くなり私は来客用の駐車場で待っていた。背中にはカメラを構えた密佳が張り付いている。

「ねーねー、睦希にゃん、その『旋堂さん』って、どんな人？可愛
い系？カツコイイ系？ラテン系？」

「少なくともラテン系じゃないよ…って言うか…やっぱり向こう行
つて欲しいんだけど…駄目？」

「好奇心と探究心の名の下に却下るのです！」

諦めの溜息を吐いた時、見覚えのある車が入って来た。うう…何か緊張して来た。と、いきなり携帯が鳴り出し、私は大慌てでポケットから携帯を取り出した。あれ？鷹臣さんから？

「…もしもし？」

「何か背中にくっついてる子が居るけど、俺行って大丈夫？」

「と、言いますと？」

「悪目立ちしてる自覚はあるからさ。」

思わず吹き出してしまった。確かに鷹臣さん目立つよね、背高いし髪長いし、それに…。

「睦希？」

「はいっ！…あの…友達なので大丈夫です…多分。」

「ん、解った。」

電話が切れるのと車のドアが開くのはほぼ同時だった。

「お待たせ、一応事情は海琴から聞いてる。茶道の亭主が居ないんだって？」

「みたいですね…何かしません、学校に呼び出したりして。」

「気にしないの。で？この固まってるお友達は？」

振り返ると密佳はポカンと口を半開きのまま目をぱちくりさせていた。目の前で手を振ってみるが反応が無い。また落とすといけないので手からカメラを取り上げようとすると、やっと我に返ったらしい密佳が私の両肩を掴んで言った。

「睦希にゃん…君を見くびっていたよ…。」

「え？」

「何ぞや?!この動くお人形さんの様な人は!リアルロンゲ!リアル長身!ちよつとコピーロボットとか居ないの?!」

「随分古いネタ知ってるねえ。」

「おお笑った!睦希にゃん!この人笑ったよ!」

「ぐえええ…密佳ぐるじい…。」

10分程して漸く落ち着いた密佳と一緒に講堂へ案内した。気のせいじゃなくて周りの視線がグサグサ刺さる。女の子達は勿論男子生徒まで二度見してる始末だ。居たたまれない気分で居ると向こうから会長がパタパタと走って来た。

「旋堂さん、すいません、急に面倒お掛けして、顧問と部長と更に倉式まで休んでて宛てが無かったもので。」

「随分バタバタいったな、緋織はともかくインフルエンザでも流行ったか？」

「いえ、事故だそうです。」

「事故?…まあ良い、用具の確認したいけど場所は？」

「こっちです、鶴村、多々良、ありがとう、礼は後です。」

ピントボケたお礼くれそうだから別に要らない、と心の中で呟きつつ2人を見送った。迷惑掛けちゃったって解ってるつもりだったけど、学校で会えた新鮮さと嬉しさで胸がキュッと温まった。

「キュンキュン中だなあ〜？」

「なっ?!」

「ふっ…睦希にゃん、君が眩しいぜっ!大人の階段を上ったら報告してくれると密佳は嬉しいよ…。」

「無いから!そう言うの全然無いから!」

「え?全く?助手席で転寝して『はっ…今唇に何か…この感触もしや…?!』みたいな記憶は?」

たまに思う、密佳の読んてる本…微妙に古い。

85・悪夢へと

ちくちくと刺さる視線を避ける様に調理室の前を通り掛ると、チョコレートの甘い匂いが漂って来た。

「良い匂い、ここだあ！」

「密佳、犬じゃないんだから…あれ？しふおんちゃん。」

「睦希先輩、味見に来たんですか？丁度もう直ぐ焼き上がりです。」

エプロンを着たしふおんちゃんがパタパタと片付けをしていた。テーブルの上にはチョコレート菓子が色々並んでいる。クッキーはウサギの形で随分手が込んでみたい。

「ひおのお見舞いに可愛いのを選りすぐって持って行くことと思って、結構作り過ぎちゃったんですけどね。」

そうやってしふおんちゃんは少し不安そうに笑った。そっか…緋織ちゃんの事情知らないんだっけ…でも私が勝手に話さない方が良さよね？込み入った内容だし、鷹臣さんから聞いた話を私の口からは言い辛いし…。考え込んでいると、隣から包装紙を持った彩花ちゃんがひよこりと顔を覗かせた。

「しふおんちゃん、ラッピングってこんな感じで良いの？華道部の和紙とかだけど…。」

「充分です！有難う御座います、先輩！」

いそいそとお菓子をラッピングしているのを見ながら、胸が痛んだ。2人は友達なんだし、せめて緋織ちゃんが最悪の事態になるのは避けられそうだって事は伝えた方が良さよね？

「あの、しふおんちゃ…。」
「げぼっ…！うぐっ…?!」

咳き込む声と共に、床にお菓子散らばった。一瞬何が起きたのか解らずお菓子を見てみると、密佳が悲鳴を上げた。ハッと我に返った私の目には信じられない光景が映った。

「げえっ…！ごぼっ…！」

「先輩?!先輩!!彩花先輩!!」

「ちょ…救急車!誰か先生!先生呼んで!睦希!睦希ってば!」

「あ…う、うん!」

半分放心状態で携帯を取り出したけど、持つ手が震えて取り落とししてしまった。どうしよう…一体何が起きてるの?彩花ちゃんが真っ青な顔で苦しそうに何度も吐いて、しふおんちゃんが泣きながら叫んでいるのが見える。密佳は私の手から携帯を取ると救急車を呼ぶ為に電話を掛けていた。震える手で彩花ちゃんの背中をさすっていると、バタバタと足音が聞こえて来た。

「おいどうした?!」

「先生!わ、解んない!何か急に吐いて倒れて!」

「澤田?話せるか?澤田?!」

館林先生は苦しそうに咳き込むだけの彩花ちゃんの様子を見ながら少し周りを見て言った。

「何があった?」

「見てなくて…ほんと、いきなり苦しそうにし出して…。」

「お、お菓子…わ…私の…!」

消え入りそうな声だった。涙をいっぱい溜めたしふおんちゃんが震えながら口を開いた。

「せんぱ…私の…お菓子…味見し…て…わ…私…の…。」
「…解った。」

さっきまで楽しそうだった調理室は、一瞬にして悪夢の様な光景に変わってしまった。

「どろして…。」

86・甘い罪悪

静かな病室に電話の振動音が響いた。眠っている緋織が起きてしまわないかと慌てて手に取る。

「鶴村睦希…?」

着信名に一瞬躊躇した。他人の電話に勝手に出るのも非常識だが、事情を知っている人間なら、と通話ボタンを押しテラスに出た。

「もしもし?」

電話の向こうでざわざわした音だけが聞こえる。救急車のサイレンだろうか?少し煩い。

「もしもし?緋織ならまだ眠って…。」

「お前、真壁か?」

「えっ…?」

明らかに機械を通した様な声にぎよっとした。誰だ?俺を知ってる?

「響じゃないのか…今はお前か…解った。」

「おい?!」

「その病院に澤田彩花が搬送された。桜華しふあんもじきに到着するだろう、せいぜい悔しがれば良い…それとも黙って置くか?大事な姫君を傷付けない為に…。」

「なっ…!!」

ブツリと切れた電話から無機質にツーツーと言う音だけが聞こえた。

「…真壁さん？」

「っ！！…起きたのか。気分は？」

「もう大丈夫ですよ、そんなに心配させましたか？」

柔らかい笑顔を見せる緋織にそつと触れた。まだ僅かに熱っぽい。不意にさっきの電話が頭を過ぎる。明らかに緋織に対する敵意…だけど電話の相手は多分鶴村本人とは思えない…一体誰が…？

「真壁さん？」

知らせない訳には行かないし、いずれ耳には入るだろうが、何だろう…嫌な予感がする…今は報せちゃいけない気がしてならない、理由は解らないけど今は…。

「倉式！」

「ひゃっ?!…な、七海さん?…何で…?」

「頼む!早く来てくれ!しふおんが…!」

止める間も無く七海は緋織を連れて走っていた。背筋が冷える様な気持ち悪さが纏わり付いている。ある病室の前で漸く立ち止まると、七海はゆっくり扉を開けた。

「…しふおん…?」

ベッドに横たわる桜華は血の気の失せた顔で眠っていた。数名の医師や看護師がベッドの周りを囲む様に立っている。腕には数本の点滴があり、目を背けたくなる痛々しさだった。

「しふおん?!しふおん!!しふおん!!」

「眠ってるだけだ、命に別状は無い…。」

「何で?! 何で?! しゅおんどうしたの?! ねえ何が…?!」

必死に叫ぶ緋織を前に七海は言葉を詰まらせていた。と、1人のスタッフが遠慮がちに言った。

「容態は落ち着いていますから、ご家族が来るまで一度出て行って貰えますか?」

「…はい…。」

緋織を引き摺る様に廊下へ連れ出した。そんな事しか出来ない自分
がもどかしかった。

廊下に出てからも暫く緋織は震えながら涙を零していた。ややあつて七海が重苦しく口を開く。

「変な電話があつたんだ…しふおんが大怪我して、此処に搬送されたって…それで…」
「大怪我？」

その言葉には明らかに違和感があつた。見た所桜華に外傷も無くスタッフも慌てている様子は無かつた。それに電話でと言うのもおかしい。

「誰からの電話だ？」
「声は変だつたけど、着信は『澤田彩花』だつた、ほら。」

七海は携帯の着信履歴を表示させ此方に見せた。確かに少し前の着信履歴に『澤田彩花』と書かれた物が残っている。

「さつき緋織の携帯にもおかしい電話があつた。機械みたいな声で『澤田彩花と桜華しふおんが此処に搬送される』って言つてたな。」
「何なんだよ一体…胸クソ悪いな！現にしふおんは倒れてるし…一体誰が?!」

壁を殴り付ける音が鈍く響いた。それを遮る様に病室の扉が開いて数名の医療スタッフが出て行くのが見えた。桜華が心配なのだろう、抱き寄せていた緋織の手が宙を彷徨っている。それに気付いた一人の看護師が此方を向き少し躊躇いがちに言った。

「ねえ…あの子…一体何があつたの？」

「え？あの…どう言う意味ですか？」

「胃の中から殺虫剤の成分が出て来たわ、誤飲するには有り得ない量のね。」

「殺虫剤?!」

「ほら、最近の子ってイジメとか凄いでしょ？加減も知らないし…そう言うの心当たり無い？」

「いいえ…。」

「そう？まあ、気を付けて上げてね？それじゃあ…。」

七海が歯を食い縛るのが解った。握り締めた手がぶるぶると震えて、背中が総毛立つ程発せられるそれは、殺意にも似た強い怒りだった。

「しふおん…しふおん…しふおん…！」

うわ言の様に繰り返す緋織をそっと離すと、ふら付きながら桜華の元へ歩き、ベッドの脇にへたり込んだ。桜華の手を握ると涙をただただ零し続けていた。七海も側にあつた椅子に座ると、祈る様に頭垂れたまま動こうとしなかった。何度か緋織を宥めてもふるふると首を振って離れなくて、無理矢理離す事も当然出来なくて、何もしてやれない無力さが悔しくて、情けなくて仕方が無かった。どの位経っただろう、不意に桜華がゆっくりと目を開けた。

「…しふおん？」

「あれ…ひおだ…拓十君も居る。」

「しふおん！しふおん解る?!私の事解る?!」

「う、うん…解る…あ！そうだ！私ひおのお見舞いに…！」

「しふおん…！」

泣きながら緋織が桜華にしがみ付いた。桜華は最初驚いていたけど、

自分を心配していたのが解ったのかあやす様に緋織の背中を撫でて言った。

「ひお泣き虫、ほら、大丈夫だよ、ね？拓十君も心配掛けてごめんね。」

「…ん…。」

「良かったあ…しふお…。」

「緋織！」

「ひお？！ひお凄いい熱だよ？！ねえ、大丈夫？！」

気が緩んだのか、糸が切れた人形みたいに緋織がその場に崩れ落ちた。呼吸が弱く、抱き上げた体は火が点いた様に熱かった。

「ごめん…病室連れてく…。」

「ひお…。」

心配そうな2人を背に病室へと歩いた。やり切れない思いで溢れそうになる涙を必死に堪えて歩いた。

「緋織…。」

許せない…緋織をこんなにも苦しめる奴を…俺は絶対に絶対に許しはしない…。

仕事の休憩中に鷹臣さんから連絡が入った。彩花が倒れて救急車で病院に運び込まれた、と。

「弭さん、どうしたんですか？そんなに息切らして。」

「元氣そうじゃねえかよ…。」

ずるずるとソファに座り込んだ。彩花が伏せた顔をひよこりと覗き込む。

「…心配してくれたんですね。」

「そりゃ焦るって、いきなり倒れたとか聞いたらさ…。」

「だって、弭さん私の事好きじゃないじゃないですか。」

全身にギクリと嫌な寒気が走った。彩花は怒っても、泣いても居ない、少し寂しそうな笑顔だった。言い訳しようにも言葉が探せなくて目を泳がせていると、眉間をツンと突かれた。

「そんな困った顔しなくても良いですよ、だってこれゲームなんですから。弭さんは大人の人だし、そう簡単に私みたいな子供を本気で彼女にするとか、思っただけです。」

急に自分がガキみたいに思えた。彩花はまだ子供だから、適当に遊びに付き合っただけじゃ満足だろうと高を括っていた自分の事なんてとっくに見透かされていた。参ったな、バカは俺の方だ。

「ごめん…。」

「ぶふっ…これでも私、結構鋭いんですよ？」

「例えば？」

「んーっと…弭さん本当は今焦ってるとか？」

「何だそれ？」

彩花はからかう様に笑うと、ちよいちよいつと髪を耳に掛けた。ふと自分の左手が同じ仕草をしていたのに気付き、ばつの悪い気持ちで手を下ろした。

「焦る時のクセですよね？こうやって髪いじったり、耳搔いたり。」

「観察し過ぎ。」

「良いじゃないですか、その位。だって…うつ…！げほっ…！げほっ…！」

「彩花？！」

彩花は急に苦しそうに咳き込むと、ペットボトルの水を飲んでは何度か洗面台に吐き戻していた。少し落ち着いた彩花を俺は無理矢理ベッドへ押し込んだ。何やってるんだ俺は…そんな直ぐに体調が戻る訳無いのに、また強がりに騙される所だった。

「大丈夫なのに…。」

「駄目だ、横になってろ。」

額に手を当てると、彩花は少し顔を赤らめもぞもぞと布団に潜り、目だけを残して隠れてしまった。

「何照れてんの？」

「う…だって…。」

「ん？」

「…弭さんは慣れてても、私はそう言うの慣れて無いんです…！」

軽く吹き出してしまった。さっきまでやけに大人びてると思ったら、今度はこんな事で赤くなって子供丸出しで布団に潜ったりして、飽きないと言うか何と言うか。

「可愛いねえ。」

「だ、だからそう言うのは…っ!」

「いてっ…喋るから齒ぶつけたじゃん。」

「なっ…なっ…なっ…!」

彩花は顔を益々真っ赤にして目を白黒させていた。

「子ども扱い止めるのもありかな?今。」

「えっ…?!」

呆けてる彩花にもう一度キスをした。見たかったから、目は閉じないままで。

静まり返った部屋にキーを叩く音だけが響いていた。目の前に缶珈琲を差し出され顔を上げると幸水さんが立っていた。

「電気点けようね、輝詞君。目悪くなるからさー。」

「…すみません。」

気が付くとすっかり暗くなっていた。受け取った缶珈琲を口にする
と深い溜息が漏れた。

「悪いな、俺の勝手に付き合わせて。」

「全くです。俺1人じゃ流石にキツイですよ、チーフや他の皆にも
声を掛けた方が…。」

「いや…。」

はつきりとは見えなかったけど心なしか幸水さんの表情が強張った
気がした。この人は優秀だけどいつも何か引つ掛かる。信用されて
いない様な気分の悪さと言うか、距離を置かれている様な気がする。

「幸水さん、ちょっと聞き…。」

「あ！馬鹿！珈琲！」

言われて自分の持っていた缶珈琲を傾けてしまっているのに気付いた。
慌ててデスクの上を2人で拭いていると、幸水さんは顔を上げ
ないまま口を開いた。

「…何時如何なる時も響侑俐として倉式緋織を守れ、決して彼女に
手を出してはならない…。」

「え？」

「1年前俺の元に来た取引条件だ。現に…その保障で俺は此処に居る様なもんだからな。」

頭の中で情報を整理した。倉式を守れ、と言うだけならまだ理解出来るが、響侑俐としてって一体どう言う事だ？意図がさっぱり解らない。聞いた話ではあの2人はお互いを好きになるなど言われているんじゃないのか？状況にも寄るがそんな事したら益々響さんに気持ちが向くんじゃないのか？

「依頼人は…？」

「教えない。それに侑俐ちゃん以外になつた事もあるからねー。」
「ああ、俺にもなつてましたね、時々。」

鉢合わせした時は正直驚いて気絶しそうになった。ドッペルゲンガ
ーか何かかと思う程そっくりだったから。

「今回もそれだと思ってたんだけどね…。」

「それって？」

「要するに、あのお嬢様1人を守っていれば良いんだと思ってたんですよー俺は。」

幸水さんはデスクを拭き終わると暗闇の中を迷わずスタスタと歩いて給湯室らしき場所に入って行った。流石に暗かったのか室内灯がブンと音を立てて灯った。布巾を漉ぎ終わると幸水さんは何故か携帯を弄り始め、直後俺にメールが届いた。

「何ですか？普通に言えば良いじゃないですか。」

「ん？ま、良いだろ。」

首を傾げながらメールを開くと、その内容に目を見開いていた。

『倉式緋織だけじゃない このテストの参加者全員に 強烈な悪意を持った誰かが 危害を加えるつもりだ』

息を呑んで顔を上げると、幸水さんは続けて何かを送信して来た。

『唯一のイレギュラーは 当日に事故で交代になった七海拓十だった けど今はアイツも危ない』

「幸…。」

『下手すると 誰かが殺される』

飲み込んだ唾が喉をざらりと撫でる様に落ちて行った。強烈な寒気と共に。

90・絶望の淵と君の声

バイトを終えて足早に病院の廊下を歩いていった。桜華と澤田が入院した日、シヨックを受けたせいかわ院間際だった緋織はまた高い熱を出して倒れ込んでしまった。扉を開けようとして、ふと手が止まる。俺が緋織の支えであった緊張の糸を断ち切ってしまったのも原因なんだろうかと思うと心が重くなった。まだ苦しそうにしていたら緋織に何がしてやれる？俺が居たって苦しめるだけで…！

「…真壁さん…？」

「っ?!」

扉越しの声に息を呑んだ。すりガラスの向こうで僅かに動く影だけが見える。金縛りに遭ったみたいに体が動かなかった。ややあつて、声がまた聞こえた。

「違うの…？」

その声は弱々しくて、涙混じりに震えていて、鼻を嚙って寂しそうに戻る足音すら、心臓を揺さぶるには充分過ぎて。

「緋織？」

扉を開けると、自分でも判る位上擦った声で名前を呼ぶのがやっとなった。少し驚いた様に振り返った緋織は真っ赤に泣き腫らした目でこちらを見詰めていたが、扉が閉まった音とほぼ同時に涙を零した。たまらなくなつて緋織を抱き寄せた。まだ熱があるのか服越しでも判る位体が熱い。

「真壁さ…真壁さん…！真壁さん！」

「どうした？何かあったのか？どこか痛いか？熱が上がったのか？」

緋織は俺にギョツとしがみついて胸に顔を埋めたまま、何を聞いてもふるふると首を横に振るだけだった。熱のせいで不安になったんだろうか、それとも桜華の事が心配で…。

「緋織、とにかく座って、な？良い子だから。」

「…るから…。」

「ん？」

「するから…！良い子にするから…！良い子にするから行かないで！何処にも行かないで…！」

緋織の目は明らかに怯えていた。強い不安で一杯に埋まって、今にも壊れてしまふんじゃないかと思う程。泣きじゃくる緋織をベッドに座らせようとした時、開いたままの支給携帯が目に入った。放り出したままなのに違和感を覚え画面を見た瞬間、背筋に寒気とは別の何かが走った。

「何…だよ…これ…？」

メールボックスは大量のメールでぎっしり埋まっていた。

『差出人：響侑俐 件名：お前は1人ぼっちだ』

メールには御丁寧に画像が添付されていた。緋織以外の参加者が楽しそうにしている写真が何十枚と送られて着ていた。言葉すら出なくて携帯を床に投げ付けると、もう一度緋織を強く抱き締めた。

「…何処にも行かない…緋織は1人ぼっちなんかじゃない…俺が絶

対にそんな事しない！させてたまるか！」

「ごめんなさい…ごめんなさい…」

「謝るな！緋織は何も悪くなんか無い！このメールだって響が送った物じゃない！あの人はこんな事しないだろ？ずっと好きだった相手だろ？緋織が信じなくてどうするんだ？」

悔しくて涙が出そうになった。弱っている緋織にとってこれ以上の絶望は無い…一人でどれだけ辛かったか、思うだけで全身が引き裂かれそうだった。

「 鈴夢。」

「 鳳…どうして此処に…？」

「 彼女を連れて来い、鈴夢。」

「 え？」

「 病院側にはもう話してある。澤田彩花、桜華しふおん、倉式緋織をうちの管轄の病院に転院させる。ここはもう安全じゃない。俺の…いや、お前の手元でこの子を守ってやれ。」

鳳に促される様に緋織を抱き上げると、緋織は少しだけ安心した笑みを見せて体を預けて来た。目を閉じてそっと口付けて、その部屋を後にした。

9 1・初めて望んだもの

転院から2日程して、しふおんと澤田先輩が今朝無事に退院した。もう1週間も学校を休んでしまっている。担任の先生に連絡したら『話は聞いているからゆつくり休みなさい』とだけ返って来た。あんな事があつたのに学校はあつと言う間に元通りで、皆の事が心配だった。

「ノーブラパジャマとはまた無防備だな。」

「ひゃっ?!…間さん、気配消して入って来ないで下さいよ…。」

「ステルスー、あ、それと鳳で良いよ、俺も名前で呼んでるんだし。調子どう?このままなら明後日には退院出来そうって聞いたけど?」

鳳さんは私はしふおん達の所へ毎日お見舞いに来てくれた。寂しく無い様にとキャラメルハニースーさうさまで私にくれた。申し訳なくて、頭を下げながら言った。

「すみません、お世話になりっ放しで…あの、入院費とかお母さんに…わぶっ!」

「要らないから鈴夢に体で払ってやって。」

「か、体っ?!」

「鈴夢の事嫌いじゃないんでしょ?」

見透かした様に緑の目が私を捕らえて笑った。真壁さんの事は勿論嫌いじゃないし、凄く感謝してる。でも、だからって直ぐに気持ち切り替えたりはやっぱり出来なくて、侑俐さんが幾度と無く心を過ぎってはぐらぐらと揺れていた。

「鳳さんは、どうして私をその…真壁さんの物にしたいんですか?」

「鈴夢が欲しがったから。」

「そう言う事じゃなくて…!」

「鈴夢の体質は知ってるでしょ?」

「ええ、大体しか聞いてませんけど。」

「あいつは誰かを本気で想う事も、何かに執着する事も無かった。

と言うより出来なかった、だな。誰かの欲しい物が解るとか、俺からしてみたら喉から手が出る程羨ましい体質だけど、鈴夢にとっては自分も他人も化け物だと思うに充分だったんだろ。」

急に手を伸ばされて思わず身を竦めた。それに気付いたのかゆつくり、一歩ずつ近くに歩いて来る。じわじわ後ずさる内に背中にドンと壁にぶつかる感触があった。

「鈴夢は大事な友達で、能力だつてある。将来的には俺の右腕になつて欲しいとも思ってる。その鈴夢が君を欲しがってるの、生まれて初めて、かなり、めちゃくちゃ、物凄く、本気で。君を助けたいつて初めて俺に頼み事したの、解る?」

「あの…凰さ…?!」

「だから『はい』は?」

多分私は凄く真っ赤になっていた。だつてそんなにも真っ直ぐに好意を向けられた事なんか無かったから。それと同時にやっぱり嬉しかった。苦しかった時何度も助けてくれて、側に居てくれて、好きになつても許してくれると言ってくれた。私の中で真壁さんを見たい気持ち少しずつ育ってるのも確かだった。と、目の前一杯にピンク色が飛び込んで来た。

「何やってんだ?! 凰!!」

「いってえな、クツション投げるなよ。お姫様に当たるよ?」

鳳さんはそう言って私の頭をくしゃくしゃ撫でると病室を出て行ってしまった。ホッと溜息を吐くとふわりと肩にストールが掛けられた。顔を上げると何処までも優しい、でも少しムツとしてる眞壁さんの顔があった。

「ほら、ちゃんと横になつて、病み上がりなんだからさ。」

頷いてベッドに入ると、そつと額に手が置かれた。それから頬を撫でる手が心地良くて、堪らなく甘えたくなつて目を閉じて頬を摺り寄せた。

「仔猫みたいだな。」

「…にゃあ…。」

一瞬だけ手がピクリと強張るのが解つた。両手が私にそつと触れて、それから甘いキスが落ちて来た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8640v/>

いちごいちえとひめしあい

2012年1月10日07時52分発行